

日本への回帰

第 三 集



大学教官有志協議会
国民文化研究会 編

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編

日本への回帰（第三集）

—青年・学生運動の新しい展開—

は し が き

明治百年の記念すべき年である。だが「昭和元祿」と擲揄される泰平の中で、この一世紀間の巨大な民族的経験の重みを、真に精神の衝撃としてうけとめ得るかどうか。明治人のあのかなしき緊張の生は、大衆社会に埋没し規格化されてしまった精神にとつて真に生きた歴史であり得るのかどうか。造船量世界第一、自動車生産量世界第二位という。ハーマン・カーンは二十一世紀日本の国民総生産世界一を予言した。しかし、目の眩むような繁栄のかげに、果てしない精神の腐蝕と退廃が拡がっている。戦後日本が、歴史のほしいままな裁断と否定の上に出発した当然の帰結ではないのか。虚心に歴史に対しないものは、必ず歴史によつて復讐される。明治百年よりもロシア革命五十年に情熱を燃やす知識人の中から、真に日本人を動かす思想と行動が出てくるはずはない。

エンタープライズが大きな波紋を残して佐世保を出航してから兩日を出でずして、米情報収集艦エプロが元山沖で北鮮によつて拿捕された。それは一月下旬からのベトコンの大攻勢と気脈を通ずるごとく、無気味な国際緊張を生み出した。ソ連や中共からは安保を廃棄せよという恫喝がしきりに行われている。それに呼応するごとく、国内では非武装中立の空論が横行し

ている。昨年六月の中共の水爆開発の事実も、それに対抗するアメリカのA B M（ミサイル迎撃ミサイル網）配置もソビエト革命五十周年式典の赤の広場を埋めた巨大な弾道兵器の戦列も、現代がイデオロギーに武装された国家の自己主張の時代であることを語っている。先進諸国のナシヨナリズムが、国際機構を利用した間接的な現われを示すのに対して、中東戦争で勝利をおさめたイスラエルは、後進国のナシヨナリズムの原型を鮮明に示した。彼らは民族の原点エルサレムを奪回した。沙漠の果のキブツでは、「国のために」という一語で青年たちは想像に絶する苦難に耐えている。

学生運動の凶暴化が大きな社会問題となった。昨年九月の法政大学事件以来、矯激なゲバルト肯定思想が、学生間に公然と主張されるに至った。それは「合法、非合法は力によってきまる」と主張する教師集団によって指導された戦後教育の「成果」であった。アメリカ帝国主義と佐藤政府は一切の悪の根源であり、それと対決する一切の暴力はゆるされるといふ演繹的思想が、羽田や佐世保の学生を支えた思想であった。抵抗こそ最高の美德と教えた人々が、流された血に対して、かえりみて他を言うのは卑怯である。核アレルギーと戦争嫌悪の心理を組織すること、戦争への恐怖を煽ることによって、革命への恐怖を帳消しにすること、集団暴力のつみ上げによって、暴力革命への心理的地ならしをすること、佐世保事件はこういう実際のな

効果をおさめた。左翼の世論操作は成功した。機動隊に背番号をつけようという児戯に類した投書が大新聞に掲載された。エンタープライズという「黒船」の衝撃で、日本全体が集団妄想の中に踊った。国家利益を中心にした冷静な打算が最も必要な時に、婦女子の感傷論と、人権思想に保護された安価なヒロイズムだけが横行した。まさに亡国の兆である。誤った思想と学問が国家生活を崩壊に導く凶器であることを証明するに足る事件であった。

佐世保事件は、大学の自治にも大きな問題を残した。国有財産である九州大学の学生会館は、あらかじめ予告された暴動の主役たちの拠点となった。大学当局者たちが、その説得の限界を自認しつつ警察力による排除を拒否したのは何故か。その原因の一つは、治外法権の特権意識であろう。大学の自治は自治権を意味するものではない。それは近代国家の慣行によって、国民から黙認されているものに過ぎない。大学は国の法の外にあるという錯覚が支配している。社会主義国家の大学は、きびしい思想統制の下にあるという現実と、この過剰な自治意識はどこで調和するのであろうか。また最近における学園紛争の焦点が学生会館の管理問題にあったことの意味も明白になった。各大学の学生会館は大学の自治を楯として、二年後の安保改訂期には、職業革命家の橋頭堡となるであろう。大学の自治の拡大解釈は、日本の中に数百の「解放区」を黙認することになるであろう。

不法占拠を招いた第二の原因は、階級闘争の是認という学園の一般的ムードであろう。それが「国家権力」と闘う狂信的な若者を英雄にまつり上げてしまった。暴力しか信じないトロッキストの姿に、人々はイデオロギーの呪縛が人間性を抹殺する恐しさを読むべきであったのに。ともあれ、一群の意識分子は、教育の場としての国立大学から、数日の間完全にその機能を奪ったのである。「平和と民主主義」のスローガンが、「革命と共産主義」のシンニムであることに気がつかないヒューマニストは、恐るべき全体主義の到来を知らずして招いているのである。

明治維新は歴史的民族的根源への回帰によって危機を切り抜けたのであった。攘夷にも開国にも、尊王という明確な主体があった。国論分裂はその一点においてかろうじて支えられたのであった。明治の達成はまさに世界史的なものであったが、それは歴史の切断と否定によるものではなく、その連続と確認の上の実現された成果であった。憎悪と否定のエネルギーが生み出した革命とは異質のものであった。力と力の戦いの中から生れた国家権力は、所詮相対的なものである。それはより強い力によって倒されるのが宿命である。しかし、天皇の政治は、それとは次元を異にしたものであった。それは本来独断や狂信とは最も遠い、静かな祈りに支えられて来た。その、実証に耐え得る歴史的事実の究明は、日本の人文科学を学ぶ者たちの義務でもある。今や権力政治の横行と、それが宿命的に醸し出す底深いニヒリズムが世界を掩う

ている。人類史の停滞からの脱出に寄与する思想は、空漠たる無国籍の観念論からは絶対に生れて来ないであろう。

歴史参加ということは、必ずしも直接的な政治行動を意味しない。醒めた心で、明日の日本を凝視する努力は、「エンブラ反対」のシュプレッヒ・コールに自己陶醉するよりも遙かに困難な行為である。松陰先生が言われたように、「一朝の憤激」ではなく、「積誠」によって国を支えるという決意が今日程要請されることはない。雄々しい意志と、美しい心情をもつた一人の人物を育てるといふわれわれの運動が、かりそめならぬものであることを改めて反省せしめられるのである。

折しも激動の時期に、われわれは昨年度の合宿記録を世に送ろうとするものである。このささやかな冊子にこめられたわれわれの希いをくみ取って頂ければ幸いである。

終りに講義要旨の掲載を快くゆるして頂いた講師の諸先生方に厚く感謝申し上げます次第である。

昭和四十三年三月三十一日

大学教官有志協議会

社団法人国民文化研究会

三、日本のこころ

日本的世界像の系譜	等岡商業高校教諭	名越	二荒之助	169
聖徳太子「十七条憲法」	修猷館高校教諭	小柳	陽太郎	189
短歌創作の意味	若松高等学校教諭	山田	輝彦	211

年間活動報告

一年の歩み——雲仙合宿より阿蘇合宿まで

九州大学法学部四年	古川	修	235
-----------	----	---	-----

第十二回「合宿教室」のあらまし

岡山大学理学部三年	伊藤	三樹夫	259
-----------	----	-----	-----

歌集——学生、青年の作品より	285
----------------	-------	-------	-----

あとがき	307
------	-------	-------	-----

――本書は昭和四十二年八月、阿蘇において行われた

第十二回「学生・青年合宿教室」における講義を

中心として編集したものである――

■ 学問・人生・祖国

はじめに

この合宿教室が目ざすところは、みなさんの会場にはいつて来られる際に、左手のほうのポールの白い旗にスローガンが書いてあったことにお気付きになったと思います。曰く、「共に学び共に語ろう、学問と人生と祖国を」、その呼びかけの中にすべてがこめられていると思います。この合宿教室のみなさまに訴える思いを集約いたしましたスローガンの言葉について、些か敷衍してみたいと思います。

まず、「学問」ではありますが、私達はこの合宿教室においては、ある種の学会がやっておりますように、なにか私達独自の特別な学問体系をみなさん方に教え込むというのではございません。私達は既成の学問、学説、その成果に対し尊敬を払うに吝かではありません。しかしながら現在いわゆる学問と言われているもの、特に人文科学系統のそれでありますが、その在り方には大きな問題があると思います。端的に言えば、これは学問と学問研究者の人生観との乖離——その二つが離れ

てしまつてゐるということでもあります。一般に学問と言われるものは現象、事象の客観的分析のための技法というように受けとられておりますが、問題はそうしたあらゆる種の分析の技法が、複雑多岐を極めるこの人生の諸現象に対して真に生かされるか否か、その点になると、その研究者自身が自らの人生を真面目に生きているか否かという態度にかかつてくると思ひます。もし学問をするものの頭が良くて理論的にいくら冴えても、その人の人生に処する基本的態度にゆがみがあれば、かえつて客観的な知識は悪用されて、この人生を破壊する道具にならないとも限りません。

少しく飛躍いたしますが、その適例として私はマルクス主義を挙げ得ると思ひます。マルクスが歴史社会現状を観察いたしましたして、階級対立の存在を指摘したことは正しいでしょう。しかしながら階級対立というものは、膨大なる人生の一面にしか過ぎません。その一面に固執して、この階級対立を解決するためには階級闘争、階級革命、階級独裁の路線による以外ないと断定し、そのような実践を鼓吹したところに問題があります。マルクスが彼自身の生得的気質から、あるいは環境からそ

のような革命学説を唱えたことは、彼自身にとつてはやむを得ないところであつたかもしれませんが、このように人生を無限の闘争といがみ合いだとする人生態度には、私どもの人生観は到底同調出来ないのです。こういうふうには客観的事象の分析そのものはある真実の一面を持つていたにしても、それを生かす人間そのものの基本態度に歪みがあつた場合には、さきほど申しましたように、この世の中を破壊と混乱に導く恐れなしとしないのです。殷鑑遠からず、その姿はみなさん既にご承知のように、今日のソ連や中共の現実に現われていると思ひます。したがつて、そういう意味で、ここは学問理論の基礎となるべき人生態度、学問の態度、こうしたものを共に学び共に語ろうということをも第一の問題にしているのです。

第二に「人生」ということですが、旅行をするのも趣味娯楽に耽るのも確かに人生の一コマでありましょう。しかし、私どもがここに、共に学び共に語ろうとする人生は、単に自分一個の楽しみの人生ではなくして、他と共なる人生、お互いに国民協同体を形作っているわれわれの人生、しかも単に現在に生きていくわれわれだ

けのそれではなくして、長い過去に繋がり無限の未来に繋がる歴史的人生、このよ
うなものを探求の対象にしてみたいということでありませう。

最後に、「祖国」であります。祖国はわれわれの人間のよろもろの生活単位の中
中で、もつとも有力にして価値ある生活単位と申すべきであります。遠い将来
に世界国家が出現するならばともかく、当面われわれが、われわれの生命を托し、
われわれの理想を実現していく場合は、われわれの祖国においてほかにはないはずで
す。しかしその祖国については極めて無関心にあしらうという態度が、戦後の二十
数年間続いて来たように思われます。国乱れ国亡びてなんの個人ぞやと私どもは申
し上げたい。そのわれわれすべての運命を托する協同体であるところの国家の運命
を若い諸君がいかに受け止めるべきかということ、いろいろな角度から肉迫し論
求していききたいのです。この合宿の入口に立っている白い幟のぼりにはそういう意味がこ
められているのです。

——「合宿教室」開会式における川井国文研副理事長の挨拶より——

「国」について考える

—わが民族一人びとりに課せられた
輝やかしい宿題に取りくむために—

小田村寅二郎



はじめに

- 一、現実の「世界」はすべて「国」を単位にして動いている
- 二、未来は「国」が解体して「世界国家」か「世界連邦」になるという考え方について
- 三、「われわれは日本人であるよりも前に人類の一員である」という考え方について
- 四、日本も「国」らしい社会に、日本人も「国民」らしい人々にならなければいけない
- 五、「国」と「国」とのつきあいの四つのケース―真の独立とは何か

はじめに

昨年の合宿教室では、「世の中を良くする」には、結局「人」の問題に帰着するという考え
方から「人」ということを中心にして、「人の心」を考え、とくに「つきあい」の本義につい
てお話を進めました。そして、「人の上に立つ人」の心がまえ、「友とのつきあい」「母と子
のつきあい」「読書を通じての古人とのつきあい」「われわれの祖先たちの天皇とのつきあ
い」などに触れたのです。今日はその続きのつもりで「国」ということを中心にして、「国」と
「国」との「つきあい」に及びたいと思います。

表題に掲げました「わが民族の一人びとりに課せられた宿題」というその「宿題」は、一言
にして申せば、世界の諸国民は、この地上の世界に恒久平和が到来することについて、心から
「睿智の出現」を待望している、ということに尽きます。それは、単に戦争をなくす、という
程度のことでなくて、もつと人心の本質に迫る問題についてです。それは、東洋文化、西洋文
化のすべての積み重ねの中から、人々の心の不安と迷いに応えてくれるものが生れ出ることを
待っている、ということにもなりましょう。仏教、キリスト教、回教をはじめ、ユダヤ教、ヒ
ンズー教その他宗教一切を含めまして、世界文化の再検討が要請されてきているようです。東
洋人、ことに日本人も、この世界的要請に加わる用意を、もうそろそろ心の中にはつきりと確

立しなければならぬ時だと思ひます。

一、現実の「世界」は、すべて「国」を単位にして動いている

いま世界は、自由主義陣営と共産主義陣営とに大きく分かれ、最近はその上に、多極化の様相が強くなつてきました。しかし、世界がどうなるうとも「世界中の諸国民」は、いつも自分の「国」を、各自の生活の拠り所にし、また各自が胸に懐く理想を実現しようとする場合でも、自分の「国」をそのための不可欠の基盤と考えています。

従つて何処の国でも、政治家や学者が、「世界、人類のために……」と口にしていても、自国の存在までも犠牲にすることは全くあり得ません。いつも自分の「国」が立派に独立を保てることを当然の前提にして、それを語っています。東洋の言葉に「身を殺して仁を為す」というのがありますが、人間個人は、自己の生命を顧みず人を救ひ、公のために死ぬことを尊いこととして考えてきました。しかし国の場合には、古今東西を通じて、「身を殺して仁を為す」といつて自国を滅亡させてよろしい、などという考え方は全く存在しなかつたのです。

とにかく「国」とはそういうものでありますし、現在も将来も、「自国は決して滅亡させはならないもの」という点で、少しも変ることのないものと思ひます。すなわち、地上の人々にとって「国」は、掛け替えのない生活基盤であり、その生死を托する社会生活上の究極

の価値と見るべきもの、と言うのが正しい、と私は考えます。

二、未来は「国」が解体して「世界国家」か「世界連邦」になるという考え方について

「国」が一切の基盤であるというならば、世界国家とか世界連邦の出現を夢みても仕方のないことか、という問題がでてきます。私の結論を先に申しますと、まさにその通り、それを夢見ることは人々の勝手ですが、実現の可能性は殆んどない、と断言したいと思えます。

この世から戦争がなくなればどんなにいいことか、と地上の人々は、長いあいだそれを考えて続けてきたに違いありません。殊に近代になってからは、人命尊重が改めて強く叫ばれるようになりましたが、その正反対に近代兵器の進歩、原子爆弾・水素爆弾などの発明によって戦争に対する人々の恐怖は目を追って熾烈なものになってゆきました。それにもかかわらず、この地上では、人々のあいだに意見の衝突の絶え間がなく国家間の利害も相反することが多いので、不幸にも戦争や局地戦争がいつまでも続き、それがいつ果てるともなく繰り返えされています。従って人々は、なんとかして地上から戦争を絶滅させるべく、色々の知恵を考え出します。その一つが、いわゆる世界国家とか世界連邦という考え方になって出てきたものでしょう。この考えは要するに、「国」が個々に存在するからいけないので、「国」そのものを無くしてしまえば、地上の人々はいやでも応でもお互いに仲よくするに違いない、もし万一にも不

法者が出てくれば、その「世界国家」の行政力や警察力で鎮圧すればいいではないか、という考え方のようです。ちよつと聞くと大変耳ざわりがよくてなるほどと思われませんが、私は、これは合理主義が生んだ一片の理屈、別の言い方をすれば、人間性を無視したナンセンスにすぎないと思うのです。ではなぜそうなのか、少し説明しておきましょう。

ここで考えられている世界国家とは、一つの国が極度に強大になつて、その他のすべての国々をその支配下に置いた、いわゆる統一国家を指しているのではなく、デモクラティックな合意によつて生まれるものを意味していると思います。そうしますと、その世界国家は、地上にあつた旧国家のすべてをその構成単位とする、自治的または連邦的なものにならざるを得ません。しかしその場合、限らない難問題が出てきますが、その一つに言葉の問題があります。

もともと旧国家は、それぞれ言語を異にし、その固有の言語によつて各自の民族文化を生み育てて来た国々です。従つて新しく出来る世界国家が、旧国家のうちの何処の国の言語をもつて、その政府用語とするか、一体それを誰れがどうやって決めればいいのか。当然そこには收拾すべからざる混乱が起つてくるにちがいない。各民族にとつて自分の国語を取り除かれることはとりもおさず、固有文化の否定及び将来の死滅を意味します。従つて自国語を政府用語に採用させるために猛烈な競争がおこつてくるのは火をみるよりも明らかです。しかもそれには民族の生死がかけられていますから陰惨なまでの凄じさが伴うことは疑いありま

せん。この深刻な問題をどう解決するのでしょうか。たとえ一度は決定にたどりついて、各地から統出する不満、そして行政の停滞には、一体どう措置するのでしょうか。

では全然別の言葉を新しく作ればいい、という人がいるかも知れません。しかしそれは人間生活、人類文化と言語との深いつながり、人生の基本問題を忘れてしまった暴論です。言葉というものは、お互いの意志、感情を「大まかに」伝達し合う「音声」とは違って、人間の心を細やかに伝え合う「精神文化」なのです。動物には「音声」しかありませんが、人間には「言葉」がある。そこに動物との決定的な違いがあるのです。従って一つの新しい言葉を作るとしても、作る人、作る民族の個性は必ずその新しい言葉に反映するはずです。すると、他民族にはもうそれだけで受け入れにくいものになってしまいます。

かつて一八八七年ポーランドのザメンホフという人が発表したエスペラントという国際語がありました。基本語としてはゲルマン語ロマンス語系の単語を採用したもので、苦勞して作ったものでしょうが、結局人々の心に定着しませんでした。新しい世界語を作るなど口では言っても、言語は物質文化ではありませんから、全く不可能という方が正しいでしょう。かりに新しい言葉が人々の心に定着するとしても、それがさらに無学文盲の人々にも自由に駆使できるようにするためには、何百年、何千年という気の遠くなるような長い年数を必要とするのではないのでしょうか。新しい言葉を作るといふことがいかに暴論であるか、おわかりいただけだと思います。

います。

さらに世界国家なるものの行政長官のポストに、どこの国の人になるのか、これもまた大變な問題になります。みな自分の所から送り込もうとして死力を尽した競争が繰り広げられること、必定です。そしてひとたびそのポストを得た人間は、全人類に平等の政治をしなければならぬわけですが、決してそれができるとは思いません。なぜならば、どこの国でも同じですが、いまの世の中では、選挙民を大切にしない国会議員は殆んど見当たらず、このことを考えただけでも、この間の消息はおわかりになると思います。要するに自分をそのポストに推薦してくれた旧国家には、手厚い行政がほどこされ、反対した旧国家にはどうしても冷たい仕打ちがなされるに違いありません。このことは実はデモクラシーにおいて避け得られない「必然悪」なのです。まことに残念ながら今日までの世界史の歩みは、この「必然悪」について、あまりいい知恵が浮かばず、ましてやこれを克服し得た実証などは一つも示していません。デモクラシーもまた、人類にとつては、決して万能のものではないようです。

なお以上申し上げた言語の問題、デモクラシーの必然悪などのほかに、世界国家や世界連邦が存立、持続できない理由としては、まだまだいくらでも指摘することができます。ともかくわれわれ人間は、その長い経験に照らして、一国の中ですら、知能の差、勤勉度の差などから人間を平等に処遇できないでいますが、まして皮膚の色、勤勉の度合、能率の度合、文化伝統の

深淺など実に千差万別の諸国民を集めてデモクラシーでの合意を求めるといつてみても、どうにもなるものではなからうと思われれます。結局強い者、氣の利いた者が中心に立つただけのことではないでしょうか。要するに世界国家とか世界連邦などというものは、一部の人間の頭の中で構想されただけのもので、現実には、各国が各国として存在し続けることの方が、ずっと明朗であり、争いも陰性化しないで済みます。人類の發展は、個々の民族との相互切磋によつて得られたもの、言いかえれば健全な競争心が不可欠の要素であつたことを忘れてはいけなと思ひます。要するに諸国民は、お互いに自国の言語を大切にし、言葉にまごころを托して個々の人間を磨くと共に、「国」と「国」との交わりを正しくするように努力して、この世から戦争をなくし、同時に武力に訴える戦争に代わる、思想による他民族征服の戦争をもなくすように努力すべきだと思ひます。日本の知識階級が、ともすれば「国」は人類史上の過渡的なものだから、「国」のために生命を捧げるなどとはもつてのほかだ、と考え勝ちであつたことは、もうこのあたりで飄然として反省すべきことではないでしょうか。いつまでもそれに終止符が打てないようでは、やがて世界の諸国民の緊張した国家経営に立ち遅れ、物質文化の繁榮にもかかわらず、精神的混迷の泥沼におちていくおそれが多分にあると思われてなりません。

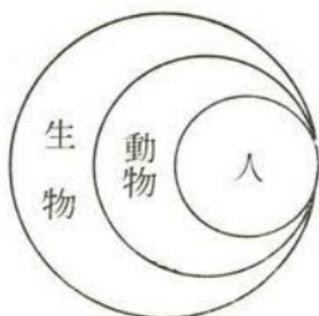
三、「われわれは日本人であるよりも前に人類の一員である」という考え方について

世界国家の問題に引き続いて、ではわれわれは日本人であるより前に、人類の一員であるという考えも間違っているかというご質問が出されてくることでしょう。折角問題を掘り下げたことですから、この点についても、ここで触れておくことにします。

先ずはじめに大変素朴な視点からお話をはじめます。

上に書いた三つの輪の図は、生物の一部分に動物があり、またその動物の一部分に人がある、というごく当り前の説明です。この図を基にして少しお話ししたいことがあります。

人類といっても人といっても同じですが、ここでは人と名づけます。人というのは、図で見ると、「動物」の輪の中の一部ですから動物である、と説明することもできます。しかし一方鳥や獣なども同じく動物ですから、人間の問題を考える時には、人とその他の動物がどう違うかをはつきりさせておく必要が生じます。また人や鳥獣など動物に属するものも、生き物という意味では生物の一部をなしており、草木など植物という生物と、動物という生物との区別も明確にする必要があります。ではそれらの違いはどこにあるか。生物学的の説明は別に



して、私なりの常識的な分類をすれば、さきにも申しましたように、人は言葉を語ることができるが、動物も植物もそれができない、また人と動物は声を出すことができるが、植物はそれができない、と考えておけば十分であると思います。

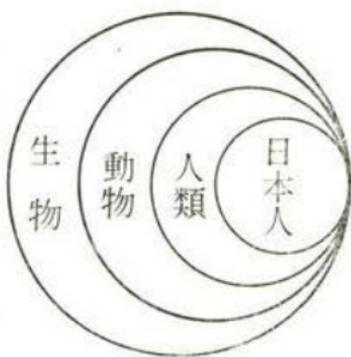
猫・犬・馬・牛・猿なども人間の言葉がある程度はわかるようですが、それは、言葉を話すことができません。そこに動物と人との厳粛な区別があります。大昔のことはわかりませんが、人は言葉を話し、やがて文字を書くようになりました。現代でも文字を持たない民族はありますが、文字を持つているかどうかは、人間という資格の本質的なものではなく、言葉を持つているかどうか、ということが人間としての資格を決定づけます。

そこで注目しなければならぬことは、地上の人間は、生まれて間もなく、必ず自民族または自国の言葉を自然に話し出す、（これについては「日本への回帰」第二集で詳述しました）という点です。人はすべて何国語かを話す動物として人たり得るわけですから、人類の一員であるということは、民族の一員、または国家の一員であるがゆえに人類の一員たり得ているということになります。

この意味では、「われわれは国家の一員または民族の一員であるよりも前に、人類の一員である」というのは間違いになります。「われわれは国家の一員または民族の一員であるがゆえに、人類の一員となった」というのが正しい思考なのです。そこで、「自分たちは日本人であるよ

りも前に人類の一員である」という考え方は、間違いを起す危険があります。なぜかといいますと、さきにも触れましたように、日本人という立場で自分を把握すると、いかにも自分自身が小さなものに縛られてしまうように見え、人類の一員という立場に自分を立てて見るとほっとしたような解放感を覚える、というのでは人生の事実を照らしておかしいのです。そういう考えにもとづいて前記の言葉を用いる場合は、その人の「国」への取り組み方は誤まつているというほかはありません。

しかしそうかと言って、私は、日本人であることが「先」で、人類の一員であることが「後」だ、といわねばならぬとは思いません。ということは、上の第二図のように、「日本人」の



一人一人が、「人類の一員である」という言い方は、あたかも、われわれ日本人が「動物の一員であり」、「生物の一員である」ことと同じような意味を持つ説明になるのです。従って、われわれ日本人の一人一人にとって、「日本人であること」と「人類の一員であること」と、「動物の一員であること」と、「生物の中の一員であること」との四つの説明が、同時に成立することになるのです。ただこのさい是非ともはっきりさせておくべきことは、さきにも申したように、われわれ日本人は、（ということとは日本語を話し合う人々は、という意味で）、日本人であれば

こそ人類の一員になっており、英語国民は、イギリス人またはアメリカ人であつてこそ人類の一員になつてゐる、ということです。もつと端的に言えば、

「われわれ日本人は、日本人でしかあり得ず、それ以上にも、それ以下にも、それ以外にもなり得ない者である」

ということですが、世の中では、国籍の移動によつて別の国の国民になることは出来ませんが、その場合でも日系米国人、日系ブラジル人というように、何代かのあいだには「日系」という冠詞を消し去ることはしないのです。なおついでに申しますが、「日系」という言葉が白色人種の眼から見て黄色人種に対する軽蔑の意味を持つた時期もあつたのですが、相手がどう見ようと、こちらは日本民族の良き個性を身につけて、堂々と対等につきあえば良いわけです。すなわち「日系人」という語感を卑屈に感じる必要は毫もないわけで、誇らしく「日系」を名乗るべきものだと思います。それがかえつて異民族・異国民から尊敬される要点で、個性のない無国籍者のような人は決して尊敬されることがありません。「日系」のことは余談になりましたが、要するに、「ある国民であること」を離れた「普遍的な人間」というものは、この世に実在しないことをよく確認しておくことが必要でしょう。

四、日本も「国」らしい社会に、日本人も「国民」らしい人々にならなければいけない

以上お話した所からしても「国」を基盤にして一切を考えることは、そこに住む人々にとつては決して選択の対象となることではなく、あるがままのごく自然なことであり、母親から生まれた子供が、母との深い縁と、その慈愛のもとに生育していくのと似たものを感じさせます。それは、国民一人びとりにとって、その出発点における動かすことのできない厳粛な人生事実でもあります。それゆえに、国民は心一つにしてその「国」の発展を祈り、お互いに個人の犠牲を払い、時には祖国のために尊い個人の生命を捧げてまでも、「国」のために計らなければならぬものと思えます。

もし人々が、祖国の伝統と文化を大切にするという、「人そのものの基本的姿勢」を忘れ果てて、外来のイデオロギーに魅了させられてしまい、自国の伝統と文化に軽蔑の眼を向けるようなことが起きますと、これは問題が全く別のことになります。自分の親がどんなに欠点が多くとも、親であることを否定するような者には、誰れ一人敬意を払ってはいけません。それと同じく、祖国の過去が気に喰わぬからといって父祖の地に生まれて来た者が、自分は父祖とは縁もゆかりもない。全く別の新しい国を造るのだ、といくら言いふらしてみても、国内の同調者は別にして、他国の国民が、その人々に敬意を払ってくれるでしょうか。ただわずか

に、日本を自分の同盟国にしたいと思つてゐる国々が、自分を有利にしたいという功利的立場から、一応はお世辞をいうかも知れませんが。時にはその国自身の功利的理由から、激励や物質的援助もしてくれるでしょう。しかし、その場合でも、その国の人々も一人の人間の心情としては、決して尊敬の念などは心に宿さなれないと思ひます。親を軽蔑する者、父祖の「国」に唾するものは、「人にして人でない」ということにもなりかねないからです。

それと同時に、一部の国民が同じ国民に対してお互いに階級が異なつてゐるからといつて憎悪の念で対決しようとする考え方にも問題があります。国民が心を一つにするように努力する所に「国」そのものの存立の基盤があるのに、その国民の中に、決定的な階級的対立があるという勝手な前提を立て、その前提を押し進めて、現指導層を「敵」と断定するのは、一体「国」のためはどういう意味を持つのでしょうか。「国」を保持する第一条件に相反することにはなりません。さらに、現在そのような思想をもつてゐる人々の説明する所によりますと、自分達の革命が成功した暁には、憲法が改正されて一国一党になる、ということですが、それは私がいまだのべてきた国民が心を一つにするということとは根本的に異なるのです。一国一党とは、図で画けばピラミッド型の政治組織です。下から順々に選挙の積み上げがあつて、ピラミッドの頂点が決められるから、きわめて民主的だ、という説明ですが、果たしてそうでしょうか。指導者はひとたびその頂点に就任しますと、その全体的機構の上に安住し、強大な権力に物を

言わせて政治に臨むのが常でしょう。それはこれまでの数々の実例が示しています。

実はわれわれ日本人は、大東亜戦争の時にすでに不十分なものではありましたが、まぎれもなく一国民党の政治を経験し、随分不愉快な生活に当面したものでした。「大政翼賛会」「翼賛議会」という名目的には二本立てで、その実一国民党の体制で数年間過ごし、遂にそのまま敗戦に突入したのです。この時の一国民党は、戦力増強、国民の一致団結のために、という触れ込みで、上意を下達し、下意を上達するには、これ以上良いものはない、という趣旨でした。ところが、実際にはじめてみますと、上意はたしかに徹底して下達しました。忠実に従わないものは、次々に摘発されていったからです。ところが肝心の下意の上達などは、全く有名無実になったばかりか、下意はいつも抑圧されるだけになったのです。看板に偽りあり、と人々は心に感じました。しかしもう時はすでに遅く人々の心情は自然に萎縮し、人間お互いに猜疑し合つて生きていく、という破目に追い込まれていったのです。

明治のはじめに発布された五ヶ条の御誓文は、当時も多くの人々に大切に仰がれていましたが、その第一にある「広く会議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ」という政治の大本は、この一国民党式の大政翼賛会のために、全く空文に化したのです。そればかりか、一国民党における必然的結果として、行政と立法との二権は実質的には両立し得なくなり、行政権がそのまま立法権を意味するほど強大無比のものになっていったのです。さらに、軍事と政事を厳格に分離すべ

しという旧憲法の肝所までも無視され、政府すなわち軍部というものになってしまいました。

こういう社会機構のもとでは、——共産国では、軍も政府も実質は一つ、政党は一国一党ですから、この大政翼賛会以上の上意下達、下意抑圧となること必至——人間生活は、極度に萎縮するばかりで、大衆生活にとっては暗黒の世というほかはなかつたのです。五ヶ条の御誓文の第三にある「官武一途庶民に至ルマデ各々其ノ志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス」という「人の心をあきあきさせてはならない」というすばらしいその御趣旨も、そこでは有名無実になってしまったのです。いまお話したように、われわれ日本人は、すでにいまから二十五年前に、数年間にわたって一国一党の愚劣さを骨身にしみて知っている筈です。それなのに、四十才以下の人たちならまだしも、その体験者である四十台五十台六十台の知識層が、こうまで学界、言論界、政界で革命への方向に狂奔しているというのは、一体何を勘違いしていることなのでしょう。不思議にさえ思えることです。

五、「国」と「国」とのつきあいの四つのケース——真の独立とは何か

さて、視点を再び「国」と「国」との関係に移していきます。われわれ日本人は、ここ二千余年もの長いあいだ、戦塵の気配から遠ざかっていたためか、わが国では多くの人たちが「自分たち日本人こそ世界における平和の使徒である」と自負しています。そしてベトナム問題を

はじめとして、戦争のすべてについて共産側をかばい、自由陣営を侵略者と断定しているようです。それと平行して、国内の論調を見ますと、戦争を「悪の極致」のように考え、武器一つを見てもそれが戦争用の凶器に見えるらしく、自衛隊という国防護の機関についても、感謝の気持ちなど全く見られぬのみか、それがいつ他国への侵略的軍隊に早変わりしはしないかと、国民の相互不信、戦争アレルギーの症状に取り憑かれてしまっています。

そこで私は、このさい「戦争と平和」の基本的な問題について、とくに「国」の立場とそれとの関係を考えてゆくことにし、ここに「国」と「国」との「つきあい」について、四つのケースについて述べることにしました。

その第一は、二つの国のあいだに隷属関係があるときはどうかということですが、一体国家間には軍事力の大小、経済力の多少などさまざまな差異がありますから、二つの国のあいだに、一見平和が保たれているように見える場合でも、実は一方が他方を強圧していたり、隷属させていたりすることが起こります。こうした関係に目をとめますと、このような二国の関係は戦争状態でないからといって、平和状態というわけにはいきません。「戦争」でも「平和」でもない、いま一つ別の「隷属状態」ともいえるべきものです。すなわち、隷属国の側から言えば、理不尽な相手に対して、戦うことすらできないのですから「戦争状態以下の悲惨な情況」にあることとなります。終戦直後の占領下の日本など、平和克服以前ではありますが、戦争がないと

いう点ではその典型的な例でした。それを忘れてしまつて、ただ単に戦争状態でなければよいと思つて、平和をさがし求めては片手落ちになりましょう。「平和なつきあい」らしく見えても、平和とはほど遠い隷属関係は避けたいものです。

次に第二のケースというのは、戦うことができる力を持ちながら、戦争への用意を怠らず、しかも、平和を支える担い手をもつて自らを任じている国々のことです。アメリカ、ソ連、イギリス、フランス、中共など、核保有国はその部類にはいると見てよいでしょう。これらは戦争と平和を両手に握つて、その姿勢に立ちながら他国に平和を呼び掛け得る国々です。かつての日本は間違いなくこの部類にいたのですが、いまは全く転落してしまいました。

次に第三のケースは、弱い国々のことになりましたが、自国の独立が脅かされるようなときには、屈従よりは死を、死の前に戦いを、という深刻悲壮な決意に立つて、平和よりはむしろ進んで戦争の道を選ぶ国々です。明治年間における日清・日露両戦役に臨んだ日本は、まさにこれでありましたが、現在の世界で、独立国といわれる弱小国は、大部分この第三の立ち場を取つていると見て差し支えないでしょう。

最後に第四のケースはといいますと、これは、世界にただ一つ、史上にもあまり類例を見ない、現在の日本のことになります。この第四のケースは、自分では自国を守り通す決意がなく、そのために国民自ら心身を鍛えることもせず、平素の訓練をいい加減にしていて、いざ国

外からの危機が訪れたら、どこかの国に守ってもらおうという、およそ度外れた虫のいいことをいつている国です。しかも功利に徹してじつとしていながらまだしも、諸外国に向つて、世界は平和であれ、と呼号しているのですから、その勝手な言い分に耳をまともに傾けてくれる国々が果たしてどれだけあるか疑いなきを得ません。

このように見てきますと、日本が「つきあう」外国は、以上の第一から第三のケースの国々であることがはつきりしてきます。国交が正常であるためには、その二国のあいだに、力の差や富力の差があつても、お互いに相手を尊敬し合う心がなくてはなりません。従つてその点について双方ともに常に謙虚な反省が必要になります。それゆえ、「お前の言っていることは独りよがりだぞ」といわれれば、それ相応に反省してみる雅量がなければいけません。それがなければ、次第に相手から、相手にされないうになつていくわけで、いわば「孤立化」していただくことになります。その「孤立」は、「独立」とは趣きを異にするもので、独立を守つていように見えても、風前の燈（ともしび）のような頼りのないものにすぎません。自らの手で独立を確保していない者は、個人の場合と同様、国家の場合でも、やがてその発言権は形式上はともかく、実質的には相手に一人前に扱かわれず、軽蔑の眼で見られるようになりましょう。日本がいつまでも虫のいいことを言つて、なおかつ世界の平和を呼号し続けられ、日ならずして、近隣諸国はもとより世界の人々から笑いの種にされること必定と思ひます。

数年前、フランスの軍事評論家のガロアという人が、中共が原子爆弾の実験をした直後のことでしたが、毎日新聞に数日間寄稿して、日本の安全保障を論じたことがありました。彼がいうには、日本が自国の安全を保とうとするには三つの方法しかない。一つは自ら核を持つこと、二つはアメリカ（自由陣営）の核の傘の中にはいること、三つは中共（共産陣営）の核の傘の中にはいること、というのです。この第一番目は、私がいまお話しした四つのケースのうち第二のケース、自主的発言権を自らの手で確保する強国になる道であり、二番目と三番目は、私の申した第一のケース、独立国に見えてもどこかの国の隷属国、平和に見えても戦争状態以下のものになるケースにはば該当します。ガロアは軍事評論家だけあって、私が申した第三のケース、脅威に対抗するに無手勝流の精神主義は、これを問題外にしたわけでしょう。しかしガロアのこの所論は、私の申した第四のケースに閉ぢこもっている日本に対して、また日本人に対して、適切な忠告を意味していると思われませんが、同時に、こんな判り切った忠告を寄せられたわが国民は、大恥をかかされたのも同然であったことに気付く必要があります。

しかしそれとは別に、このガロアの言う所には、われわれ国民が迂闊にできない重要な指摘が含まれています。それは、核が開発された以上、地上の国家は、その安全保障と、その独立を守り通すためには、核を持つか、核保有国と盟約を結ぶか、いずれかの方法を取らなくてはならなくなつた、という指摘であります。自分では核は持たぬ、友好国の核戦力が自国の港湾

に入港するのもいやだ、といって依然として第四のケースを固執している日本国民に、「それでも君たちは独立を保てると思つてゐるのか」という鉄槌を下したも同然なのです。恥は恥でいいとしても、日本の存立を考え、深慮をめぐらすのは、われわれ日本人自身の問題ではないのでしょうか。

そうなると、日本が、自国の独立を保持していくためには、少なくとも現在の憲法——攻撃的武器は持たぬという立て前の——憲法を持つ限りは、自由陣営か共産陣営のいずれかに組みしないう限りは、如何とも致し方がないわけで、あえてフランス人ガロアに叱正されなくても、そんなことは、はじめから自明のことであつたのです。

そこで、わが国も、国内の問題は別にして、事、国防に関する限りは、どうしても自由陣営に組みするか、共産陣営に組みするか、いずれかが必要になつています。それは、日本人自身で選択すればいいことですが、「国と国とのつきあい」の本道からいって、いずれに組みするにしても、いい加減な「つきあい」方では長続きしなくなります。日本が自由陣営に今後引き続いて依存しても、いままでのようなわけにはいかなくなるし、また、日本が共産陣営に鞍替えしてみても、苛酷な分担と負担がわれわれ日本人を待っている、と考える必要があります。なぜかといえますと、現在の日本は自由陣営に属しながら、国防をその陣営——近くの国では、アメリカと韓国と台湾と比国——に依頼しながら、それらの国の国防には積極的に寄与しな

い、という一方的な虫のいい立場（前記第四のケース）をとっています。しかしこの立場がきわめて不自然で、日本が功利的すぎるということ、他の自由陣営の国々が百も承知していること、他の諸国も決して満足しておりません。不公平だからです。ただ日本がこういう立場を取っているのは、もとはといえば、日本国憲法に由来していることであり、その日本国憲法なるものは、実は占領軍諸国が押し付けたものであることをそれらの国々は知っていますので、いまの所では、今更どうしようもないことだ、と内々不満ながらも、見送っているだけのことなのです。こういう不公平のままでは、日本を同盟国の一員として心から尊敬するわけにはいかないでしょうし、他日、日本がこの問題について自覚を新たにしてくれる時期を、心待ちにしているというのが、真相と思われれます。いかなれば、私がさきに指摘しました第四のケースから一日も早く脱皮してくれ、憲法を改正しなければそれができないなら、せめて心の持ち方としては同盟国の国民らしく一致すべきではないか、ということ、そこにはじめて「まともなつきあい」が再開され、世界の一員としての「国」の姿に日本が立ち帰ることになりましょう。同盟国の苦難には率先して身を挺し、その苦難の克服に従事しよう、という気構えが必要になってきています。憲法の是非とは別に、そうした「つきあい」の心情が、あるべき姿に戻ることが近い将来に必らず必要になってくるにちがいないと私は思っております。

では、日本が共産陣営に鞍替えしたらどうか、といいますが、国と国との「つきあい」の常

識は、その場合にも少しも変わることはありません。いなそれどころか、共産陣営と自由陣営の内部における社会秩序の相異を見ればわかるように、共産陣営では同盟国の中の一番の強国がつねに他国に指揮を取つて、その命令を強要するのが常です。従つて、その場合日本は後輩国としてかなり苛酷な試練に耐えねばならなりません。具体的には、対自由陣営諸国との戦争で矢表に立たされることは、地理的条件から言つてもほぼ間違いないことと思ひます。

そう氣付いてみれば、終戦後わが国で誰れも彼れもが口にしてきた、あの「民族の独立と平和」という共産陣営から出されたスローガンは、いま一度よく考へてみる必要があるとす。そのスローガンは、その言葉自体においてはたしかに正しい標語でしたが、わが国がアメリカの隸属から離れて、中共・ソ連を兄貴にしよう、というのでは、到底「真の独立と平和」は達成できるわけがありません。ましてやそのスローガンの続き言葉として、「民族の独立と平和を」かちとるために、「国内体制を資本主義から社会主義や共産主義に取り替へる必要がある」「それをしなければ、その目的は達せられないのだ」というに至つては、言語魔術も、度を過ぎることになります。しかし、なすべきことには、この言語魔術に、多くの同胞が魅せられてしまつていゝのがいまの日本です。

考へて見てください。子供たちでもわかることですが、「独立」というのは、もともと自国と他国との關係をいふ言葉です。他の国々が、その国を「独立」の状態にしておかない場合は、

明日にも「独立」は消え失せてしまうかも知れないのです。そういう他国との関係においてのみ意味を持つ「独立」という言葉の意味と国内の機構や体制の種類などは、本来少しの関係もないではありませんか。他国との「共存」ということならば、国内機構の種類が問題になりますが、――類は友を呼ぶという点で――「独立」のことは全く別問題です。

それよりも、ほんとうに真剣に独立のことを考えれば、国内の混乱を常に最低限に止めるように努力するのが、常識ではありませんか。古い言葉にも、兄弟が家の中で相争うのは、外侮を招く原因といわれ、虎視たんたんとしている諸外国に取り囲まれた中で、国内を血で血を洗う革命に持つていくなどということは、「国」の「独立」を願う人の、最も排すべきところであります。それは世界の歴史が示す所でもあります。もとより現実の日本には沢山の矛盾が山積みしています。資本主義社会が生み出す弊害、富力と権力の結びつき、人の上に立つ人の心構えの問題など数限りなくあります。しかし社会主義社会が展開している実情もまた、ピラミッド式全体主義機構に安住して、指導者が権力に物を言わせて政治を一方的に強行している有様には、さらに補正しなければならぬ無数の政治的弊害が目につくのです。どの主義の国でも、政治に関することは、理想とはほど遠いのが実情でありますから、それゆえにこそ、国民一人ひとりの発言が政治に直接に反映するようにしておく必要があります。平和とは、せめてそうして守り続けられるものと思えます。

とにかく今日の世界は、色々の不安に包まれています。どこの「国」でも、自国の「独立」が安泰であるとは言えないでしょう。日本も無防備国であるだけに、一層その感を深くします。しかし、日本にとってこの二十余年の歳月は、真実の独立に一步一步近づいてきた歩みであったことは、衆目の見る通り事実です。アメリカへの依頼度は、年毎に減少してきているといえます。それでもなお、真の「独立」ということからは、決して好ましい状態ではありません。しかし仕方のないことです。ところが、ここで日本が今日までの同盟国の相手を取り替え、アメリカと離れてソ連・中共と結ぶことは、せつかく半人前ながらも独立国に近づいてきたわが日本を、ふたたび初歩の段階―隷属の段階から出発し直すことを意味はしませんか。国内革命の強行は、国力の消耗を当然伴いますから、その直後は同盟国の物心両面の援助を必要とします。また新しいつきあい先きと、初歩から始めることになるではありませんか。そこに気がつけば、ここで日本国内に革命を起こすことは、実は、日本の独立と平和を約束するものではなく、全く正反対のものを日本にもたらすものと見るべきです。われわれ日本人は、もともと、もつと聡明な国民でした。しかし物を考える基準に迷いが生じては、その聡明さも雲で蔽われてしまうのかも知れません。なんとかお互いに注意し合つて、日本民族本来の聡明さを一刻も早くこの日本国中に取り戻したいものです。

(国民文化研究会理事長)

《編者後記》

紙面の都合でこの講述は、以下省略するが、講師はこの後イギリスの新聞デーリー・ミラーが日本の造船工業力を絶賛した中で、日本人の『愛社精神』『集団忠誠心』にふれていることをとりあげ、現代の日本人が、自分たちの集団に対する忠誠心は強固であるが、もっと大切な『国』への忠誠を忘れていることを述べて次のように結んだ。

「私が今日のお話で、『国』についてお話しましたのも、所詮『個』を捧げる対象としての具体的な『全体』を探求してきたもの、『個と全』についてのより正しい把え方に取りくんだものでした。今日の日本における思想の混乱は、結局『何を全体と見るか』ということの混乱だといえましょう。人々が敗戦後全体的目標を失って、つい身近かな利害関係だけで『個』と『全』との問題を安易に解決させてきたことが、実は思想混乱の大きな背景であったことに気付きたいと思います。」

今上天皇の御歌について

夜久正雄



御歌会始

大正天皇の御歌

今上天皇の御歌―その一

今上天皇の御歌―その二

カット・皇居・道灌堀の桜（亀井孝之撮影）

御歌会始

今上天皇の御歌につきましてお話いたしますが、プリントを用意いたしましたので、御覧ください。今日まで新聞その他に発表されました今上天皇の御歌は——（天皇のお詠みになった歌は「御製」と申上げるのが正しい言い方ですが、やや堅い感じが致しますので、御歌また御歌・御歌という言葉を用用させていただきます）——東宮、すなわち皇太子時代の御歌をふくめまして、私どもの調べですと、総数三百十五首になります。（青山新太郎氏謹編「今上陛下御製集」に拠る）三百十五首と言えは相当数の歌ですが、御存じない方もおありかと思われまますので、きょうお話したいと思う御歌を抜き出してプリントにしたのです。天皇の御歌は、その歌の生れた時代と深い関係のあるものですから、その時代々々の重要事件を註記してみました。年代を追ってお話申上げたいと存じます。

今上天皇の一番最初のもは、大正十年新年御歌会始（歌御会始）の御歌です。プリントを御覧下さい。

大正十年（一月十日、新年御歌会始）

社頭暁

御製

かみまつるわか白妙のそての上にかつうすれゆくみあかしのかけ

皇后宮御歌

つたへきく天のいはやもしのはれてあかつき清しいせの神かき

東宮御歌

とりかねに夜はほのほのとあけそめて代々木の宮のもりそみえゆく

三月三日―九月三日、東宮欧州諸国御巡遊。十一月四日、首相原敬暗殺さる。十一月

二十五日、東宮、摂政に御就任（御年二十才）

新年に宮中で行われる儀式に「御歌会始^{おうたかいはじめ}」という行事がございます。宮中の新年最初の歌会

ということで、天皇の御主催とうかがっております。この行事は、古くからあつた儀式でした

が、明治二年宮中恒例の新年の儀式と定められまして、明治七年からは国民一般の詠進^{えいしん}―この

歌会に歌を提出すること―をお許しなさいまして、今日までずっと継続して行なわれてきたの

でございます。この間約百年間になりますが、宮中の喪の時のほか、日清戦役に明治天皇広島大本営に行幸中の時をのぞいて、毎年欠かさず行なわれております。（住吉大社社務所発行「新年御歌会始歌集」参照）昭和二十年一月戦況不利で国家危急の時も、昭和二十一年一月終戦直後の苦難の時も、欠かせられることはありませんでした。この儀式が、天皇と国民の心之歌によつてつなぐという深い交感の場であったからでありましょう。この「歌会始の儀」の模様は、戦後、最近のことですが、テレビで放送されましたから、ご存じのことと思います。イギリスの桂冠詩人エドモンド・ブランデンという方なぞも非常に感動して「この日本で見ることの出来た莊嚴と伝統の遵守のうち、飾りけのない率直な皇居内の歌の祭こそは、日本人の特殊の心境に私をしてふれさせてくれるものだ」（「日本遍歴」より）と言っております。私どもは誰でも、一定の書式によつてこの御歌会に詠進することができます。昨日の慰霊祭で進行をつかさどられた関正臣さんが「国民同胞」に、われわれに詠進をすすめる文章を書いておられますから、それを読んで是非、詠進していただきたいと思ひます。私なども不精いたしまして、御製についての研究をしながら、今日まで詠進を怠つておりましたが、関さんの文章を読んで詠進の決心をいたしました。詠進しても入選しなくつてはつまらないとお考えになられる方もありでしょうが、明治天皇についてわれわれのうかがっていることを申し上げますと、明治天皇はその儀式の場で読みあげられた歌（いはゆる「よせんか預選歌」）以外の歌にもすべて目をお通

しになつたということです。明治天皇の御製に

千万の民のことばを年毎にすすめさせても見るぞたのしき

という歌があります。このことをおよみになられたものであります。

このようにして、私どもの衷情を天皇にお伝え申上げる道がひらかれてゐるわけで、同時に天皇の御歌が発表されるわけですから、国民の心と天皇の御心とが通いあう場が存在しているのです。こういう場がないと仮定いたしますと、天皇と国民との関係は、単なる制度上の関係か、権力関係にすぎなくなつてしまふということも考えられましよう。新年に宮中で歌会始が行なわれるということは、日本の国の本質に根ざした重大な行事であると思ひます。

大正天皇の御歌

さてプリントにもどります。ここに「御製」とありますのは、天皇の御歌の意味で大正天皇の御歌です。戦前の表記法で濁点がつけてありませんで濁点をつけて読んでみます。

かみまつるわが白妙しろたへのそでの上にかつうすれゆくみあかしのかけ

「かみまつる」は△神まつる▽「白妙しろたへのそで」は△白い御装束の袖▽のことで、神をおまつりするので白地の御衣を着ていらつしやつたのでしよう。その袖のうえに——これは「袖のうえに」と字余りに読むのでしよう。「かつ」の意味がむずかしいのですが、この場合は、△一

方では・同時にVとか入すでに・もうVとかの意味でしょう。天皇が、神主さんの着るような服を着て神をおまつりになられるのでしょうか。電気なんかは消しておまつりするのでしょうが、長いおまつりの行事の中で、神にささげたともし火の光が御自分の袖の上を照らしながら次第にうすれてゆく。明け方近くなつてゆくためでしょうか、あるいは光がほそくなつてゆくのでしょうか、ともし火の光がうすれてゆくのです。なんとなく淋しい、非常に厳粛な感じのする御製です。

大正天皇というお方のことにつきまして、私ども子供の時に、天皇は氣違ひであつたといううわさ話を聞くことがありました。大正の末年、あるいは昭和の初年であつたかも知れませんが。今日のように天皇の御家庭生活が新聞やテレビで報道されるというようなことの全くない時代のことです。皇室のことは雲の上のことで天皇の御動静については公的なこと以外、何ひとつ知らされなかつたような時代ですが、天皇が狂気であるといううわさ話はどこともなく私ども子どもたちの耳にも入つてきました。しかもそれは、天皇の御病気を憂うるという調子でなく、むしろ天皇の権威を失墜させるような悪意と嘲弄のひびきさえともなつていたように思えます。大正天皇が、精神薄弱で、狂気であられたのかどうか、私はよく存じませんが、御晩年、精神病に近い御病気になられたということは事実だったのでしょう。しかし、大正天皇の御病気についてささやかれるうわさ話には、もうあの、明治天皇が御病気におなりになつた時の

全国民の御平癒祈願といったようなものは少しもなかったように、感じられました。

私は後になって、明治天皇の御製を拝誦し、今上天皇の御歌を拝誦し、さらに大正天皇の御歌をよみまして、いまのこの御歌に至りましたとき、深い、衝撃に似た感銘を受けました。子どもの時、脳病の天皇といううわさ話を聞いたその天皇の、何という悲痛な、激しい御歌だろうと思うと、申し訳のないような何とも切ない気持になるのです。

大正天皇は漢詩をおつくりになりまして、立派な漢詩集がのこされましたが、やまとうたにも御心をそそがれまして、数々の御歌がございます。御歌集の方は、「大正天皇御製歌集」となっておりますが、「昭和十九年三月二十七日奉旨、昭和二十年十一月編成」とありまして、戦後に刊行されました。したがって戦時中までは、大正天皇の御製として発表された歌は「新万葉集」という明治以降の歌を集めた歌集の別巻・宮廷篇などに見られる歌会始の御歌だけでした。その最後にこの御歌があるのです。その翌年の歌会始からは大正天皇の御歌はありません。御病気がひどくなられたのか、あるいはその年から御病気になられたのではないかと思えます。そして、現在の天皇陛下が、当時皇太子でいらっしゃったので、摂政宮になって政治の中心に立たれるようになられたわけです。

大正天皇に対する当時の国民感情をふりかえってみますと、自分も一度はそういう嘲弄的な気持になったように思われますので、本当に悲しむべきことであつたと思うのです。大正天皇

が天皇の御地位にあつて直接国の統治にあたられたのは、約十年間ほどですが、この御治世は、第一次世界大戦をはさんで明治の緊張が弛緩し、国民思想の混乱を生じた時代とみられませんが、その罪は大正天皇の御病気に帰することはできないでしょう。むしろ、悲痛・厳肅なこの御製をみますと、責めらるべきは、天皇を嘲弄するような当時の風潮そのものにあつたのではないのでしょうか。天皇と国民との関係は精神的なものですから、目には見えませんが、微妙で敏感なものでありましょう。天皇に対する国民の感情が、天皇の御健康に影響しないと誰が言えましよう。それは、一家の中で、子の親に対する感情が親の心にどんなはたらきをもつかを反省してみても推察がつくでしょう。当時の国民の天皇に対する感情に天皇の御病気の原因があつたのではないかという推測も、あなたがちあやまりともいえまいと思えます。大正天皇の、この沈痛厳肅な御歌のどこに狂気がありましよう。天皇は深く国を思われ厳肅に神をまつられたのです。御袖の上にうすれゆくともし火のかけをみそなわせられておよみになられたこの御歌をよんで、私は戦慄に近いものを感じました。

「大正天皇御製歌集」によりますと、前年大正九年の御製には次のような御歌がございます。

夕雨

かきくらし雨降り出でぬ人心くだち行く世をなげくゆふべに

猫

国のまもりゆめおこたるな子猫すら爪とぐ業は忘れざりけり

「人心くだちゆく世をなげく」とうたわれ、「国のまもりゆめおこたるな」とよまれたおことばの、強く悲痛な御調子には、国と民とに御心をそそがせたまう深刻厳肅な御心をあおがしめられるのです。しかもここには孤独の悲痛ささえもたたえられてるように感じられるのです。もし、この御心痛の結果の御病気であったとしたら、それを嘲弄した当時の風潮をいまさう何と反省したらよいのでしょうか。いまでも「天皇」とか「天皇陛下」とかいうべきところを若い人が無意識にテンチャンと言ったりするようですが、そこには、国のいのちのけがれゆく恐ろしいきざしがひそんでいると、私は考えます。

今上天皇の御歌 — その一 —

御製の次の「皇后宮御歌」は、

つたへきく天のいはやもしのばれてあかつき清しい世の神がき

です。貞明皇后の御歌です。

次の「東宮御歌」——これが今上天皇の御歌として発表された一番最初のものです。

とりがねに夜はほのほのとあけそめて代々木の宮のもりぞみえゆく

「とりがね」は八鶏の声Vです。暁をつげる鶏の声に、夜はほのほのと明けはじめて代々木

の宮の森がだんだん見えはじめる。普通だつたら八見えくるVと言ってしまふところですが、代々木の森を遠くにおおぎみるので「みえゆく」と表現せられたのです。感覚的事実にしたがいがながら、未来への展望と期待とをあらわす、実に精妙な言葉づかいとされています。くわだてて出来ることでもありませんが、表現の御苦心がないというものではありません。感覚と思想とが一体になっています。こういう表現は、天稟とも言えますので、天皇の御歌が代作でないことはこの一首でもわかるのです。この時、今上天皇は御年二十才です。ちよつと、くらべるのははばかられますが、諸君と同年輩になるわけです。

「代々木の宮のもり」ということも、きわめて象徴的な意味があつたとみられます。「代々木の宮」は勿論「明治神宮」ですが、大正十年の御歌で、神宮は前年の九年に竣工してあります。当時のことは存じませんが、九年の十一月三日、すなわち後の明治節（昭和二年制定・二十三年廃止）の日には盛大なお祭りがあつたのではないでしょうか。そのすぐ翌年の新年に発表されたのがこの御歌になるわけです。ですから、今上天皇が歌会始に初めて発表なさつたこの御歌が神宮の森を詠みこまれたということは、神宮の竣工という歴史的な経緯にしたがつた自然のことでもあつたでしょうが、何かそれだけにとどまらない深い予言的な意味さえ感じられるのです。今上天皇はその後ことあるごとに明治天皇をおしのびになられる、父天皇として大正天皇をお思いになられることは勿論でしょうが、政治の上につきましては、ことある

ごとに明治天皇の御心持を仰いでおられるように思われます。大東亜戦争の開戦のときの有名な話があるでしょう。開戦の時の最終決定の閣議で今上天皇は、明治天皇の御製

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ（明治三十七年「四海兄弟」）を朗誦なさったということです。また、この合宿の講義の一番最初に小田村先生がお話になられた昭和二十一年「年頭の詔書」というのがありますが、普通「人間天皇宣言」という妙な名がついていますが、それは昭和二十一年の年頭に発布された詔書ですから、終戦から四、五ヶ月しか経っていません。「新日本建設に関する詔書」とも言われて、敗戦後の国民の進むべき道を示された詔書ですが、その冒頭は、

「茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ明治天皇明治ノ初国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク、」

として五ヶ条の御誓文をかかげ、

「敍旨公明正大、又何ヲカ加ヘム。朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ国運ヲ開カムト欲ス。」

とあります。今上天皇は、敗戦という国家興亡の岐路に立たれて、明治天皇の明治維新に際しての御心持をおしのびになつて、日本復興の基礎をそこにおこうとなさつたのです。今上天皇が国家興亡の重大時期に明治天皇のお考えをおしのびになられて、政治の動向を定めようとなさつたことは、こういう事実によつてうかがわれますが、そのことが、不思議にも、東宮御歌

に象徴されているのです。

大正十一年（一月十八日、新年御歌会始）

旭日照波

皇后宮御歌

青海原なみをさまりてのほる日にむつみあふよのさまをみるかな

摂政宮御歌

世の中もかくあらまほしおたやかに朝日にほへるおほうみのほら

今上天皇の御歌について（夜久）

大正十一年、今上天皇の御歌は、「摂政宮御歌」というふうになっています。前年「摂政」に御就任になられたからです。この年、大正天皇の御製は見えませんが、御病気の故であろうと思われまゝ。今上天皇は御年二十一才で「摂政」として国家統治の地位におつきになられ、その後の狂瀾怒濤の世界の情勢に対処して、今日まで国民を指導してくださっていらつしやるのです。「朝日にほへる」という、これは△照り映える▽という意味で、朝日の光が海面に照り輝いているのです。しかも、「おだやかに」ゆつたりとした充実した自然の光景で、この「おほうみのほら」を御覧になられて、「世の中もかくあらまほし」世の中もまたこのようであつてほしいというのです。情・景ともさわやかな悠々たるもので、雄大な感じがあります。つぎ

にすすみます。以下、今上天皇の御歌に限ります。

大正十二年 摂政宮御歌

暁山雲

あかつきにこまをとめて見渡せば讃岐のふしに雲そかかれる

(大正十一年、四国にて大演習)

九月一日、関東大震災。十一月十日、国民精神作興に関する詔書。十二月二十七日、虎の門事件

あかつきにこまをとめて見渡せば讃岐さぬきのふじに雲くもそかかれる

今上天皇はお若い時から乗馬が御得意だったということ。「あかつきにこまをとめて」は、御乗馬の歩みをおとめになつてということ。前年四国で軍の大演習があつたという事です。今上天皇は大元帥陛下として大演習を統率せられたのでしよう。戦前戦中は、御乗馬軍装の御写真がありました。凛然たる御勇姿がうかがわれます。「讃岐ふじ」は何という山ですか。ちよつと忘れましたが、—ああ、そうですね、(聞いている人からの指摘があつて) 飯野山Vのことだそうです。讃岐—香川県の富士山という意味でしょう。「雲そかかれ

る」は八雲がかかっているV。雄大な御歌です。この御歌は新年に発表されましたから、恐らく前年の御経験による御歌と拝されますが、この年の九月一日には関東大震災という大地震による大災害がありました。詳しいお話をする時間はございませんが、私は小学校の時のことで東京で生れましたのでおぼえております。人心が非常に動揺いたしました、大火災その他の災害となったのです。昨日ちよつと山本勝市先生とお話をしていた時、山本先生が言っておられました、もし今日、日本の大都市に関東大地震のようなあつた大地震が起つたとしたら、治安は一体どうなるだろうか心配していると云われるのです。関東大震災の地震そのものは、この前の戦争の時の東京の空襲にくらべれば、さしたるものではなかつたでしょう。あれだけの空襲に当時の日本国民はともかくも秩序を保つことはできたのですから、深い国民的連帯感情があり、利己心の抑制があれば、関東大震災はあそこまでゆかないでもすんだでしょう。それでも、ああいう悲惨な災害となつたのですから、今日もしあつた地震がおこつたらどんな災害になるか、思うだに恐ろしいことです。利己的感情の抑制のきかない社会では、些細なことも大災害のもとになるのでしょう。震災後の十一月十日の「国民精神作興に関する詔書」は、大震災という惨事に対する反省と同時に大正時代そのものに対する反省をふくんでいると思われまゝ。しかし、十二月二十七日には、国民の一人が摂政宮を狙撃するという大事件が起りました。事ここに至つたのですが、これはことなきを得ました。摂政宮の当面なさつた当時の国

情がどういうものであつたか、多少は想像することができません。こうした国情を背景にして、御歌を読むと、感銘さらに深いものがございます。いまここでお話申上げる御歌は、みな歌会始の折に発表されたものですから、新年の御発表で、恐らく前年の御経験にもとづくものでしょう。プリントを読むときに、前年度の事件につづけて、御歌を読んでください。

大正十三年 撰政宮御歌

新年言志

あらたまの年を迎へていやますは民をあはれむ心なりけり

大正十四年 撰政宮御歌

山色連天

たて山の空に聳ゆるををしさにならへとそ思ふみよのすかたも

「あはれむ」は△愛する▽という意味ですが△愛する▽では日本の情緒の表現にはなりません、「あはれむ」のままでおわかりでしょう。「たて山」は富山県の立山です。空にそびゆる立山のように、時代人心もあれと願われる御心の、そのままには、世の中はすすみませんでした。

今上天皇の御歌 — その二 —

昭和十七年

連峯雲

峯つづきおほふむら雲ふく風のはやくはらへとただいのるなり

前年、昭和十六年十二月八日、大東亜戦争開戦。この御歌は、戦闘意志の鼓吹よりもむしろ平和の持続または克服の強い御念願を示すものではないでしょうか。この一首の御製を例示して、天皇の軍国主義、好戦主義を非難した言論がありました。愚の骨頂です。

昭和十九年

海上日出

つはものは舟にとりでにをろがまむ大海のはらに日はのぼるなり

「舟にとりでに」という切迫した調子、一首二文となつてゐる構成、「大海のはらに」という字あまり。当時、軍人の先輩の方が、苦戦の兵士のうえに御心をよせられた御歌だと思つておられました。国のために、「天皇陛下万歳」と叫んで、名もなく外地に倒れていった将兵

のねばり強い民族のいのちが、この御歌に反映していると言えないでしょうか。

そして、二十年に、日本は敗けました。長い苦しい戦いの果てです。次の御歌は最近、ある経緯を以て発表せられたのですが、「終戦後の御歌」という二首の御歌です。「終戦後の御製」というのは、勿論仮の題でしょう。御製そのものは無題で、戦争終結の御心もちをおよみになったものであります。

今上天皇は、戦争の終結に当って非常にお心を労されまして、ほとんどおからだを投げ出すような御姿勢で日本を終戦に導かれたのでございますが、その時の御言動はいろいろな本に出しておりますから、よく読んでいただきたいと存じます。二日目にこの合宿で御挨拶くださった太田耕造先生はいわゆる終戦内閣の文部大臣をなさいます、その間の経緯につきまして直接に御体験なさったお方です。先生の御文集などは是非お読みながいですが、そういつた天皇の政治上の御言動にあらわれた御心持が、この二首の御歌にあらわれていると思えます。

昭和二十年

(終戦後の御製)

爆撃にたふれゆく民の上をおもひくさとめけり身はいかならむとも
身はいかになるともいくさどめけりただたふれゆく民をおもひて

この御歌のことにつきましては、まえに「国民同胞」に書きましたので参照していただきたいと存じます。時間がありませんので、要点だけ申し上げます。天皇は戦争を終えられるに当たって、本当に、命を投げ出して戦争を終えられ、戦後マッカーサー元帥と会見なさったのですが、その時の天皇の御言葉が伝えられております。今日ではよく知られておりますが、天皇は、私の身はどうなつてもよろしい、ただ日本国民の復興を助けてほしいという意味のことを言われたということです。そして、戦争は自分の責任であると。当時占領軍の総司令官であったマッカーサー元帥は、恐らくは天皇の戦争責任を問いただすようなつもりで天皇に会ったのではないでしようか。ところが天皇は、戦争は自分の責任である、――事実においては先ほど来申し上げましたように、天皇は国と世界の平和を祈りつづけられたのですが、国民の綜合意志として決定せられた開戦は、天皇の詔書によつて公布され、天皇は「戦ヲ宣シ」たのです。これは事実ですが、敗戦後のあの時点において戦争は御自分の責任である、自分はどうなつてもよろしい、国民・民族の生存を援助してほしいと言われたという天皇の御心持は、これは日本の歴史に私どもが刻みこんで永世に伝えなければならぬことです。私どもは、この天皇のありがたい御心持を感じて日本復興に立ち上つたのです。こうして「天皇陛下万歳」と叫んで死んだ同胞の心と日本復興に努力する心とはつながることが出来たのです。同年の御歌に

折にふれて

海の外の陸に小島にのこる民の上安かれとただいのるなり

という御歌もあります。これは国民すべての祈りでもありません。終戦の詔書の後半をプリントに用意してきましたのも、あわせて読んでいただきたくと存じます。敗戦の困苦から日本人が立ち上った力の源となつたものは、実に、これら天皇の国民をおもいたもう御心、御言動に対する国民の感激であつたのです。国と民とのために身を投げ出された天皇の御心にならうようにと国民が奮い立つたのです。これが今日言はれている日本の奇蹟的復興の基礎にあるということ、私どもの体験的事実です。諸君は直接の経験がないでしょうから、当時のことを本で読んだり、あるいは御両親などからお聞きになり、当時の御製、詔書をお読みねがいます。終戦の時、皇居前に集つて涙した民衆の心から、終戦の詔書をラジオで聞いて慟哭した民衆の涙から、今日の日本は生れ出たのです。

終戦の詔書の後半

朕ハ帝国ト共ニ終始東亜ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ対シ遺憾ノ意ヲ表セザルヲ得ズ。帝国臣民ニシテ戦陣ニ死シ職域ニ殉ジ非命ニ斃レタル者及ビ其ノ遺族ニ想ヲ致セバ五内為ニ裂

ク。且戦傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ更生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ。惟フニ今後帝国ノ受クベキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラズ。爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル。然レドモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス。

朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ爾臣民ト共ニ在リ。若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ、或ハ同胞排擠互ニ時局ヲ乱リ為ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フガ如キハ朕最モ之ヲ戒ム。宜シク挙国一家子孫相伝ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信ジ任重クシテ道遠キヲ念ヒ総力ヲ将来ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ国体ノ精華ヲ発揚シ世界ノ進運ニ後レザラムコトヲ期スベシ。爾臣民其レ克ク朕ガ意ヲ体セヨ。」

今日は八月十一日です。あと三日で詔書発布の十四日、終戦の日を迎えます。ここに当時をしのび心をあらたにして日本の興隆に力をつくそうではありませんか。敗戦というほとんど未曾有の危機に当って、天皇のお言葉のもとに涙をふるって日本の復興に立ち上った時のことこそ、日本の永久の生命のしるしの一頁であったのです。終戦の時に明治維新に立ちかえつてみたように、現下の困難に当ってふたたび終戦時に立ち返って決意をかためるべきでありましょ

う。

昭和二十一年、二十二年の御歌を引用して本稿を終ります。戦後は歌会始の御歌以外にも数
数の御歌が発表されるようになりました。

昭和二十一年

松上雪

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

一月一日、年頭詔書

戦災地視察

戦のわざはひうけし国民をおもふ心にいでたちて来ぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる民の心をうれしとぞ思ふ
国をおこすもとるとみえてなりはひにいそしむ民の姿たのものし

皇居内の勤勞奉仕者二首

をちこちの民のまる来てうれしくぞ宮居のうちに今日もまたあふ
戦にやぶれし後の今もなほ民のよりきてここに草とる

十一月十六日、当用漢字表、現代かなづかい発表（内閣訓令）

昭和二十二年

あけぼの

たのもしくよはあけそめぬ水戸の町うつちのおともたかくきこえて

折にふれて

老人をわかき田子らのたすけあひていそしむすがたたふとしとみし

冬枯のさびしき庭の松ひと木色かへぬをぞかがみとはせむ

潮風のあらしにたふる浜松のををしきさまにならへ人人

五月三日、「日本国憲法」施行

御静聴を感謝いたします。△講演速記をもととして後半部分を補足しました▽

（亜細亜大学教授）

■ 合宿教室における講義

指導者の教養

— 経史の学 —

太田耕造



「経学」について

「史学」について

「経学」について

本日は指導者の教養ということを中心に、私の考えを述べたいと思います。諸君はやがて社会に出ればいろいろな方面で指導者になられるはずで、ところが現代の学校教育では、指導者としてどんな教養を身につけなければいけないかということに殆んど教えてくれない。だが昔の我々の先輩は二つの点で指導者としての教養を受けていたのです。その一つは「経学」、これは宇宙と人生の意義をあきらかにする哲学とでも申しましょうか。大体昔の儒学というものがこの中に入ると思います。もう一つは「史学」、これは治乱興亡の跡をたずねて一つの哲学、或は政治学をつかむことです。こういう二つの点を昔の指導者は身につけたわけです。

これはヨーロッパにおいても同じです。大哲学者プラトンは「政治家は哲人であれ、思想を持って」と教えました。それから諸君もご承知でしょうが、ギリシャの黄金時代をすぎた、歴史あつて以来の大政治家だったといわれているペリクレスは、アゼンスの民に富を説かなかつたと伝えられています。やはり国家の生命についての、しつかりした考えを持つていたからでしょう。我が西郷南洲も「政府の本務を墜しなば商法支配所と申すものにて、さらに政府には非ざるなり」と誠められています。政府という、今日では国家と考えていい。本務というのは使命です。商法支配所と申しますのは平たく言えば商事会社、「国家がその使命を見失つてしま

うと国家は商事会社になるのだ」ということです。

ご覧の通り、いま日本の指導者は残念ながら教養を欠き、哲学を持っていない。そして唯一の政治的関心事といえ、どうしたら国民を安楽死せしめることができるかということにある。数年前から言われているように、日本の繁栄は世界的な驚異の的となっている。これは事実であります。しかし反面においては、外人の批評はまた非常に鋭い。「魂のない繁栄である」とか、「あらゆるものがあつて日本がない」とか、「日本人は経済的動物である」とか言った具合です。さらにドゴールが我々を代表している一国の総理大臣に対して「トランジスターの商人である」と冷笑したというのも有名な話ですが、これらには必ずしも酷評とだけは言いきれないところがある。だが国民はこれらの批評に対してどれほど反省しどれほど憤慨したか。日本がこれほどまでに外国から馬鹿にされた言動が横行するというのは、恐らくは空前のことではないかと思ひます。さらに現代のいわゆるマスコミの波に乗っている人気のある作家や批評家は日々戯論或は空論を書き、事実それ自身の姿を正しい立場で伝えるという人は実に少い。これは日本にとって実に大きな憂いであり、民族的な悲劇であるとさえ思ふ。これをそのまま放任しておくことは民族の一員として決して許されない罪悪だと思ひます。国家が侮辱されても、国家の主腦者が冷罵されても「そんなことは俺には何の関係もない」というような人はきつと国家滅亡の瀬戸際まで来てもわれ関せず焉という態度をとるにちがいない。或る

人が「罪というものに二種類ある。一つは罪を犯すこと、すなわち泥棒とか、詐欺とかいういわゆる犯罪、もう一つは当然すべきことをしないこと、これも罪である」と言っておりますが、そういう意味からすれば、傍観者は国を亡国に追いこんでゆく民族的な罪人だとも言えるのです。

では国が減びる原因は一体何か、諸君は旧約聖書にアモス書という一章のあることをご承知だろうと思うが、アモスという人は紀元前七〇〇年、孔子や釈迦よりも古いころ、ユダヤに生まれた極めて身分の低い牧者であります。国を救う天命を受けていわゆる予言者になった人です。そのアモスが声を励まして自国民に亡国の原因を訴えた。「パンの饑饉に非ず、水の饑饉に非ず、エホバの言を聴くことの饑饉なり。」エホバの言、即ち神の言ということですが、これはユダヤの建国精神ということ、神自身ということを指しているのです。つまり神を忘れたからユダヤが減びたのだ。亡国の原因は建国精神である神を忘れたからだ。こういうことをアモスは言ったのです。建国精神を堅持するか否かによつて国の生命が左右されるということとは広く国家興亡の原理を示したものであると思えます。

明治維新のことは見ましてもこのことがよくわかるのです。明治維新の志士達は革新原理というものを決して外側には求めなかつた。国家興亡の原理を内においてつかんでいる。即ち日本の建国精神でありました「一君万民」、この一君万民の精神に復帰するということを期して、

君と臣との間を疎外している一切の幕府的な勢力を打倒することに精力を集中したわけです。志士達は国家の萎靡、腐敗、墮落の原因はその国家が勃興発展した原動力である建国精神を軽視、忘却するところにあると考え、この国内の悪を一掃して善を呼びおこす、ここに革新原理を見ていたのです。私はさすがに維新の志士であると思います。彼らは国家の傾くの風馬牛のように見えている民族的罪悪にはどうしても我慢ができなかったのです。

南洲先生も「正道を踏み国を以て斃るるの精神なくば外国交際は全かるべからず」と言っておられますが、国家生活というのは道義を背骨として、たとえそれによつて国家が倒れるとも悔いがないという心構えがあつてこそ、そのまま命を永遠に維持することができ、発展せしめることができるのです。

日本の産んだ偉大な経済学者に二宮尊徳先生がおられる。先生はかつて千葉県の印幡沼の堀割り検分というのを命じられた時に、直ぐには現場に行かず、先ず儒者を遣わして、その地方の士民の教化、道徳的なレベルの向上をはかられたと伝えられております。また世界的な経済学者のアダム・スミスの名著「富国論」は倫理学の一篇として書かれたものであると聞いております。本当の経済学者というのは東西軌を一にして、さすがに立派だと思ひます。

国家が道義を軸として、国民生活を規正しなかつたならば、たとえ経済的に発展しても国民はやがて放埒になり、闘争にあけくれるようになってしまふ。国家は一時的に繁栄を見せても

本来の使命を忘れたならば、南洲先生の言われたように非常に次元の低い一つの経済組織体になつてしまうのです。国家が単なる経済組織体になつてしまえば、階級闘争は日常茶飯事となり、自己中心の享楽思想が全国を支配し、民族滅亡の道を急ぐことになると思います。こうして国民は愛国意識を失い、自意識、勤労意識を失い、不当な欲望だけが大勢を支配し、自分が満足いかなければ、皆国家、社会のせいにしてしまうようになります。正に亡国の姿であります。

古い言葉に「一夫耕さざれば天下その飢を受く、一婦織らざれば天下その寒を受く」というのがある。一人の男が田に出て耕さなければ天下が飢える。一人の女が機を織らなければ天下は寒さを受けるといふことです。一人が怠けるとその影響力はやがて全国民につながるわけです。昔の人はこれを非常に戒めた。「俺一人がやっても」と思う人が多いが、決してそうではないのです。

「史学」について

次に「史学」ですが、歴史の教えるところは実に厳正である。我々の先輩は歴史を研究してその原因結果を見究め、政治にそれを応用した。明治維新の大動力となつた大日本史は水戸の彰考館の修史局で編纂されたものですが、彰考とは「往を彰あきらかし、来を考ふる」といふ言葉か

ら出たもので過去を明らかにし将来を考えると、いう意味なのです。それは論語にある「温故而知新——古キヲタヅネテ新シキヲ知ル」と同一の思想ですが、過去の日本を知らないでは明日の日本を知ることが出来ない。こうして歴史の重要性を知ることが出来るのです。しかし戦後は歴史を無視、あるいは軽視する風潮が大勢を占め、ただ眼前の事がらを追いまわすだけでその日その日をすごしている。これは占領政策の謀略に因るところ大なのです。支那の清朝時代の一学者の言に「人の国を滅さんとすれば先づその史を断つ」というのがある。占領軍は終戦の年の十二月三十一日の覚書で日本の歴史、地理、修身の授業停止を命じました。これが一つの大きな原因になつて青年学生の間、自国の歴史を知らず、自国の歴史に何の興味ももたないような者が続出、この非歴史的傾向によつて彩られた若者達の中に、暴力主義者が多く目立つのも、思想的な根拠をもたない者の迫るべき姿を示す好個の例証であるといわなければなりません。

歴史を断つとは歴史を無視するということは勿論ですが、その中には歴史を故意に改作し、変作することもふくまれていることに注意しなければなりません。われわれは不断に改革し、革新していかなければならないが、改革または革新の必要が国民的生命の沈滞、頹廃から生じたものである以上、改革、革新の原理は国民的生命に潜んでいる偉大なものを認識自覚して之を復興させる以外にはないのです。敢えて建設原理を外国から輸入する必要はない。木に竹を

ついでような改革原理は悔を百年に残すことは歴史が明らかに示しています。

支那には北朝の名臣司馬温公が心血を注いで作った史書に「資治通鑑」というのがありま
す。日本でもずいぶん読まれた書物ですが、私は三重県の津藩から出された「資治通鑑」をも
つております。このように各藩で出されてきました。この歴史の書物に「鑑」即ち鑑みるとい
う字が使われているのは面白い、まことに意味深長だと思います。唐の時代には唐鑑、明の時
代には明鑑というのがあった。日本にも「大鏡」「水鏡」「増鏡」などというのがあつた。つま
り人々は歴史という鏡に写して己の姿を整える。単に外形のみでなく、自分の心を歴史の鏡に
照らしてそこに行動の指針を求めたのです。

明治維新史という鏡を見るたびに私は常に次のように思うのです。維新の志士たちはいずれ
も日本の建国精神である「天下一姓」すなわちわれわれは皆一姓であるという自覚のもとに、
「すめらぎ」即ち日本国民の統一者である天皇を中心とした日本政治に復源するため一身を捧
げたのです。しかし今や国民は天皇に対して国家の統一者としての認識もないし、服従や尊敬
の心もないのです。国家に中心なく統一なく、一人一人の国民がバラバラに生活を営んでいる
—まことに亡国の兆といわなければなりません。かくして明治維新史を回顧することは、その
まま昭和維新史を創作する唯一の道であると思ひます。

最後に諸君に一首の和歌を紹介したい。それはここにおられる夜久先生、小田村先生の先師

であり、和歌の先達だった三井甲之先生の歌です。

ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を

われわれの命をつみ重ね、またつみ重ねて守るべきものは正に大和島根、すなわちわれわれの先達が心魂を傾け尽して築き上げ、われわれに残してくれたこの大和島根——祖国であるという意味であります。

だがこの大和島根の現状はどうか、諸君は立派な指導者として今後さらに成長する。私はわれわれのこの大和島根をさらに磨いて大をなさしめることを、若い諸君に非常に期待しております。

(亜細亜大学学長、元文部大臣)

世界の転機と日本

木内信胤



はじめに

アメリカの權威の低下

EECの抱えた問題

国際機構の權威失墜

マルキシズムの退潮

戦後処理の思想は任務終了

議會制民主主義の限界

左翼思想の行き詰り

西欧思想の限界

新しい宗教時代の予感

日本人の役割

△質疑応答▽

はじめに

お手もとに渡っているレジユメに従ってお話して行きたいと思います。今日の皆さんは昨年私の講義を聞いて戴いた方が大部分のようですが、昨年のお話は「日本への回帰」第二集に収録してあります。積み上げて来た過去五回の講義のしめくりという意味で「私の経済哲学」という題でお話し致しました。「経済哲学」といつても、経済という二字を取って貰ってもかまわない位で、私の認識論について話したつもりでした。

私は二年程前から、世界はいよいよ混迷の度を加えて来たと考えてきました。昨年一回世界状況の分析の話を休んだわけですが、その間に混迷は著しく進んで、今まさに転機という状況に到達したのです。従ってタイミングが非常によいというわけで、昨年の哲学の話を基盤にして、現実の流動する世界の分析を試みたいと思います。

まず話の前提として、最近の世界を眺めて特に目につくことが二つある。一つは今まで権威とされて来たものがその権威を失いつつあること、二つは日本が著しく頭角を現わして来たということとです。いま世界では、ベトナム戦争、中東動乱、中共の文化大革命、というように目に見えるゴタゴタが沢山おこっています。しかしそれは本当の意味で混迷というべきものではない。本当の混迷とは、それを見る見方の混迷、頭が混迷しているのです。ところがそのよう

な世界のなかで、日本だけが非常に目立って来た。勿論日本も頭の混乱という点では変りはないが、外の国の経済が下降現象を示している中で、日本の経済だけはぐつとよくなっている。そこにはまずいことも沢山ある。しかしこれは明らかに日本の新しい出発ということを示しているのです。また是非新しく出発させたいものだと思います。これが全体の前置きです。

アメリカの権威の低下

従来の世界の権威は何であったか。軍事的には米ソであった。ところがこの米ソがガツチリと世界を押えていたという時代は変って来ました。経済的にはアメリカ中心でしたが、現在はこれもやや変りかけているのです。E E C 諸国も変です。国連とかガット、I L O 等の国際機構に対して、日本ではまだ非常な尊敬の念があり、「国連中心主義」という考え方が有力です。ところがその国際機構も駄目になってきました。また世界観としての共産主義も、一部の人間にとっては確かに権威でした。それが自滅するような格好になりますと、「反共」を旗印にしていた人々も、相手がいなくなつて腰くだけという姿になります。このように数年前までは、世界の権威として認められていたものが、いずれも王座をすべり落ちつつあることは、きわめて興味深い事実です。

軍事的には米ソというのは、彼らが核兵器を独占していたからです。その独占が破れた。日

本も持とうと思えばすぐ持てる。核兵器というのはそうむずかしいものではない。世界中が「核」「核」といつて脅かされるものだから、大変むずかしいものと思つてゐるけれども、大したことはないのです。「核」論議には俗論が多いのですね。米ソはキューバの時、核戦争をやりそうになつてやらなかつたが、ソ連の威信はぐつと落ちた。核に関する限りアメリカの優位が明白になつた。ところがそのアメリカが核兵器を使わないから、ベトナムがいつまでも片づかないとも言える。どうぞ核兵器にはいろいろ小さいのもあることを忘れないで下さい。また一方米ソ両国が監視している中で、或いは国連が監視しているはずの中で、中東戦争が起る。一体米ソというのは何だということになるのです。全世界を一ぺんに破壊できる程の軍備を持つてゐるけれども、それは決して使えないと言つてもいいのです。

経済的には第一にアメリカ、それに次ぐものとしてEEC諸国、これが非常に權威を持つていたが、それらがこの頃変だということは少し説明を要します。アメリカでは、昨年の秋、金融危機のようなものが起りかけたということが、今年の一月頃から、二、三月にかけてむこうの雑誌に盛んに書かれました。アメリカの金融機構のある一部が非常な危局に陥つた。それは急いで救済したが、もしそれを救済しそなたら、全面的な大金融危機になつたはずだといわれています。アメリカはわけがあつて昨年は無闇に金利を上げた。その他いろんな事情があつて住宅の建築を助ける金融機関に金が全然集まらなくなつて、破綻しそうになつた。詳しく申

し上げる時間はないがそれが事件の概要です。これは大急ぎで切りぬけて、まあよかった。だからむやみに高い金利でやるのを止めてしまったのですが、これ一つ見てもアメリカの経済は、実は大いに危いのではないかと思つた方がいいのです。アメリカの権威を大いに疑つて然るべしという一つの大きな実例になりました。そればかりではありません。ケネディ・ラウンドということがあります。五年前にケネディが言い出して、あしかけ五年、もみにもんだのドです。ケネディ・ラウンドというのは、ジュネーブに集つた八十何ヶ国が一挙に関税を五〇パーセント引き下げようという計画です。ラウンドというのはボクシングで使う時などと同じ意味で、一連の行動という意味なのでしょう。ところがケネディという超有力な大統領が突然その構想を言い出した時われわれが与えられたあのイメージから言えば、実現されたものはわずかにその五分の一、という感じですが。しかもそれが四年半かかったので、これはまさにアメリカの権威の失墜を意味するのです。それらの結果、現在はもう経済的にはアメリカさえ見ていれればいいという時代ではなくなってきました。日本が非常に偉くなつて、いろいろな意味でアメリカを追い越したということもあります。一頃日本でもはやつた言葉に、「アメリカがくしゃみをすると日本は肺炎になる」というのがありました。これは数年前にヨーロッパで作られた言葉だと思つたのですが、現在ではもうそんなことを言う人はいないのです。それより、アメリカがひっくり返つたらどうするかという対策が必要だと皆そろそろ感じ始めてい

るのです。私は率先して、「人がどうなっても大丈夫な経済にしようではないか。それがこれからの日本の経済政策の基礎的なねらいでなければならぬ」と申しているのです。

EECの抱えた問題

EECというのは、ヨーロッパの六ヶ国が集つて作った経済共同体です。一九五七年にローマで条約を決め、一年の準備期間を置いて、五九年の一月から仕事を始めました。その頃日本の言論界では、EECでなければ、夜も日も明けないという風だった。ところが今はさっぱりです。そこへイギリスが無理に入ろうとする。ああいうことを言っているようではイギリスも駄目だと思うのです。とにかくEECは今非常に具合が悪い。その一番手つとり早い例がドイツの経済です。今までドイツの経済はすばらしいということになっていました。もつともエアハルトが総理大臣になつたあとはあまりかんばしくなかつたけれども、彼が経済相でやつていた間は、日本と並んで成長率も高く、内容は日本よりもずっとすばらしいということになっていました。それが昨年の秋から大転落をして、日本が成長率一〇パーセント以上であるのに、ドイツでは二パーセントが政府の目標です。多くの人は国民総生産が昨年より下がるのではないか、すなわち成長率はマイナスになるのではないかと心配しています。こういうことはあまり皆さんご存知ないでしょう。日本の新聞は、「日本は駄目だ」と書くのが好きですから「ド

イツは駄目だ、従つて日本はいいはずだ」とはなかなか記事に書いてくれません。そこで、そうなつたドラマティックな過程を、ちよつと説明することによらう。

エアハルトがまだ総理だつた昨年七月に、「経済安定法」という法律を提案したのです。過熱ぎみの経済を押える必要があつたからです。ドイツは連邦で、各州の独立性が強すぎる。地方自治体が勝手に公債を出して不要不急の事業をやるからインフレ的になるのだというのがエアハルトの言い分であつたらしい。ところがその法律が審議中であつたか、まだ審議にかからなかつた十一月に、政変が起つてエアハルトはおつぽり出された。キリスト教民主同盟と民主社会主義SPDのいわゆる「大連合」ができたのです。連合政権の成立はまずめでたいことでしたが、経済はその頃から大転落をした。そしてこの六月に法律は成立しましたが、その名は「経済安定並びに経済成長促進法」と変えられました。成長促進の必要に迫られたからです。ドイツではこういうドラマティックな政治劇が行われたのです。

ドイツの経済はなぜ転落したのか。その理由の一つがEECの權威に関することなのです。EECがドイツにどういふ悪い影響を与えたか、一つだけ確かだと思ふのは農業です。製造工業の分野では、EEC圏内は予定より早く一つになつた。これはまずいいことでしょう。ところが農業の方は一つにするのがむずかしくて、ドイツは反対していましたが、ドゴールの主張が通つて、EECの域内は無関税になつた。農業には気候風土の差がありますから、ドイツの

農民はフランスに負けて、つまるところは農業を捨てさせられるようになるのです。いろいろ農民を助けることをやっているけれども、そんなことよりも、気候風土という自然条件の結果起る物価差をキャンセルするだけのマイルドな関税を設ければそれですむ。そうすればいいのに、というのが私の主張ですが、いま世界は関税はいけないということになっているからそれができない。おまけにドゴールは、「フランスは工業で損をしたから今度は農業で得をするのだ」といつている。つまりドイツをいじめるのは当り前という原理に立っているのだから、ドイツの農業が悪くなるのは当然です。昔みたいに、何でもかでも国産というのは馬鹿だからよした方がいい。しかし何か特別なわけがあつて関税があつた方がいいと思うなら思うとおりに立てたらいいい。それを「立てない」ということにしたのがEECで、「立ててはいけない」と言わんばかりなのが、ケネディ・ラウンドなので、考え方は同じなのです。いま申した関税についての私の考え方をもう一度申し上げますと、国際的に自由競争を行うには、天地自然の結果、あるいは伝統上でもいいですが、ナチュラルにそこに存在する物価の差——これは物価体系の相違といつてもいいのですが——それをキャンセルするだけのマイルドな関税を持つ方が、自由競争のためにもいいのです。それはゴルフのハンディと同じで、ハンディがあつてこそゲームが成り立つ。だから世界各国がおのその道を歩くには、持ちたい関税は持った方がいいということになるのです。以上はEECがドイツに悪い影響を与えた一つの例ですがドイツと

オランダの關係に眼を移してみましょう。戦後のオランダは、インドネシアを失つたにもかかわらず経済的に大復興をしました。小さい国ですから法律がよく行われ、約束もよく守られます。組合と企業家と第三者がそれぞれ団体を作つて合議の上低賃金、低物価という政策をとり、それで輸出には最も強い競争力を持つと考へた。これが実にうまく行つたので天下賞讃の的となつていました。ところが三年程前に、その政策をすっかり変えてしまつた。犯人がドイツなのです。ドイツは高賃金、高物価、オランダは低賃金、低物価だが、両国の間にはEECのお蔭で国境という柵がなくなつた。ドイツのおかみさんは低物価のオランダに自動車を買物に来る。オランダの労働者はドイツの工場に通う。こうなつたからオランダは、折角の政策を放棄せざるを得なくなつた。これは実に惜しいことだと思ひます。これがEECの悪い面、その行き過ぎを示す面であつて、その權威を失わせるのに十分な実例だと思ひます。

話をドイツに戻しますが、ドイツは繁榮して人手不足になつた。そこにEECができたからイタリーからは労働力が自由に入る。EEC以外のポルトガル、スペイン、トルコ、ギリシャからも入れた。こうして百何十万という労働者を入れてしまつた。会社の損益勘定からいうと、安い賃金の者を入れるのはいいが、国全体から見るとどうなるか。ドイツも福祉国家です。トルコ人だから病気の保障はしないとはいえない。そこに問題があるのです。物の動きに對して、ある種の関税はある方がいいと申しましたが、国家間の人の動きは、余りない方がいい

いと思います。

ドイツの転落の原因はもう一つあります。アメリカの資本を入れ過ぎたことです。現在の世界は物を作ることが甚だ易しくなつた世界ですが、その製品は必らずしも売れないという世界です。そこで起る生産過剰が現代の問題であるのかかわらず、古い思想にとらわれてむやみに設備拡大を急ぐ。その上アメリカの資本が入つて来て設備拡大を行うことを許している。これは資本自由化ということを盲信した結果ではないかと思ひます。これらのことすべて、いまままで皆がアクセプトしていた思想が、実は疑われるべきだということをお話しているわけです。

国際機構の権威失墜

次は国連、ILOなのですが、後者は省いて国連についてだけ言っておきます。それには中東戦争が一番いい例になります。中東戦争はなぜ起つたか。イスラエルという国の存在そのものがアラブに対する侵略だ、というのがナセルの言い分ですが、だから、イスラエルを抹殺するのだと言つて武力を貯え、シリア、イラク等を仲間に誘つて戦を挑んだのです。ところが、そもそもイスラエルという国は、国連が作つた国なのです。自分が作つた国を、抹殺すると言つて力行使した国があるのに、一言も言わないというのは何ごとですか。イスラエルが勝つたからいいようなものの、アラブが勝つていたら、国連は自分で作つた国を武力によつて抹殺

されても、黙っているつもりであつたのか。一体どういう量見だということが聞きたい。国連はそれに対して、答えるところを知らないのです。

国連はなぜこのようにして権威を失墜して行くかというところ、これはかねて申し上げた通り、国連とは元来、作りそこなつたものです。国連を作つた時、アメリカ、イギリス、フランスは、日独両国に対して戦つた共同の仲間としてスターリンのソ連を見ていた。イデオロギーの相違があつても戦後の復興、平和維持ということに関しては、協力してくれると考えていた。ところが戦争がすんでみたら、ソ連はヨーロッパの東半分を取つてしまつた。ドイツをまつ二つにした。朝鮮も半分にするというところで、時を移さず世界共産化にのり出して来た。そこに大きな誤算があつた。そこでアメリカは急いで再軍備しマーシャル・プランなどを行つてどうやら共産化の波をくい止めたけれども、協力が前提でできた国連では、ソ連に拒否権を与えていた。ソ連はその拒否権を百何十回も使つて、あらゆる重要案件を不成立にしてしまふ。国連では何もきまらないのです。その無力がまた中東戦争で暴露した。その前にも実例は沢山あります。印度、パキスタン戦争もそうです。キューバ問題ではアメリカ自身、あわやソ連と核戦争をやりそうになつた。勿論国連に発言権は全然ない。つまり国連というものは、人が思つてゐるようなものではないのです。だからといってこれを早くつぶしてしまへとは私は言わない。しかし、国連に権威がないのは、もともとでき損つた存在だから当然だという事実を、あ

からさまに認めるだけのフランクネス—あえて勇氣とはいわない—が必要なのではないか。人には嫌がられても、当り前のことを言うということは、勇氣ではなくて正直さだと思いますが、それだけの正直さが持てなければ駄目だと思います。

マルキシズムの退潮

次に共産主義ですが、スターリン時代は実に共産主義らしかった。だが共産主義とはそもそも理論的に間違つたものです。もの見方が根本において間違つているものを、ソ連は国のもとにしたのだから、どこかでうまく行かない所が出るのは当然です。それを、誰かのせいにしてそれらを排除してゆく。すなわち間違いを肅清によつて押し通していったのがスターリンのやり方であつた。そのスターリンは頭が狂つて死んで行つた。その陰惨な最後の数年を、スターリンと共に過して来たフルシチョフ、マレンコフ等はスターリンの真似はもうできない。一九五六年にフルシチョフが行つたスターリン批判をきいて、私は「ソ連は普通の国になる」といったのですが、その後のソ連は確かに急速に非共産化しつつあります。これが共産主義の運命です。

中共は民族が違うのでやり方もまるで違つている。しかし同じに考えていい。中共も要するに無理を通そうと思つてあえいでいるわけです。毛沢東を神格化し、紅衛兵を使って、無理に

押し通そうとする。毛沢東の言い分は、「農村を共産化してこそ本当の共産革命だ。スターリンのやれなかつたことを俺はやってみせる」というのです。それが彼の意地でもあり信念でもあるのでしよう。だが一九五八年にやったときは、失敗して後退せざるを得なかつた。その後退作戦をやってくれたのが劉少奇一派であつた。毛沢東から見ればそれが癪なのでしよう。その上一昨年秋には、彼自身追つばらわれそれになつたのださうです。そこで杭州へ行つて林彪と画策し、翌年の四月頃から動き始めて、八月から紅衛兵が出て来た。遠大な計画です。昨年十月三十一日でしたか、私は台湾で情報関係の若い役人に会いましたが、彼はその時点で本土の情勢を分析して、毛林一派はその第一期の工作を成功裡に完了したといえるが、これからあとは乱れる一方、收拾の道はないと思うと予測していました。その判断の根拠は、党が軍を支配するのが共産政権の原則だが、それが無視され、逆になつていゝからだ、というのが一番大きな点でした。こうして中国大陸からも、やがては共産主義は消えて行くでしょう。

こういうのが共産主義の現状です。共産主義というものが一部の人には救いであり、信念であり、非常な権威であつた。そういう狂信者の数は急激に減りつつある。先頃、日本共産党は中国共産党と絶縁しました。何だかわけのわからないことになつて来ました。広島原爆反対の運動も燈籠流しをやつたりして、イデオロギーの運動としては明らかに後退しています。従つて先にもちよつとふれたように、共産主義を排撃することに非常な重要性を感じ、それだ

けをすべての目的のように考えていた人々も、次第に力を失つて来るといふ状態です。

戦後処理の思想は任務終了

以上の事実をどう理解するか。それは各自の世界観の分れるところですが、私は根本的には、そのようなことはわからないのが本当だと考えて、小智を頼む解釈はこれを拒否するといふ立場に立ちます。面白いことに、本当は分らないのだという立場に立つと、心は却つて動いてくるのです。そして歴史というものは、常に見直しすることが必要ですから、分らないながら放つておかないで、深淺色々の角度からこれを眺めて、自分なりの解釈を持つのです。

気がつくことは第一に、西欧社会における戦後処理思想がその任務を完了して、その意味を失いつつあるということです。ここで戦後処理思想というのは、第一次大戦の経験を踏まえて出て来た思想です。第一次大戦後、第二次大戦に入りこむまでの二十一年間、これは誠に悲惨な時代で、その処理をやつていた大国のリーダーたちが満足した年は一年もなかつたでしょう。一度完全な破滅に陥つたドイツをどうにか救い出して喜んだのも束の間、一九二九年にはアメリカの株式が大暴落し、三一年にはヨーロッパの金融恐慌、つづいてアメリカの大恐慌が起つた。当時のアメリカ人は、マルクスが予言した通り、いよいよ資本主義滅亡の時が来たと思つたそうですが、三三年からルーズベルトのニュー・ディールが始まる。しかし同じ年にヒ

ットラーが宰相になり、世界は第二次大戦にすべりこむ軌道に乗ってしまった。その頃私はドイツにおり、つづいてロンドンに参りましたが、まさか第二次大戦は起るまいと思っていた。それが見事に起つたわけです。つづいて大東亜戦争が始まり、やがて日本は、考えもしなかつたアメリカの占領ということになりましたが、考えてみると第一次大戦から第二次大戦までの間は、失敗の連続であつた。その失敗によつて教えられた知恵で、戦後の処理をやつたから、今度の戦後処理には、失敗が一つもないのです。ガットもIMFも非常によかつたのですが、何よりもよかつたのは、敗戦国に対する非賠償の大原則です。第一次大戦でドイツに過重な賠償を課したことによつて起つた苦い経験が生かされたわけです。日本の復興も全くそのおかげです。しかし、戦後二十一年、戦後処理は世界的に終つたわけです。ところが一方、新しい問題が次々に起つて来るが、今までの智恵では通らなくなつていのが今の状況です。

議会制民主主義の限界

第二に、共産思想に関してはその当然の帰結が実証によつて示されつつあるということ、これはすでに申しました以上の説明はいらないでしょう。

第三に、議会制民主主義なる政治思想が、逐次その限界を露呈しつつあるということがあります。議会制民主主義とは要するに、四年か五年に一ぺん選挙をして、多数党に政治をまかせ

るということでしよう。しかし意外なことが突発する現代において、四年先のことまで頼めま
すか。又、選挙で国民の意思をきくと言いますが、国民にはわからない問題が沢山ある。米の
統制方式にしても、健康保険制度にしても、それをどうしろといったとて、一般国民には意見
の出しようがない。しかも、政党がなければ今の選挙制度は運行しない。ですから政治資金が
必要だということになり、それが悪用を防ごうといつても、政治資金規制法ぐらいではどうな
るものでもありません。これはこの議会制民主主義という制度の根本がどこかおかしいので、
それは世界的現象だということに目を向けるべきです。

この制度にはおかしいことがもう一つあります。もともと議会制民主主義はイギリスやフラ
ンスで発達したものです。その英仏両国とも王様を殺してこの制度を作った。彼らは強烈な権
利思想の持ち主、自己の権利を守るには殺し合いも辞せずという人達ですが、そういう人達だ
から「殺し合うよりは多数決で行こう」ということになった。多数決原理というものは、殺し
合いも辞せずという国民の間でできたものです。だがそれは、権利をあまり主張しない日本人
に合わない。カーライルか何かの言葉に、「古来人類は、何がよい政治形態であるか、それを
探しあぐんでいるのだ」というのがあるが、よき政治形態を探しあてるといふことは、実にむ
ずかしいものです。

第四に、現代を風靡していると言つていいケインズの経済思想が限界に到達しつつあるとい

うことがある。やや乱暴なステートメントかも知れませんが、日本では「マル経」にあらざれば「近経」ということになっています。近経とは何かというと、要するにケインズ経済学です。この頃は全面的に統計を駆使した計量経済学が発達し、経済成長ということを目目にしてものを考えるようになり、また完全雇用ということを政策目標の王座に置いて、なるべく物価を上げないで成長率を高めようというのが、経済政策の理想のようになっていますが、それが批判に値する。このことはなお後で申し述べつもりです。

左翼思想の行き詰り

第五に、現代の基調は何といつても極めて広義における「左翼思想」であります。この思想そのものの欠陥が露呈しつつあります。ここでいう「左翼思想」とは、マルキシズム以外の通常の左翼思想、すなわち福祉国家を理想とするような思想です。資本主義の初期においては随分まずいことが行われました。そこで社会主義が抬頭したのですが、社会主義思想の核心にあるものは、万事を「社会悪」のせいにする、ということ。実際には社会主義の人で、
「おれが社会をよくしてやる」という強い道義心を持つている人は多い。しかし社会主義を思想として考えれば、世の中には「社会悪」というものがあつて、これは個人の力ではどうにもならない。それを直すには国家に頼るほかない、と考える。これが社会主義の基本、すべて左

翼的といわれる人は必ずさういう考え方に立っています。話が飛んですまないが、右翼とは何かというと、これは全部を自分の責任と考えて、世界の何が悪くともおれが救つてみせるという考えに立つ。その核心にあるものは非常に結構なものだと思ひますが、だからこそいわゆる右翼といわれる連中には、名誉心から実力もなくせにむやみにいきり立ついやらしい連中も多い。突飛な例で申し上げますが、私は右翼中の右翼なるものは阿弥陀様だと思ふ。阿弥陀様の誓願というのをご存知ですか。世界中で一人でも迷つている人がいる間は、自分の悟りはまだ本ものではないとするあの誓い。それと正反対なのが左翼思想だと考えていい。ところがその左翼思想で過去何十年やつて来たが、やつぱり人間は、自分独りでも悪いことは直してみせる、という気概を欠いてはだめだ、ということがわかつて来た。つまり左翼思想では世の中は行き詰まつてしまふことになつて来たのがこの頃だと思ひます。

西欧思想の限界

第六に、文芸復興以来、偉大な成果をあげた「西欧思想」なるものがその限界を示しつつあることです。中世はキリスト教が支配した時代ですが、文芸復興の世の中となつてキリスト教会の権威に弓を引いて、ギリシャ精神を復活させた。ミロの美神を讚美するのはキリスト教から言えば、まさに悪といふべきものであつたのですから、当時の思想の混乱のすごさが思ひや

られます。そういう思想の変革をうけて、ローマ法王に対する反逆の形で多くの宗教的偉人が出て、新教というものができた。そして、新教と旧教の殺し合いが始まる。長い長い宗教戦争の時代が続いたが、やがてそれも下火になる。飽きがきたというよりも、人類の文化がその上に出たといった方がいいのでしよう。宗教戦争に入れ代つて、諸侯の争いの時代が来た。その中から民族国家というものが誕生してくるのです。このネーション・ステートというのは欧州の産物であつて、アジア、アフリカの産物ではない。それができてくる全過程、過去四、五百年というもの、欧州は戦争ばかりしていた。その戦争をやりながら発達したのが、現在の文明なのです。原子力の出現も、こういう歴史の継続としてとらえられるべきです。

こう見てくると現代文明というのは、戦争能力の余力を仮に他の技術に使っているというのが事実でしょう。民生を豊かにし、国を富ませるといふが、それがなければ戦争ができなかつたのです。ところが最近では、事情が變つて来ました。日本はアメリカに復讐はしないし、ドイツとフランスはもう戦争はしないでしよう。それだけでも時代は新しい時代に入ったと言えます。それだけでもというより、それを一番大きな理由として、です。

こうして新しい時代に入ったのですが、その新時代そのものズバリの大理想はまだ現れない。そこで福祉国家というようないかげんな理想をかかけてともかくここまでやつて来たというものが、大きく言つてヨーロッパ思想の歴史ではないですか。しかし今それは行き詰りに達

し、大転機にかかっている。それがいま思想的混迷という姿で現われているのだということになります。

新しい宗教時代の予感

そこで、第七に、恐らくこれは人類の文化が新しい宗教時代に入ること示しているのだらうという判断が浮んで来ます。いまのところ現代は、宗教否定の時代です。人々は後の「世」を考えないようになったといったらいでしょう。しかし実はつい最近まで、日本人のみならず世界中の人が、「死んだらそれでおしまいだ」とは考えていなかった。昔の人なら「生死一大事」といって、脳漿をしぼって、一生の仕事としてこの事を考えた。今は、「死んでからはどうなるのだ」ということは、きかないことになった。しかしいのちというものを、この世だけのものと考えていては、どうも辻褄が合わないようです。とはいっても、昔のような宗教がそのまま復活するとは思いませんが、現代は、やっぱり新しい宗教改革の時代に入っていると考えられる。仏教もユダヤ教もキリスト教もイスラム教も、何もかも含めて、新しい宗教改革が行われねば収まらない状態に來ていると私は思っています。世界をリードして來た西欧思想に行き詰りが來た。非行少年の続出も、アメリカのヒッピー族も、こういう現代文明の行きづまりの現われでしょうが、もつとも大きなところを眺めて、私は新しい宗教時代の當來を予感する。

日本人の役割

そこで、結論に入ります。日本はこのような世界の中におけるユニークな存在です。その経済発展は驚異であると同時に、その政治はあきれるばかりだらしが無い。この事実を、それがそうである理由と共に深く掘り下げて行けば、（今日はその掘り下げの内容には触れませんが）そこに今後の日本人が個人として、また日本国民として、行くべき道が明らかになるであろう。果してそうならば、それは申すまでもなく、混沌の現代に光を与えることになるというのが、私が今日申し上げたい結論なのです。

日本がユニークな存在であるというのは、いま申しした通り、その驚くべき経済発展がその一要素です。自動車の生産量はドイツを抜いて世界第二位。鉄は世界第三位。アメリカ、ソ連の次です。造船は大体世界の半分、欧米諸国が束になって、ようやく日本と同じです。三十万トンのタンカーなど、いまのところは日本でなければ造れない。新幹線その他世界一を拾えばきりがないほどある。岡潔さんが芭蕉とつめ将棋の先生のことを書いて居られました。そういう人を出しただけでも徳川時代という時代は、大したものだということをおられました。維新の時の日本文化も思いのほか高かった。当時の江戸は人口百万で世界最大の都市、当時のロンドンよりも大きかったということをお聞きしました。

ところが日本は、明治以来、欧米の真似ばかりして来たので、むやみに自分を卑下するようになつた。明治以降の西欧文明の輸入は、富国強兵のためであつた。議会制民主主義などそれと一緒に入つて来た。本当に議会制度をいいと思つたから入れたのではない。だからすべてが「上の空」といふべき性質をもつてゐる。日本の政治のゆがみは、その原因は恐らくここにあるのでしよう。それにもかかわらずあの驚くべき日本人の実力はどこから出てくるのでしようか。外来思想とは別のところで、日本人の真情が発揮されているのだと思われませんか。

最後にしめ括りを致したいと思います。あらゆる分野で権威の崩壊が起つてゐるが、その事実はどう対処すればいいか。まず第一に「新しい思想出でよ」という叫びが、各人の心の中に、そして世の中に起らねばならない。政治形態については日本人の心情に即したものを作り出す外はありません。ケインズ経済学の上に出るためには、経済学の中に物量以外のもの、心の問題を入れて考えねばなりません。政治も思想も社会一般もこみにして考えねば、経済学としても本物は出てこないでしょう。新しい宗教といふことを申しましたが、宗教の話といふものは、本来言葉には乗らないのです。従つてその周辺にふれることしかできませんが、新しい宗教改革はある意味でもう始まつてゐるといえます。昨年も話したことです。ローマ法王がイスラエルを訪問した。キリストを死刑にしたというので、二千年來呪いつづけて来たユダヤ人のところへローマ法王が行つたといふことは、全世界の宗教が融合態勢に向つてゐる何より

の証拠です。おのおの信ずるところは異つても、お互いにトランスを持とうという変化が起つて来ているのです。と同時に、お互に喧嘩もしないような宗教の信者は、根性を失っているといふるでしょう。そこいらが解くべき謎なのです。宗教は個人の魂の問題ですから、ご自身で持つ以外には本当の理解はあり得ませんが、この宗教改革は、もつと次元を下げれば、近代化と宗教とをどのように調和させるかという問題でもあります。イスラム教では毎日きまつた時間にメッカの方をむいておじぎをしなければならぬ。工場で機械を動かすことと、このおじぎをどう調和させるか。数年前イスタンブールであつた、ある優秀な女の法律学者が、この点を尋ねた私の質問に、はっきりと宗教改革の必要ということに答えました。現にそういう動きが始つている。しかし、結局宗教問題は魂の問題ですから、究極のところは言葉で行う議論の題目ではないと思います。

質疑応答

《中共に対する政経分離の原則についてご意見を聞かせて下さい》

中共の方では政治と経済は不可分だと言つて居るのです。彼らにとつては、日本の共産化がその目標とするところだから、当然のことでしょう。それに対して、こちらだけで「分離だ」

と言っているのは、実はおかしいのです。しかし、もう一つ深く考えれば、そんなことはいい加減にしておいて、中共と商売をして行くがいい。中共もいつかはマルクス主義を捨てるでしょう。そのためにはどこかの道で少しはつきあっている方がよいのです。しかし輸出入銀行の資金を使つて、プラント輸出をやるといふようなことは、これからはやらない方がいいと思ひます。

△ソ連の共産主義の変化についてお尋ねします▽

私はソ連がマルキシズムを捨てつつあると言つたのですが、それは理論的に根本のところからマルキシズムは間違つているから、そうなるというのです。間違いの中で一番大きいのは、彼らの物質的世界観、唯物史観です。剰余価値説等もすべて間違いです。従つて、プロレタリア革命をやればこうなるといつても、その通りにはならない。それは理論が間違つているからだ、と私は言うわけです。ソ連の農民の生活は革命前よりよくなつたかも知れないし、原子爆弾も造れる国になつたし、世界に相当な脅威を与える国力になつた。しかし、イズムというのがロシアから抜け去りつつあるといふ事実は蔽として変らない。これが私の現状認識です。

△議会制民主主義について、その限界を克服する具体的方法をおたずねいたします▽

「日本人の心情に即した政治形態を作れ」と私は言ったのですが、その具体策は非常にむずかしい。日本人は戦後二十年、「経済だ、経済だ」と言つて来たけれども、これからは政治と教育が二大問題になるべきです。教育については、小学校の教育を直す必要があります。それには国語の教え方と歴史の教え方の大改造をすれば、概ねいいだろうと思います。大学は制度全体の大改造を要するでしょう。専門的な学問は少数の、むしろ一般的なことができない人がやればいいので、専門家は必ずしも世の中のトップになる人ではないのです。これは何かの機会に別に大いに論じたいと思います。教育の問題と並んで政治をどうしてよくするかという問題があるわけです。

私の考えている方式の一つは、問題ごとに国民投票をやるということです。北方領土問題とか医療問題とかいう大きい問題については、政府が充分に国民に教えてから、国民投票にもちこめばいい。投票まで行かないで、サンプル調査や世論調査のような形のもので済ませていい問題もあるでしょう。また国民投票をやるにしても、パンチング・マシンのような機械を使えば、存外簡単に行くでしょう。そうなるかと政党というものの存在価値が問われてくる。それが政党の責め道具にもなる。

もう一つは、議会というものが物凄い越権をやっていると思うのです。議会で多数が「イエス」といえば、それが「法」になるということも、深く考えらるおかしなことです。何の決議

を経なくても法は法だという考えもある。そこで、一国の知能を集めて「多分これが法ではないか」ということを一応探つて置いて、それから下のことは、行政府に対するインストラクションとして扱えばいい。本当の法と、政府に対するインストラクションの二つを分離して考えることを私に教えてくれたのは、ハイエックでした。彼は、そういうことにしないと自由は護れない、といっているのです。

△社会福祉政策について補足説明して下さい▽

私は、社会福祉政策を凡て悪いと言っているわけではありません。やり方が問題ですが、国民を通じて、国家の力で、一定限度以下の人はいないということにするのはいい。国が富めば、その一定限度を随分高くすることも出来るでしょう。しかしこの程度は、余り高くしないで、かなり低く抑えておいた方がいい。例えば、どんな貧乏人が病気になつても、通りの医療は得られることにするのはいい。しかし医療を万人にとって平等にするのは行き過ぎです。ところが今のいわゆる福祉国家は、何もかも一様にしようとするので行き過ぎになる。社会福祉を私の言うように考えてやつて行くのも、一種の社会主義といつてかまわない。アメリカもイギリスも「おれの国は立派な社会主義だ」と言っています。だから、社会主義か資本主義かというような粗雑な分類でものを考えない方がよいのです。但し、社会主義と共産主義

は一緒にしないで下さい。この二つを一緒にしたのはレーニンの戦術だそうですが。

△新しい宗教の内容について説明して下さい▽

宗教とはどういふものかということ、私は言葉に乗せて言うのを嫌うのです。むしろ実践で示したいと思う。本当のところは、めいめい自分で考えて頂きたいのです。ただ宗教の周辺のこと、説明することが可能でしょう。今までの宗教改革は血を見た宗教改革だったので。私の心の中にある宗教改革は、いろいろな宗教上の形式には、それに対して心情のこもった敬意を払いつつ、しかも形式はどうでもいいと心に決めていくという行き方です。最大限の敬意を持って、例えば御法事といった儀式を重んじるけれども、それに拘わらない、といった方がいかにも知れません。内村鑑三さんは神社へ行つて頭を下げることをしなかつたそうですが、クリスチャンだつて神社でおじぎをしいと思つたのです。

またもうひとつおきたいことは、宗教は必ず来世を考えます。来世を考える以上は前世も考える。この二つなくして宗教はないと思つています。そして一挙手一投足の間にも、厳として宗教的な意味合いが、ちゃんと存在しているというようになるのが新しい宗教だと私は思うのです。こういう周辺のお話をすれば、中味が少しは彷彿とするかも知れないと思つてお答えするわけです。

△日本の経済成長率が驚異的であることと一人当りの国民所得が

少いことについて、その関連を説明して下さい▽

成長率や総生産はすばらしいが、国民所得は低いということがよく言われます。世界で二十一番目だということです。しかし、もう二年も待てば十番目ぐらいにはなりますから、「二年待て」ということで問題はかたづけそうです。しかし一体国民所得というのはつまらない概念で、ベネズエラという国は石油の生産量が多く、人口が少いから、一人当りにするとべらぼうな数になるのです。しかし、それは生活水準の高さを意味しないのです。そういう特殊なものを除いてゆくと、日本より一人当り国民所得の高い国は十五ばかりしかありません。それに日本という国の生活のパターンを考えのうちに入れると、現在でも十二番目か十一番目ぐらいには行っているでしょう。統計数字はどうであらうとも、実際の生活内容が充実しているのが一番いい。日本人の生活パターンをよく吟味して見ると、実質内容は現在でもずっと高いはずで、す。しかし私は、六、七番目になったら、もう余り上へ行つてほしくない。アメリカの生活などは大変な浪費で、あの、ものを捨てても平気だという心は、私などは耐えられない。日本は、ある程度まで進んだ上で、物質はもうこれ以上要らないということになるのが、一番早い国だと思います。今の世界は間違つて「物質、物質」と言っているのです。それは新思想が出ないからです。これから出るであろう新思想は、「物質はある程度あればよろしい」ということ

が、その一つの基礎である筈です。物は欲しければいくらでも作れる。作る能力はいくらでもある。しかし欲しくないから作らない。こうなったら国民総生産の数字は上るはずがない。こういうことは、貧乏なうちはいくら言っても耳に入らないけれども、この頃は大分日本人の生活もよくなってきたから、「なるほどそうかな」ぐらいには思つて頂けるでしょう。一人当り国民所得二十一番目という数字は、今申したことによつて解釈してほしいと思います。

(世界経済調査会理事長)

日本民族の中核性格

林

房

雄



日本人の楽天性、勤勉性

大東亜戦争の歴史的意義

民族の中核性格

戦後の社会科学教育―歴史、神話

伊勢神宮の遷宮式

△質問に答えて▽

日本人の楽天性、勤勉性

昨日は原爆の日でありました。やがて八月十五日が近づいてまいります。毎年八月十五日が近づいたたびに私が思い出す言葉があります。それは鈴木貫太郎大将が吉田茂に与えた「戦争は勝ちつぶりもよくなってはいかんが、負けつぶりもよくなってはいかん」という言葉です。鈴木貫太郎は、終戦時総理をやつていて、なんとか日本を、戦争に敗けた以上はその負けつぶりをよくしようと、そういう精神で最後の内閣を引受けて、それをやがて、東久邇内閣に引継いだ人です。その東久邇内閣で一番困難な、一番損な外務大臣の役割を引受けたのが吉田さんです。吉田さんは鈴木さんからもらったこの負けつぶりを立派にするという態度を、占領軍GHQに対して一貫してとつて来た。「回想十年」の中で言っているが、「負けつぶりを立派にする」ということは決してイエスマンになることでも、いわゆる面従腹背の態度をとることでもない。言うべきは言い、しかる後はいさぎよく彼らのいうことに従うことだと言っています。どちらも見事だと思う。あの敗戦の大混乱の中で「負けつぶりをよくしろ」という言葉をはいた鈴木大将も、それをまた占領下六年間実行し通し、再建日本の基礎を固めた吉田茂も大変立派であると思います。

吉田さんが第五次内閣でやめるときはもうさんざんききおろされましたが、いま、棺を蓋つ

て定まると言いますが、だんだん吉田評価が高まりつつあります。しかし吉田さん自身は面白い人で、決して自分は偉いとは思っていない。また冗談の好きな人で、「政治は何もしないところがいい政治だ。何もしない政治家が実は一番偉いのだ。おれは何もしなかったから偉い総理大臣であった」とか、「チャーチルのように回顧録を書け」と人に薦められて「回顧録というのは偉い人が書くのであって、おれは偉くないから書かないのだ、本人が偉くないというのだからこれほどたしかなことはないじゃないか」というようなことを自ら言う人で、こういうところが、私は吉田さんの人気の上昇あるいは再評価の行なわれる理由であると思う。一言で言えばあの人は非常に日本的な性格をもっている。われわれはみな日本人でありますから、日本人の性格をもっているわけだが、それが典型的に現われる場合は、私たちはその人を尊敬するようになる。この合宿でも、いろいろな日本歴史上の偉い人、聖徳太子をはじめいろいろの人の話をお聞きになったでしょうが、われわれの祖先の偉い人と言われる人々は、日本人の根本性格を、典型的に拡大したようなものをもっている。それがわれわれの心に通じるのだらうと思えます。

終戦直後「虚脱」という妙な言葉がはやりました。今でも八月十五日が近づくと、いわゆる進歩的文化人というような人が、日本人はあるとき虚脱してしまつたとか何とか愚痴みたいなことをくりかえしますが、日本人の大部分は必ずしも虚脱しなかつた。愚痴もこぼさなかつ

た。さつぱりとあきらめて、敗戦の翌日から働きはじめた。特に女性がよく働いた。大混乱のうち一年もたち、大陸や南方の各地から復員兵士が帰りはじめた。彼等もまた、生まれた村に帰って父や母と、生き残った兄弟たちと働きはじめた。

日本人には「敗けつぷりをよくしよう」というような不思議な楽天性と、敗戦の翌日から働きはじめるといような勤勉性があつて、それが今日、世界の奇蹟といわれる日本の復興をもたらしたのでろうと私は思います。そういう行動の原動力として、われわれが祖先から受け継いでおる何か高い叡智、精神力がわれわれの気のつかない間に作用しているのだと思います。

大東亜戦争の歴史的意義

私は八月十五日、日本復興の一里塚だという気持でこの日を迎えます。八月十五日に毎年われわれは一度立ちどまって自分を顧み、二十二年前を顧みます。これは例の一億総懺悔とか「過ちは二度と繰り返しません」などという気持とは違います。特に、「過ちは二度と繰り返しません」は広島原爆記念碑にまでほりつけ、「これはアメリカ人が書くべきことを日本人が書いている、おかしなものだ」と逆にアメリカ人をして言わしめている。全くおかしなことです。原爆を世界で最初にうけた国であり、しかも唯一の国であるからといって、その傷を世界の観光客に見せて憐みを乞う乞食根性は、男らしく闘い抜いて男らしく敗けた戦士、勇士の

ものではありませんまい。

あの大東亜戦争は無謀で無意味な戦争であったという見方がありますが、これは必ずしも左翼学者だけの見解ではない。吉田さんも、吉田学校の優等生であった池田さんも同じ言葉を書き返している。しかし、吉田さんがあの戦争を無謀で無意味な戦争だといつても、それは決して敗戦主義者の態度ではなく、そこには立派な戦士としての態度がある。吉田さんは甘い平和主義者ではない。勝算のある戦争、無謀でない戦争ならやってもいいと言っています。吉田さんには戦時中軍部との意見の対立があったので、吉田さんの大東亜戦争観には主観的な色彩が強くて無理からぬこととはいえ、客観的な歴史観とはいえない面がある。

現在ではもう大東亜戦争も歴史のひとつに組入れられて客観的な評価が生まれはじめています。これは世界史の見地から見れば、アングロサクソンの世界支配体制、世界支配に決定的な打撃を与えたアジアの最初の反撃であり、またヨーロッパ中心の歴史をはじめ地球的に展開し、世界史に拡大した戦争であった。私もそう考えていますが、外国の学者達もそういうことを考える人が次第に出てまいりました。世界は白人のためのものであり、世界史は白人中心の歴史であるという誤まった歴史観は、まず日本民族の大反撃によって正されることになったのです。

誤まった歴史観が訂正されたということは非常によいことです。最近日本でも評判になっ

て、多くの読者を持つているトインビーの「歴史の研究」という本も、その根本精神は、つまり文明史というものは、いままでは西洋中心の歴史であったが、そうではなく、あらゆる民族が地球の各地で歴史をつくってきたので、文明というものも西洋文明だけが文明ではなく、支那文明、インド文明からインカ文明、メキシコ文明に至る約二〇いくつの文明圏があつて、その文明が各々存在理由をもっているのだ。世界は西洋だけの世界ではない、ということがトインビーの史観の前提になつております。そのために私達が読んでも大変面白いのですが、これはアジア人種や有色人種の味方をしてくれるから有難いというのではなく、それだけ客観的真理に近づいた歴史観が二十世紀に入つて西洋自身の中に生まれはじめたことが面白いのです。こういう歴史観を実証したことも大東亜戦争の歴史的意義の一つであらうと思います。

民族の中核性格

日本人のコア・パーソナリティということ、これは中核性格と訳されますが、もともとこれは個人心理学の言葉だそうです。それを民族心理学に大胆に飛躍させたのが石田英一郎教授です。教授は私が左翼学生として捕まつた際、一緒に捕まつた人ですが、日本がいやになつて、ドイツとオーストリアに飛び出していろいろ勉強しているうちに文化人類学をやるようになり、その勉強の過程でマルクス主義を卒業した。この石田君が団長で七、八年前アンデス探険

隊というのをつくり、私も同行しましたが、あのアンデスの高原で「自分はずいぶん長い間西洋に行っていたけれども、あの時の経験によつて得た結論は、どうも日本人と西洋人は違ふということだ。どうしても違ふ」というようなことをもらしたことがある。そのときは石田君は左翼の影響の強い民族学者だと思つておつたので「不思議なことを言うな」と思つて聞き流しました。

帰つてしばらくして、石田君はあちこちで論文を発表しはじめました。「東西抄」という書物の中の「私の日本発見」ではマルクス主義超克から日本の再発見に至る経過を詳しく書いております。この本の中で、彼は民族コア・パーソナリティ論を唱え始めました。民族のコア・パーソナリティという仮説が——学説はすべて仮説であり、仮説によつて学問は進歩するのですが——非常に私には面白かつた。その部分だけを読んでみましょう。

「民族の核心には、その言語とともに容易に変わりにくいあるものの存在することがわかつてくる。このあるものとは、結局ある人間の集団がもともと一定の地域に長い期間共同の生活を営むことによつて、言語をはじめ多くの文化内容を共有し、同一の歴史伝統と運命に生きたところから生まれたものであり、民族はこれを通じて一層共通の集団帰属感情に結ばれるようになる。一派の心理学者は、個人の中核的な性格、コア・パーソナリティは幼児期の間に形成され、個体の死に至るまで続くと言う。この説が正しければ、三つ子の魂百までもというわが

国の俗言には大きな科学的根拠があるわけである。民族または民族の文化にも、何かこの三つ子の魂に似た個性の核のようなものが存在しているに違いない。」

「私のいまつかみかけている手掛りは、一つの民族や文明のvarietyな個性は、これまでの歴史家を取り上げない、時代的にはむしろ考古学者の領域に入る先史の時代に形成された文化的な基礎に根差したもので、それが案外二十世紀の今日まで根強い力をもって民族の心理や行動を方向づけているのではないかという仮説である。」と言っております。つまり一民族の個性の決定的要素となつてゐるものは——すべてのものは発生して消滅するのですが——何万年、何十年という長い時間を考えなければわからないということです。たとえば言語というものは民族の中核精神を構成する重要な要素で、不変の要素といつてよい。この合宿に韓国の学生諸君がみえておられますが、韓国、ドイツ、ヴェトナムは現在二つに分かれていますが、これらの国々を二つに分けてゐるのは民族外の原因でありまして、これらの国々がやがて一つに還元される時には、言語は必ず重要なモメントになるものです。

言語学者の研究によりますと、民族の言語が成立するまでには最低一万年はかかるそうです。成立した後も長く続いて、一万年くらいでは消滅しないと考えられます。民族の差がなくなり、言葉の差がなくなり、世界国家ができれば地球上では戦争もなくなることができると、私たちはみな希望しておりますが、言葉の差異、民族の差異というものは、旧約聖書の「バベ

ルの塔」の神話でもわかるように人類の背負わされた宿命なのです。

宿命というのは、まず受け入れて、長い時間と非常な努力によって克服するほかない。日本人が将来の世界国家の一員になるためには、まず日本人の宿命を受け入れて、自己を完成して、有史以来二千年、考古学的には約一万年にわたる間にわれわれが養い育てた日本の長所、日本の文化的財産をもって世界国家に参加しなければならぬ。日本人は世界政府の援助ばかり受けて、やっかいな国民であると言われるのでは不名誉でもあるし、また日本人はそんなつまらない民族では決してないのです。

インターナシヨナリズムというのは耳ざわりの良い言葉ですが、民族の中核精神を考慮に入れない普遍的人類という概念に立つておる限り、行動に移すとすぐに破綻する。私たちはナシヨナリズムを通じて世界国家に進むよりほかはない。各々の民族が、まず己れの中核精神を自覚して、己れの長所を蓄積し発展させ、その長所でつき合うということが、民族問題を解決し、世界国家への道をつけることであろうと、気の長い話だけでも、私は本気で考えているわけです。

戦後の社会科教育―歴史、神話

神話も民族の中核精神を知る上で大変重要なものであります。戦後は特に、神話というもの

は無知で未開な原始時代、非常に低い文化段階の産物であるから実証精神を基礎とする近代科学の批判に耐えることができず、否定されやがて消滅するものだと考えられておつた時期がありました。近代科学といえますけれども、実証主義、合理主義というのは、十九世紀の学問的主張でありまして、学問を大きく飛躍させましたが、それがもたらした弊害もまた大きいのです。有名な「種の起源」に代表される生物進化論を人間社会にそのまま適用したのが十九世紀及び二十世紀初頭の社会進化論でありまして、マルクス派の文化進化論、文化段階説も十九世紀合理主義の一変種であります。ダーウィンに従えば人類の祖先は猿ですから、原始人、古代人と呼ばれるものは大変猿に近い人類であるということになる。原始と古代の産物である神話、伝承、または宗教というようなものは、人類にとつて有害無益な遺産であり科学精神の敵であるというのが、合理主義的な考え方なのであります。

ところが二つの大戦によつて世界そのものが拡大し、それに適応して学問そのものも拡大した結果、文明というものは多元的であり、ヨーロッパ文明だけが文明ではないということがわかつてきた。地球の諸地域で文明をつくり、各々の文明を發展させたいわゆる原始人や古代人は、近代を誇るわれわれと同じ、あるいはそれ以上の実生活の知恵と高度の思考様式をもつておつたということが、歴史学、考古学、文化人類学、神話学の發展に伴なつて解明されてきたのです。したがつて原始段階、古代段階に発生した神話及び宗教は近代と矛盾する有害無益な

遺産ではなくて、近代自身の基礎になり、また近代の中に生きてゐる非常に貴重な遺産であるというふうには再評価されるようになったのです。

日本では戦後、史学が特におくれておりまして、いまだに神話は実証精神、科学精神に反するものであるから、否定しなければならぬと言つておる学者がいる。彼らは教育に神話を取り入れるという文部省の中間報告に反対しております。これらの人々は必ずしも左翼歴史家だけではありません。市民意識と国民意識を区別し、前者を養うために古い史観による歴史を排し、たとえば社会史とか文化史とか考古学とかいう事物中心の歴史を教えてきた。そのことによつて戦後の新しい世代がせつかく形成されつつあるのに、再び人物中心の歴史と神話を復活させたら、もとのもくあみではないかというふうにかと考える人も含まれております。

ドイツにヤスパースという哲学者がおります。この人は、社会史や経済史、文化史というものは不可避的に事物中心の歴史であつて、人物不在の歴史になる。社会史、経済史、文化史などというものは本来歴史ではない、歴史とは人間の行動史であり、立派な行動をした人がすぐれた人物、すなわち英雄なのだから、すべての古代の歴史と神話が英雄史であるといふことは、歴史の本質を示すものだ、とはつきり言いきつております。かりに戦後の進歩派歴史家のいうように、市民精神を養うにしても、市民には市民の英雄があり、すぐれた市民の行為、業績の精神を教えなければ、本当の市民教育もできないわけです。文化史、社会史、経済史は、補助歴

史の一種であつて、本来の歴史は人物史であり、英雄史であるというヤスパースの言葉は是非憶えておいていただきたいものです。

事物中心の歴史が歴史であると思ひこんだり、またある新聞に投書した高校生が、歴史の教科書を読めば読むほど日本という国がいやになり、そんな国に生まれたことが悲しくなる、といったような、そんな戦後の歴史教育の在り方は根本的に考えなおさなければならぬ。考えなおす時期がやつと来はじめたと言つてよいでしょう。

神話の話にもどりますが、神話を教育にとり入れることは当然のことであつて、石田教授や私と一緒にインカ帝国の探険に行つた文化人類学者の泉靖一教授が中央公論社の「世界の名著」の人類学の本に序文を書いております。その中でフランスのデビ・ストロスという人に言及しておりますが、デビ・ストロスは神話における思考様式の構造分析を行なつた結果、神話は一部の学者のいうように科学の敵ではなく、むしろ科学のなかつた頃、科学に近い思考様式にわれわれをつなぎとめてくれたものであるとはつきり言つてゐるそうです。

神話は考古学と違つて、われわれはそれによつて祖先の心理構造を知り、二千年・三千年前の祖先との連続性と一体感を持つことができる。また神話の中に語られてゐることは、民族の潜在意識と関係の深いものがあり、これによつてわれわれの潜在意識を自覚することができ、潜在意識を自覚するということとはつまり、コンプレックスを解消することでありまして、

精神分析学のいう人間のストレスなり、あるいはうつせきした劣等感あるいは優越感、そうした意識せざるコンプレックスをなくしてくれるものです。

日本民族が神話を持っていないのなら仕方ないけれども、ギリシャ神話、北欧神話、聖書のユダヤ神話、ヒンズー教と仏教の聖典に現われているインド神話と同じように、現代人のわれわれの目で読んでも、詩的、文学的鑑賞に耐えうる、世界文化史にはこるに足るものを、私たちは持つているのですから、これを教育にとり入れるのは当然のことです。

神話の復権というとすぐ、軍国主義だ、侵略戦争に結びつくと声明書を出す進歩的文化人がおられますが、これは私に言わせると「何でもかんでも戦争につながる」と叫ぶ政治的つなぎ屋さんのやることで学者のやることではない。立派な学者だと思つて尊敬している人の中にも反対声明に署名しておる人があります。トインビー父子の対話集の中に、アインシュタイン博士のことが書かれています。博士がときどきいかがわしい声明に署名する。トインビーが注意すると、うるさく言ってくるから署名してやった方が手間がかからないじゃないかと言つたそうですが、アインシュタインは自分が如何に偉い学者であり、その署名がどんなに大きな影響を与えるか知らないままで子供みたいだ、とトインビーは笑つております。学者も、自分の専門外のことには案外疎いのです。だから、あの専門のつなぎ屋さんにはひっかかりやすい。すすめられても、ひっつかからない学者がこれからたくさんでもらわれないといけない。お互いに気をつけて

進みたいものであります。

伊勢神宮の遷宮式

講義要旨の一番はじめに書いてあることを話し落したので、その話をしましょう。先月の半ばごろでしたか、伊勢神宮の遷宮式に行つて来ました。二十年毎に神殿を改築するのですが、これは長いしきたりで、昔は御神領というのがありまして、遷宮式には、農民も漁民も町の者も、神領民として御神木を神宮の境内まで引張つて行つておつたのです。伊勢神宮は「お伊勢さん」と呼ばれ、非常に庶民に親しまれており、徳川時代には「せめて行きたや一生に一度はお伊勢さんに」というような俗謡もあり、丁稚や小僧さんが公然と行けないときは、ぬけ詣りといつて、主人に告げずに参詣し、あとでわかつてあまり叱られなかったというような話まであります。

私の「大東亜戦争肯定論」をお読みななればわかりますが、明治以後武装せる天皇制ともいうべきものが約百年間続いたのです。伊勢神宮も、国民のお社であると同時に皇室のお社でありますから、武装せる伊勢皇大神宮になった。位階勲等のある者の外は玉垣の中に入って参拝できなかつたし、うっかり御供物も直接もつて行けなかつた。平野国臣や西郷隆盛などの書いたものをみますと「一君万民」とか「君臣水魚の交り」という言葉が出てきますが、つまり、

古事記、万葉時代に現われているような、共に狩をし、ともに酒盛をし、ともに恋もするような、皇室と国民の在り方を、再びとりもどしたいというのが維新の志士の純粹な気持だったと思います。が、ご存知の通り、明治維新は、英米仏蘭、北はロシアの列強の武力が日本の水際まで迫っておりましてので、これに対抗するためには天皇制は武装せざるを得なかつた。お伊勢さんもそれに従つて、庶民性をなくしてしまつた。なんだかこわくて近づきがたい伊勢皇大神宮になつた。

戦後、GHQが神道を根こそぎ根絶しようとして、神道指令を出しましたが、日本国民はそれに従わず、お伊勢さんを維持するための献金が七十二億も集まつたそうです。長い伝統を持つた神社に対してはGHQの指令も役に立たなかつたわけです。今度の遷宮式には、全国から「一日神領民」がたくさん集まつてきて、町や村の人達と共に、いかにも楽しげに御神木を引張つた。昔の町や村の祭りと同じように庶民の祭りでした。町内で百万円もかけて作つた花車が三〇台ぐらゐもあつて、その車に御神木をのせ、歌いながら踊りながら引いて行くのです。伊勢皇大神宮も、昔のお伊勢さんになつてだんだんわれわれに近づいてきたなという感じがうけました。GHQの神道指令ですが、西洋人には、日本の神がわからない。本居宣長が言つておりますが、日本人はすべて世のつねならず、すぐれて徳ありてかしこきものを神としてあがめる。キリスト教のゴットや回数のアラーのような超絶神、絶対神ではないのですね。ユダ

ヤ教、キリスト教、回教では、人間が神になるということはあり得ないので、ただ神を信じること、神に服従することによつてのみ神に接することができるのです。だからGHQの軍人政治家たちは絶対神を戴くキリスト教が国家権力と結びついたように、日本の神道も国家権力と直接に結びついていると思ひこんで、神道指令を出して禁止してしまつた。しかし、神道とはそんなものではなかつた。絶対神をもつていないから、国家よりも庶民の生活そのものと結びついている。人間は何かいいことをすれば神になれる。国のために命をささげれば靖国の神になれる。日本の神々はいへん人間的であります。

その上、神道は「徳ありてかしこきもの」は外国のものでも受け入れて、これと共存する性質をもっている。これも日本人のコア・パーソナリティに関係があると思いますが、聖徳太子の時代にも儒教、仏教をはじめさまざまな大陸の文化を受け入れ、明治の文明開化の時にも、国のために必要とあれば、己れを虚しくして西洋の文化を取り入れておる。一見極端にみえるほど、世界中のいいものはすべてを取り入れるところに日本精神の面白さがある、そしてこれは神道精神と無関係ではないと、私は思っております。

質問に答えて

△「日本人としての自信」ということについて▽

終戦直後われわれは正直なところ自信などというものは全く失っていた。だが、さきにも申上げた、楽天性と勤勉性によつて、外国人からほめられるような復興振りを見せた。自信というのは不思議なもので、人にほめられないと出てこないのですね。そして、自信を持つということはただ経済的繁栄だけでは駄目ですね。金持になつたからといって威張るわけにはいかない。日本の伝統、日本人自身の中核性格が、決して万邦無比とは言われないが、世界文化を構成していく有力な要素としてはずかしくないものであり、日本人は世界に貢献しうる素質を充分もっていることに気づくところから自信が生まれてくる。経済的繁栄だけなら、多くの歴史家が指摘しているように精神の空洞化をもたらし、ローマ帝国が繁栄の絶頂で亡んだように、日本も非常に危険だということになります。自信も生まれません。

△国防の問題について▽

西ドイツの国民は、占領下では憲法の制定を拒絶しました。日本では占領基本法にすぎないものを「平和憲法」として認めてしまった。この偽憲法が二十年間以上も定着しているのです、いまずぐ憲法は改正できないだろうが、国防の問題は「平和憲法」を超越した立場から真剣に考えねばならない。核時代の防衛というのは大変むつかしく、一国だけではできない。核装備の問題等は専門家にまかせるとしても、局地戦争には日本を二ヶ月なり三ヶ月なりの間守れる

正式の国軍が必要だ。戦争が起らなくても、国連にはいつていかざりは、国連の出兵要求にはちゃんと応じることのできる軍隊をつくっておかなければ、日本は無責任すぎる。自国の経済的繁栄のみを楽しんでいるような国は世界の孤児になるであろう。憲法改正と再軍備は、もはや時間の問題であつて必ず国民の支持を得るようになると思ひます。

△神話のとり扱い方について▽

神話の問題が前面に出すぎた形ですが、日本をこれまでに立派にしたのは神話だけではない。社会が複雑化するにつれて、神話、宗教だけでは人々の生活を発展させることができなくなり、技術と科学が発達してきた。発達しなければ、またその民族は生きのびることができない。技術や科学は蓄積できる。ところが人間の道徳とか人格完成というものは、これは一代限りのものであります。したがつて科学面、技術面の発展のみが近代史においては目立つて今日に至つておる。しかし技術や科学のように蓄積できないところの、人格とか精神とか道徳とかいうものは、神話をはじめとして、日本二千年の伝統と歴史から学ぶよりほかはない。技術と科学は人格と道義を生まない。しかし、私は何も神話だけを重要視せよといつてゐるのではない。ただこれを全く否定した、いままでの社会科学教育が不具であることを強調したわけなのであります。神話は、さつき申し上げましたように、そのころとしては科学以上の厳密な精神と知

恵を集中してつくり上げた一つの自然解釈であり、社会の規範であつたのです。そういうものとして、われわれはローマ法かナポレオン法を研究して、いまの法律の参考にするように、日本で生まれた神話は、日本民族の現在と将来の参考になる。しかも民族の潜在意識と、コア・パーソナリティに直結している面が神話に多いから、そういう点をわれわれの現代の知恵によつて掘り起すべきだ、そういうものとして神話を扱うべきだと私は申し上げたわけです。

△日本躍進説に喜んでいてよいか▽

吉田さんは極めて楽観的で、経済的繁栄は精神の空洞化をもたらすが、これは日本人自身が反省するだろうし、いくら西洋に行つても、西洋人になつて帰るやつはいない、いいところだけ学んでくるのだと言っている。しかし、この楽天主義の底には吉田さんの強烈な愛国心が存在していることを見落してはいけない。

ライシャワーは、日本の経済力は近いうちに米ソについて世界第三位になるだろうと言ひ、ハーマン・カーンは、紀元二千年には、日本の国民所得はアメリカを追いぬいて世界一となるという予想を発表しておる。これには日本人の方が面くらつた形です。しかしハーマン・カーンというのは、これは軍事評論家でありまして、アメリカに対する警告としてこういうことを言っているのです。日露戦争後に、日本軍が大勝するという日米戦争未来記がアメリカでたく

さんでましたが、これは「まごまごしている」と、日本に負けるぞ」という警告でした。ハーマン・カーンの発言もそういう意味の未来戦記の色彩が強い。だから、ぼくらは経済生長だけで世界一級国になるというようなことは思わないほうがいいのであつて、向うがハーマン・カーン流の警戒警報を出したのだから、われわれのほうにも大きな穴があるのではなからうかと反省し警戒すべきだと考えます。

△軍備に代る他のもので、国防を考えることはできないか▽

そういうことができれば大政治家で、私は本当にありがたいと思います。世界も感謝するでしょう。学者の中にはそのようなことも可能だと考えている人もあるようですが、カントの「永久平和論」と同じく「机上の哲学」でしょう。共産党ははつきり日本に革命を起して赤軍をつくれ、それまでは軍備はいらないと言っていますし、社会党は非武装中立が可能であると言い出したので取消すこともできず、そのままおし通しています。これは政治家の言うべきことではない。非武装中立は残念ながら「机上の政論」にすぎません。

これからは、日本が自ら起こす戦争はごさいません。当分はないでしょう。だが、武装してもしなくても、世界戦争が起れば日本はまきこまれます。戦争が起らなくても、なぜ軍備が必要かと申しますと、国連軍に派兵の義務も果さず、他国の戦争の特需で独り繁栄をむさぼるよ

うな利己的で無責任な日本であつてはならないからです。すでに日本には戦前の三倍以上の力を持つ自衛隊があります。早く憲法を改正して、自衛隊を正式の国防軍にし、国際的責任を果すと同時に、いざというときには日本を守ってもらわねばならぬと思つております。

(作家)

ベトナム問題について

山本勝市



ベトナム人の性格―その歴史との関連

北と南の国民感情

反フランス独立運動の推移

ジュネーブ協定

ベトコンの結成

ベトナム動乱の将来

△質疑応答▽

ベトナム人の性格—その歴史との関連

レジメの要旨に沿ってお話しいたします。

まず第一に「ベトナム人の性格—その歴史との関連」ということですが、ベトナムの問題を理解するためには、当事国であるベトナム人の性格や、ものの考え方などをよく理解しなければならぬ。そうでないと何故あんなに戦争が長く続いているかということもよくわからないのです。

最初に「独立への要求」と書いておきましたが彼らは非常に独立心が強い。強いがその独立心というのは正確に申しますと、外国人の支配を受けたくないという要求なのです。なおこれはあとでだんだん明らかになりますが、ここでいうベトナム人というのは特に北ベトナム人のことなのです。

フランスが支配していた時代には北のほうの紅河の流域のトンキンというところは、これを保護領として治めた。その南のユエを都としている安南には王様がいて、その王様を通して保護領として、更にもう一つ南のサイゴン、そのサイゴンからメコンデルタにかけての荒漠たる平地、米のできる場所ですが、あの辺はコーチェンチャイナとして直轄植民地として治めたのです。フランスはこのように三つに分けて治めたわけですが、勝手に分けたのじゃなしに、

一九世紀半ばごろフランスがはいって来たときには、すでにその三つはある程度趣きが違っていたのです。

ベトナム人の古い祖先はどこから来たかよくわからないけれども、チベット人が雲南を通じて、ベトナムの紅河の流域に定着して、先住民のインドネシア人と混血してできたという説もあるし、蒙古族が中国で春秋の時代だんだん追われてあそこに定着したという説もあります。とにかくはつきりしていることは、紀元前一一年、支那の漢に亡ぼされて、それから約千年の間中国人の支配を受けたということです。そして紀元後九三八年になつて呉権（ゴークエン）という人が出ます。この人のときにはじめて独立したわけですが、問題は、その呉権が独立の悲願を達成して、千年の中国支配、ベトナム人はこれを北属と言つておりますが、その北属を脱却して、ベトナム全体、サイゴンからメコンデルタ一帯までを支配するのに約八〇〇年、中央の安南のユエまで入ってくるのさえ三〇〇年も四〇〇年もかかっているということです。このことが非常に重大なことです。だから中国が支配していた時代には、サイゴンの政府がいま支配している南ベトナムというものはなかった。こういうわけで中国支配に抵抗したいろいろな英雄の物語りは、北ベトナム人であつて南のベトナム人ではないのです。南ベトナムに住んでいたのは、インドネシアのチャム族という一族とクメル文化に属する今のカンボジア人だけでした。



現在ベトナムは南と北に分れておりますが、これは歴史に非常な違いがあるのです。とにかく昔から南ベトナムの領土はベトナムが支配していたのではなくて、フランス人が入ってくるわずか一〇〇年ぐらい前によりやくベトナム人がサイゴンにはいったのです。しかもベトナム人がサイゴンを占領したよりもさらに一〇〇年も前からフランスの宣教師がはいって、あそこで非常な力をもつて根をおろし、自分達がスポンサーになってグエン王朝というベトナムの王朝をつくつたのです。これが一八〇二年です。それから一八五八年にフランスがベトナムに出兵、翌五九年にサイゴンを占領し、だんだん北の方へはいつていつて、ダナン、ユエを占領しハノイを占領したのが一八八三年です。かなりの長い間かかっている。要するにベトナムの歴史を読むと外国支配に対する抵抗の強さがわかりますが、それはベトナム人全体のことではなくて、北の方のベトナム人の問題です。フランスの統治下においても、フランスの統治に猛烈に反対したのは主として北のものです。中部にはいくらかありますが、南のほうは、それほどの抵抗は示さなかつたのです。

北と南の国民感情

次に北と南、それから中部、ことに北と南との間の国民感情には非常な違いがあるというところに心をとめていただきたい。南の人に聞きますと、北の人間はアグレッシブで、つまり攻撃的であつて同時に好戦的だといいますが、北の人間は自分のことを「われわれは進歩的だ」といいます。南の方では「自分達こそ本当の平和的で、地道で、真の生活の幸福というものを知っている」と言っていますが、北の人間に言わせると「南の奴はのろくて田舎くさい」というのです。これは一つには気候風土の関係もあるし産業のちがいもある。すなわち南のほうはほとんど全部農民ですが、北の方は世界でも有名な鉱産地です。ことに今日ではなお一層ソ連あたり援助もあつて工業も進んでいる。中部の人に聞いても南の者はのろくて無知で田舎くさいといひます。南の方の人に聞くと「中部の連中は政治的で観念的で言うことがはつきりしない。何を言っているのかわからない。」という。ところが中部の人間は自分のことを「われわれこそもつとも文化的で本当のベトナムの伝統をまもっている。」と言うのです。これは安南王朝というものがそこにあつたので、古くからの伝統を保持してきたという誇りがあるのは当然でしょう。さらに中部の者に北の人のことをきくと「抜け目がなし」と言う。

とにかく北と中部と南、ことに大きく言つて北と南は、お互いにそういう長い歴史を通して

性格が違う。考え方が違う。したがって、南の人には、アメリカが北爆をやるので胸がすくというような空気がある。長い間北の者がいばりくさって、しゃくにさわっているという気持ちが南の人にはあるのです。

また、南北の統合ですが、ベトナムの場合は、独立してから八〇〇年もかかってベトナム人が南を支配した。その支配が充分届かないうちにフランスがはいつてきたというような実情があるために、南の人はかなりのインテリでも北と一緒になくても何にも得はないと言います。もつともジュネーブ協定のあとで一〇〇万近くの人が北から逃げて南へ移ってきておりますが、彼らは頭もいいから相当の地位にいる。そういう人達はやはり南北統合の希望はもっておりますが、しかし本来の南の人にはそれほど魅力はないのです。とにかく外国人が考える以上に、南と北の性格や物の考え方は違っているのです。

次に「村落と秘密組織―閉鎖性」と書いておきましたが、中国がベトナムを押さえていた千年の間、南ベトナムというものはなかった。クメル人とチャム族が住んでいたといいましたがフランス人が来てから都市は押さえておりますけれども、農村の隅々までは支配が及ばない。そこで農村には、われわれが考える以上のコミュニティがあり、外から入ってくるものを防ぐのにも村の者が一つになってやるのです。殊にベトナムの特徴は、とくに北部では、背の高い竹の垣、竹藪で村をずっと囲っているわけです。(村によれば丸い村もあれば細長い、ほとん

ど一軒か二軒ぐらいの家がずつとクリークに沿って並んでいる長い村もありますが、この竹の垣が要するに彼らの農民の世界を形づくっているわけでありませう。そしてそれほど金持ちでもないがそれほど貧乏でもない。文化は低いけれどもそう生活に困らない。旧の正月がくるとよそへ行っている者もたいい村へ帰ってくるし、よそへ何年も行っている者も死んだら村の墓に埋めてもらうのが理想なのです。また村の中では中年の婦人が仏教婦人会をつくっている、それらの活動は何かにつけて一緒にお互いに助け合つて行くというようになかなかよくやっているものもあるようです。しかし外国の支配をうけている中央政府の恩恵があまり及ばない村は、自然閉鎖的になつて秘密で組織をつくるという習慣がある、と言われております。これはフランスの支配、北の方では中国の支配に抵抗してきた間に、自然に身についた彼らの習慣なのです。インドネシア人は開けっ放しで単純で子供みたいですが、ベトナム人は、よく言えば不屈の精神、悪くいえばしぶといところがあるのです。

最後に「ファナチズムとパシフィズムの併存」ということですが、これもやはりベトナム研究者が指摘するところのです。焼身自殺といつて坊さんが自分の体に油をかけて昼中、町の真中で焼死ぬことをやります。われわれからみたら大変なことですが、向うの人は本当に熱してくるとそういうこともやる、しかし一方ではその焼身自殺をやっている坊さんをとめないでじつとみている。狂信的な行動が一方にあると同時にそういうものがあつてもそれにわずらわさ

れないで自分の生活を送っていくという、もう一つの平和な性格が出来上ってきているのです。

反フランス独立運動の推移

先ほど申しましたとおり、一八八三年にフランスがハノイを占領して一九世紀終りまでかなり長い間かかって支配したわけでありますが、これに對してベトナム人ははじめから強く抵抗してきた。一番最初にベトナムの独立運動が燃え上つたのは日露戦争の時であります。ファン・ポイ・チャウというベトナム一の学者が、安南の王様のプリンス、二十四才のコンデイ侯を説きふせて、東京でベトナム独立の日本支部という看板をかけて、犬養、頭山、根津というような大陸問題について頭を悩ましていた国土達がこれを保護したのです。そのコンデイ侯を中心にしてベトナムの独立をめざす青年が一時は千人ぐらい東京に集つていたといひます。

彼はその後日本から立退かされ、中国、アメリカなど方々歩いて最後にまた日本へ舞戻つてきた。そして亡くなるまでベトナムの独立のために骨身を削つてゐるのです。パンコックまで行つて上陸できなくて帰つてきたこともありましたが、ホーチミンも香港の監獄に入つていた時、コンデイ侯に助けられたことがあると伝えられています。コンデイ侯は、常にベトナムはお互いに血で血を洗つてはいけない。自分が行けば必ずホーチミンと反対派の手をつながせることができると言つていたようですが、とうとうそのことも出来ないで東京の荻窪で亡くなられてい

る。のちにその残された二人の王子はやはりお父さんの骨を拾いに来ましたし、また亡くなる前には、独立してからの総理大臣、ゴ・ジン・ジェムもアメリカへ行く途中で訪ねております。こういう深い関係が日本とベトナムの独立運動との間にあったということも知っておいて下さい。

第一次大戦後の独立運動の中で沢山の団体ができましたが一番強力なのが三つある。一つはベトナム国民党といえます。これは今もあります。よくVNQDDと略して言われます。これと並んでもう一つできたのが共産党です。これは今のホーチミン（当時は別の名をつかっていた）が一九二五年に支那の広東で「革命青年同盟」をつくったのがはじめです。それからもう一つ、大越党（ダイヴェット）、これは今もあって、今度の選挙にもずい分活躍しております。大越党というのはさきほど言ったコンデイ、ファン・ポイ・チャウなどの流れを汲んで、日本が仏印に進駐している時にも日本に非常に協力をした人々です。ベトナム国民党のほうは中国孫文の国民党がモデルで、大越党は日本がモデルなのです。

ところで国民党というのは北の方です。この国民党はだんだん激しくなつて一九三〇年（昭和五年）有名なイエン・バイの大反乱を起し、これを機会に徹底的な弾圧をうけ、殺されたものもあるし、残った連中は支那の雲崗に逃げた。それ以後はほとんど動きのとれぬようになっていたのですが、今次戦争で日本が敗れ、十六度線以北で中国軍が日本国の武装解除をやるために

入ってくる時に再び一緒に入ってきたのです。

共産党のホーチミンというのはなかなかのえらみもので、くせ者のようです。彼は、一九三〇年、それまで三つに分裂していた共産党を、コミンテルンの命令をうけて一つにまとめて正式にベトナム共産党を発足させた。そして他のナショナルリストが愛国主義者ではあるけれども組織がないのと違って、彼は着実にソ連と中共にまねて、地道に組織を作って行ったのです。

次に日本が仏印に進駐したということが、ベトナム独立運動に二回目の大きな刺激を与えたのです。一九四〇年(昭和十五年)六月、日本の軍隊が北ベトナムに進駐した。これを契機にしてホーチミンはベトナムを作ったのです。これは日本語に訳すると「ベトナム独立同盟」ということです。その時には中国にいた反共の愛国主義者たちも一緒になって作ったわけですが、だんだんとホーチミンはそれらの連中を追払ってしまうのです。このベトナムというのが、名前は幾度かかわったがその後もずっとフランスに対するレジスタンスの主体になっていくわけです。

一九四五年(昭和二十年)の三月、フランス軍隊が日本の敗戦を見越して日本軍を滅そうとする計画があることがわかったので日本の方で先手をうってフランス軍隊の武装解除をした。そして日本軍が半年の間、直接これを支配したのですが、何しろ日本軍は三万五千ぐらいしかいなかったので都会だけしか支配できない。しかもフランスの軍隊と役人を一ヶ所に監禁して

しまったので、ベトナムは非常な混乱状態に陥ってしまつて、治安の維持にあたるのはベトナムと南の方はカオダイ、ホワハオという二つの仏教団体でした。それから半年たつて日本が敗けて、そのあとに南の方はイギリスの軍隊が来て日本の武装解除をした。その後ホーチミンのベトミンが主体となつて抵抗を続けていつたのです。一方フランスとしてはどうしてもこのままではだめだといふので、たびたび話し合いがもたれましたが、結局一九五三年になつてホーチミンのほうから休戦してもよろしいと提案したのであります。この提案をもとにして一九五四年四月にスイスのジュネーブで九ヶ国が相談してジュネーブ協定といふものをつくつたのです。

ジュネーブ協定

よく人々は、アメリカはジュネーブ協定に違反しているといいますが果してそうか。この会議には北ベトナム、南ベトナムそれにソ連、中共、イギリス、アメリカ、ラオス、カンボジア、フランスの九ヶ国が集つたのですが、そこで決つたことは(1)一七度線を境にして休戦をする。しかしこの休戦ラインというのは国境ではない。国境をどうするかということは二年後に選挙をやつて自分で決めればよろしい。(2)ベトナムに対しては外国の軍隊、外国の武器といふものを持ち込んでほならない。(3)一七度線はベンハイ河という河を境にして非武装地帯をつくるが、この地帯は勝手に軍人も文官も通ることはできない。(4)南の方にいる者で北へ行きたい者は北

へ行ってよろしい。北におる者で南へ行きたい者も行ってよろしいというようなことでした。ところがその決めたことに対して南ベトナムは判を押さなかつたし、アメリカも判を押さなかつた。こうして残りの七ヶ国だけが判を押してベトナム停戦協定というものができたのですが、何故南ベトナム政府がこれに判を押さなかつたかといひますと、これにはちゃんとした理由があるのです。

第一にベトナムの国民の衷心の願ひはベトナムが二つに分れないで自由な選挙をやつて自分の運命を決めたいのだ。ところが自由な選挙をやるのには軍隊がいてはできないので、選挙が行われるまで外国の軍隊も北と南の軍隊も全部武装解除をして国連の監視下において選挙をやつて決めたい。これが衷心の願ひだ。ところがその提案に対してジュネーブ会議は一回の審議も行わないで否定したのです。これが彼らの不満の第一です。

第二は、選挙を二年後に行うというが、選挙を行うということは、独立国における重大な政治的決定である。ところがその選挙期日の問題などをあらかじめベトナム政府の承諾を得ないでフランスの司令官等が北ベトナムと相談して決めた。これはどうしても承知できない。

それから、戦争が終つたときにハノイの周辺はホーチミンが占領していたのではなくて、政府軍(今の南ベトナム軍)及びその連合軍が占領していたのです。それをフランス司令官とホーチミンが南ベトナム政府の承諾を得ないでその軍隊を南へ行けというようなことを決定し

た。彼等にこんなことを決める資格はどこにあるか。もしハノイ周辺を共産主義者に渡したら、彼らは必ずそこを根拠にして南に攻めてくるに相違ない。だからハノイ周辺は非武装地帯にしてももらいたという要求を出したがそれも蹴られてしまった。そういう理由で南ベトナム政府（当時は南ベトナムとはいわず単にベトナム共和国といった）は承認しなかったのです。

アメリカはこの南ベトナムの言うことに同感したわけですが、そして自分達は判を押さないけれども、この条約を犯すようなことはしない。但し、北から南へ入ってくるような、南ベトナムが心配しているような事態が起つた場合には、アメリカは深甚なる関心をもつし、それは平和と国際安全に重大な脅威を与えるものと認めるといふ声明をしているのであります。

ベトナムの結成

問題は、どうして北ベトナムが判を押したかということ。勝ったベトナムにとって損であり、南ベトナムもアメリカも承認していないこの協定になぜ判を押したかというところ、結局ぐずぐず言っている二年後（一九五六年）には、フランスは外交的手段で選挙を行おう。選挙を行えば、もう北は共産主義で一枚岩だから必ず南も併合できると考えて判を押したものに違いない。ところが、二年後になっても選挙はできない。「自由選挙の条件が欠けている」といってゴ・ジン・ジェムが応じなかつたのです。それからホーチミンはゴ・ジン・ジェム政

権がもつと早く倒れると思つていたがなかなか倒れない。そこで北ベトナム、ホーチミンは方針をかえて「民族解放戦線」(ベトコン)というものを作って武力で統合するということに決めたわけです。ベトナム共産党という意味ですが、これはゴ・ジン・ジエム政権のやり方がまずく、独裁政治をやったからそれに対する反対運動として起つてできたのだ、民族主義者が集つたのだといいますが、実はよく調べてみますと、ベトコンほど綿密に組織的に計画的に作られているものはない。だから一九六〇年(昭和三五年)一二月にベトコンができた時はもう秩序整然としている。つまりジュネーブ協定で選挙がやれないとわかつたころから準備をすすめていって、六〇年一二月にすつかり計画的に用意ができて立ち上つたのです。さらに六〇年の終りから六一年のはじめ、六一年の終りから六二年のはじめにかけて猛烈な組織運動をやつて、党员は各々倍になっております。ゴ・ジン・ジエムは六三年一月に殺されたのですけれども、その間ベトコンの数は三万乃至十万もふえていると言われます。そしていよいよ北が南を解放するといふので、どんどん武器を送つてきた。指導員を送つてきた。結局一九六四年(昭和三九年)の中ごろになりますともう南ベトナムはそのまま放つておけばやられるという状況まで追いつめられてきて、そこでアメリカは非常な決心をして軍隊を送る。韓国の軍隊もいく、フィリピンもオーストラリアもいくということになつて戦われているのが現状であります。

今日の状況はどうなつているかと言いますと、軍事情勢は一九六四年から今日までずっと長

い経過を辿つてみますと、一進一退はありますけれども、アメリカ及び政府軍のほうは順調に進んできている。ベトナム及び北ベトナムの勢力は衰えてきている。政治情勢も新憲法にもとづく九月の大統領選挙、十月の下院の選挙というようにだんだんと進んできている。経済も二、三年かなり困難な時期がありました。今日においてそれほど困難はないと思います。ただ平定計画、つまり民政安定計画というものはなかなか外人の手に負えない。だから相当長い期間を要するだろう。しかし軍事的にはおそらく韓国と北朝鮮の關係のような形で、ジュネーブ協定のようなことじゃなしに、おそらく来春までにはいろいろな条件を考えて片付くであろうと思われませんが、あとは平定計画に相当長期の時間を要するという情勢だと思います。

いずれにしても、このベトナム問題について、アメリカ国内でも日本国内でもいろいろな議論がありますけれども、昨年（昭四一年）私がテヘランの列国議員同盟の会議に行きましたときのことをちよつと申し上げておきたい。そこではソ連をはじめ、共産圏の諸国は口をそろえてアメリカのベトナム侵略を攻撃いたしました。その時ベルギーの代表が立つて反論をした。それはどういふことかというところ「ベルギーは二回にわたつてドイツ軍の侵略を受けた。ところがそのドイツ軍を追払つてくれたのはアメリカの兵である。そのおかげでわれわれベルギーの国民は独立を保っているのだ」ということでした。次に韓国の代表が立つて「私のところも同じだ。私のところが北からの侵略を受けた時にアメリカを中心にして十六ヶ国の軍隊がきて追

払ってくれたから今独立しているので、その時の恩義を思うから今日四万五千という兵隊をベトナムに送つてアメリカに協力しているのだ」と説明しました。フィリピンも同じ様な反論をしていました。私はそれを聞いていて考えさせられたのですが、やはり自分の体験に基いての言葉でありますから説得力がある。つまり自分達の経験からみるとアメリカがそこに植民しようとか利益を得ようというので青年の血を流しているなどということは考えられない。われわれ自身の体験からみてわれわれが助けられたように共産主義の侵略を阻止する、しかも火事はぼやのうちに消さなければ犠牲は大きくなるというので今アメリカは戦っているというのです。

ベトナム動乱の将来

現在アメリカがあくまでベトナムを撤退しないというのは、もしアメリカがベトナムをいま撤退するようなことがあつたら、ベトナム国民もさることながら、世界でアメリカが日本その他四十ヶ国に対して、もし不当な侵略を受けた時にはアメリカはこれを助けにかけつけるという約束が反故になるからです。もしそういうことになればこれは世界の平和に重大な影響を及ぼす、だからアメリカは如何なる犠牲を払つてもこの約束を実行するのだと言っているのです。

もしアメリカが撤退したらどうなるだろうか。私の予想ではベトナムの南の国民は徹底的に

斗います。というのは一〇〇万からの人間が北ベトナムの共産党のやり方に愛想をつかして南へ来ている。しかもこれまで政府とアメリカに協力をしてきた何百万の人はもし、アメリカが撤退して北ベトナムが入ってくれば自分達は殺される。だから殺されるよりは殺そうということになりますからこれはもう本当に血で血を洗う今日以上の内乱が起ってくるにちがいない。しかしそれでもアメリカが撤退した場合には馬鹿だとかのろまだとか言われているあの農民を主体にした南ベトナムは、アグレッツでウォーライクの北の共産軍にやられてしまうにちがいない。やられたらカンボジア、ラオスもやられてしまう。マレーシャもやられる。こうしてマラッカ半島まで共産党の力の支配下におかれることになるでしょう。もしそうなった場合には、日本は産業的にもまいってしまはずです。なぜなら日本の石油の大部分はマラッカ半島を毎日通ってやってきているからです。この間の中東のイスラエルの争ですらも日本の産業に大きな影響を与えているのです。のみならずアメリカがベトナムから撤退するような情勢になれば、フィリッピンや韓国や日本において共産側が非常な力を持つてくるにちがいない。これは大変な状況になってくると思います。ですから私はアメリカの青年が血を流しているのを日本人が黙ってみているのならまだしも、日本人が自分は何も犠牲を払わないで、しかもアメリカの悪口をいうようなことをつづけていけば、それこそ罰があたるのじゃないかと思えます。

日本の経済が伸びた一番大きな理由はこれはあんまり本に書いてないが、私は自由市場経済

に移ったからだと思えます。勤勉であるからとか、貯蓄心があるからだということはみな書いてありますが、しかし勤勉であるというのは日本国民の性質であつて、昔も今も変りはないのです。ドイツでもドイツが復興した理由をドイツ人は勤勉だからというのに対して、レプケ教授は勤勉なら東ドイツのドイツ人も勤勉である。西もそうだ。ところが同じドイツ人で東はうまくいかないのに西だけうまくいくというのはどこに原因があるか。やはり自由に自分の能力を発揮して競争するという経済体制をとつたためだと言つています。私は日本もそうだと思えます。だから過去において統制時代にあれもないこれもないといつていたが、統制をはずした瞬間に全然ないと言つていた密柑などがどんな田舎の店先にも並んだのです。その自由な経済、自由な社会の息の根を止めようとしてるのが共産主義の主張です。この共産主義の組織と自由の組織というものは火と水のような関係であつて同時に同じところには存在できないのです。明治以後の日本は自由な体制をとつてきました。それが大正から昭和にかけて共産主義思想が入つてからだんだんと統制が強化され、計画経済になり、そしてまかり間違えば経済などはソ連のようなやり方をまねようというものが学者にも軍人の中にもできていったのが、戦争に負けて今度はアメリカのリードのもとに自由な体制が復活した。それが日本をはじめ、自由諸国の経済が伸びた理由であります。ロシアは今ごろになつて利潤ということを言つていますが、自由市場のないところでは利潤の計算はできないのです。如何に利潤が大事だといつて

も利潤の計算ができないのじゃどうにもならない。そのような共産主義に日本の経済がやられてしまふことは許されぬことです。

最後に申し上げたいことは、日本の経済はたしかに伸びたけれども現代は明治時代までに蓄積されておつた道徳的遺産というものを次第に食いつぶしているのではないかということだ。それは戦後というよりも、大正時代からはじまつている。それが戦後になつてなお一層食いつぶしてどうやら底をつきかけているのじゃないかと思うのです。ベトナム問題というごく局地の戦争のようですけれども、これは日本の運命にかかつてくる大問題です。自分としては、ベトナム戦争にわれわれが協力する最大の仕事は、アメリカのやつていることに間違つていないことだ。それが当然忠告すべきですが、大筋においてあれは侵略じゃなしに侵略を阻止しているのだということを、日本国内はもちろん世界の世論に訴えることだと思ひます。

質疑応答

△問▽ 来るべき一九七〇年の安保改定に際して、日本人としてまた学生としてどんな態度をもつべきでしょうか。

△答▽ 一九七〇年という年に私はこだわる必要はないと思ひます。共産党のほうでも実は野坂参三氏が一九七〇年がわれわれが政権をとる年だといつていたし、社会党もそう言つており

ましたが、最近はそのようなしに一九七〇年を一つのめどにして今から戦っていくというものであつて、その時に革命がやれるの、政権がとれるのということはいまのところは考えていない。できるだけそこへ行くようにふだんから積み上げていくというやり方なのだから、七〇年という年にあまりこだわらずに今から彼らの活動に対抗する必要があると考えます。

△問▽ 北ベトナムでは一人一人の人間の自由な考え方を妨げるようなことが行われているような気がするのですが何か具体的なことがありましたら教えて下さい。

△答▽ 北ベトナムは一九五一年から五回ぐらいにわたつて社会主義化を進めてきているのです。その間に約一〇万人の人を殺したといわれています。一九五三―五六年には「反封建闘争」の名で徹底的に粛正をやつた。その後たびたび農民が暴動をやつている。もちろん北ベトナムでは共産党以外の政党は許しませんから、途中で反乱が起つても結局は反対するものは殺してしまふのです。そういうことをやつたものだから、自分の郷里をすてて一〇〇万人の間が北から南へ逃げてきたわけなのです。自由への圧迫というものを目に見て逃げてきたものです。

それからひとこと言いますが、ベトナムは民族主義であつて共産主義でないという人があります。どこの国の者でも国を愛しないものはないので、程度の差こそあれ皆民族主義者です。その民族主義者が共産主義でなければ真の平和も国の復興もないと考えるものと、共産主

義では復興もなければ幸福もないと考えるものが対立しているわけです。だから民族主義者であれば共産主義者でないとか、共産主義者であれば民族主義者でないというのはまちがいで、実は民族主義者の中に共産主義者と反共産主義者が対立しているのです。日本においても大体そうだと思います。共産主義者といえども愛国心のないものはないのだけれども、愛国心を實現する手段として共産主義を主張するところにおそるべき事態が生じてくるのです。

(経済学博士)

パネル・ディスカッション

—現在日本の最も重要な問題は何か—



出席者

木内信胤

林房雄

山本勝市

夜久正雄（亜細亜大教授）

川井修治（鹿児島大学助教授）

司会

小田村寅二郎（国民文化研究会理事長）

現在日本の最も重要な問題

司会（小田村）では只今から「現在日本の最も重要な問題は何か」というテーマでパネル・ディスカッションを始めさせていただきます。まず講師の先生方からその「重要な問題」をそれぞれ一つまたは二つ程度出していただき、その一つづつについてご意見を交換していただくという形ですすめてまいりたいと思います。

なお途中で問題のテーマと関連して出てくるかと思いますが、昨年一昨年と、このパネル・ディスカッションで国語の問題がとりあげられております。そのことについて木内先生から途中で多少の時間をとって御説明いただきたいと思っております。お話の間にその問題が出されますと唐突になつてはいけませんので最初に私の方から申し上げておきます。では最初に木内先生からよろしく願います。

木内 最も重要な問題ということですが講義でも申しあげましたように、これまでの日本では経済が一番問題だった。しかし今では経済は一応卒業したといつていい。従つてこれからは政治を日本らしい本物の政治にすることと教育の在り方を直すこと、この二つだと思ひます。教育の面では大学教育と小学校の教育とが特に問題である。小学校では国語と社会科、その中でも歴史を正しく教えることが今後の眼目であると思ひます。

林 私も今の意見に同感ですが、特に私が申し上げたいことは、われわれは「曲学阿世」の徒と戦わなければならぬということです。曲学阿世という言葉は皆様ご存知の通り昭和二十六年、全面講和か多数講和かという問題が起つたとき、ソ連、中共をも含めた全面講和が出来るまで待とうという実行不可能なことを主張した学者に対して吉田茂さんが使つた言葉です。昔の曲学阿世というのは権力に迎合して自分の学説を曲げたのだが、戦後の日本においては、権力による言論の圧迫はなくなつた。それどころか世界に類例のないような言論の自由が許されている。すると今度は権力に迎合するのではなく、いわゆる大衆におもねつて、いやしくも学者にあるまじき言説を吐く。その例として吉田さんは南原繁東大総長を槍玉にあげた。南原さんも怒つて直ちにこれに反駁した。ところがその反駁に対しては、佐藤栄作幹事長の名前で「学者が自らの信条において学説を発表するのは自由だ。しかし学者が政治家の言動を批判する権利があるように、現実の日本の問題を処理する責任をもつている政治家もまた、学者の学説に反論する権利がある」という、堂々とした声明書を發表したのです。

あの時からすでに十数年を経過しているけれど、この種の「曲学阿世」は未だに強力に尾をひいている。われわれはそれと戦わなければならぬ。それが現在の日本における最も重要な課題の一つだと思います。

山本 一言で申しますと、思想の混迷、あまりにもひどい思想の乱れをこのままほうってお

くべきではないということです。現在、政治がうまく行っていない。それは要するにその局にある人の勇気が足りないからですが、その勇気が出ないのは、つまりは思想界が混迷しているからです。思想界が混迷しているので、何かやれば非常な混迷におちいる。それがこわいために何一つ決断が出来ないままに事態が進んでいる。このままで行けば、はつきり手おくれになつてしまう。まかり間違えば、日本がソ連、中共のような国になる場合もあると思うのです。なつてもいいではないか、間違つていたと思えば、その時もとに直せばいいと言う人もいます。

しかし例えばインドネシアが共産主義と袂別するためには三十六万の人間が殺されている。それでもまだ共産革命の不安が残っている。それを思えば、日本をこのような血を血で洗う状態におくことは決して許されぬ。火事はボヤのうちには消さないとんでもないことになるのです。そのためには思想の混迷をどう正すかが最大のかなめです。もつとも日本人がなすべき最大の問題といつても、私はそれを人に頼むということではなく、私自身がやるべき最大の仕事は何かという意味で申し上げたつもりです。出来るかどうか分かりませんが、人事を尽して天命を待つ、それが現在の心境です。

夜久 私にとつては少し問題が大き過ぎるようですが、多少考えていることをお話してみたと思います。二十年前戦争が終るまで、私たちはいわば死を目指して生きていたというような気持で、全身全霊をあげて戦いを勝ち抜くためにということ生きてきました。しかしその戦

争が負けて、天皇陛下の終戦の詔書をみんな涙して聞いたのです。私も東京にいて、さつそく宮城に参拝いたしました。そこではみんな土下座して泣いていました。そして日本の復興を誓ったのです。私はそれが今日の繁栄の原動力だと思ひますし、同時にそれは戦争で斃れた人の心を継ぐことであつたと考えています。しかしその間に占領軍がいろいろな政策を行つた。わけても明治以降の憲法が廃絶されて新しい憲法が出来たということは重大です。さらに国語国字問題についても、当用漢字問題についても、当用漢字、新仮名づかいが制定される。こうして諸君の御両親のもつておられた教養、文化というものはつきり断絶させられる政策が行なわれてゐるのです。教育全般についても同様のことが言えます。もつとも占領中はそれもやむを得ぬ面もあつた。しかし独立した現在まで、憲法をはじめとしてそれらの諸問題に対する検討と批判がなされないままになつてゐることは実に残念です。したがつてそのような占領政策の中でうちたてられた方針を一切廃棄して、本当に日本人の生きてゆくべき道を作り出して行かなければならない。それが今日の最も重要な課題だと思ひます。

川井 申し上げたいことは先生方がみんなご指摘になっておりますので、事新らしく提起するよゝうな問題はありませんが、最も重要な課題を私流に言えば、国民同胞感の確立をめざす一大啓蒙運動の展開であると言つていいと思ひます。啓蒙運動というと翻譯調の言い方ですが、実は昨年の夏でしたか、クイックという、アメリカの雑誌「フォーリン・アフェアーズ」の編

集長が日本に来て、その滞日所感を発表した。その中で「日本はまことに不思議な国だ。国民の過半数が保守党を支持しているのに、時流の表面に踊っているのはそれと反対の傾向だ」と指摘し、「とにかく日本の政府を中心に一大啓蒙運動を展開する必要がある。その時はすでに遅きに失する位だ」と警告していたことを思い出して私も啓蒙運動という言葉を用いたのです。クイック氏は政府に対して警告したのですが、国民の各層の人々がそれぞれの立場において一大啓蒙運動を展開しなければならぬと考えます。

司会（小田村） ありがとうございます。これまで五人の先生方から色んな問題を提起していただきました。随分問題が入り乱れてまとめにくいのですが、だからといって、これを政治、教育、思想というふうに整理してしまうとかえって問題が問題としての生きた力を失ってしまうおそれがあります。それでこのような整理を加えず、このままの形で更に隔意なく自由にご討議をすすめていただきたいと思います。いかがでしょうか。

国語問題について

木内 私の提起した問題を一応ドロップしましょうか。そうすればあと四人の先生方が提出された問題はほぼ同じですから、それについて話しあつていったら焦点が絞られるように思います。ただその前に先程司会の方からおっしゃつた国語問題についてちよつと話させていた

きたいのです。

国語問題については皆さんは聞く義務がある。というのは一昨年の秋、東京で国民文化研究会の十周年記念祝賀会が行われた。その時、会の目標がかかげられた中に、国語問題に積極的にとりくむという一項目がありました。私はいま国語問題審議会の委員として能う限りの苦闘をやつています。そこでその状況を報告して、あなた方もそれぞれ奮闘なさるその御参考に供したいと思うわけです。私どもが委員に任命されたのは昨年の五月ですが、今年の七月二十四日に私は次の六ヶ条の提案をしました。その第一は、国語表記を簡素化したいという理想は一応認めるとしても、その理想を訓令告示という手段で実現しようとしたのは誤りではなかつたかということ、その二は漢字制限は義務教育の場でなら一応の基準としては認してよいと思われるが、それを他の分野に拡大することはおかしいということです。まず政府が国語施策をやる態度に関してこの二つを質問しておいて、次に根本理念について提案をしました。すなわち第三として、戦後の国語施策の背景をなしている「見方」「考え方」には根本的な誤りがあったように思うと述べて次の四つの見方を記しておきました。(1)漢字は難かしいもの、不便なもの(2)漢字を教えることを少くすれば、それだけ他のことを教える余裕ができる(3)一つの字に多くの読み方があるのは不合理だ(4)表意文字は不合理で、世界の大勢は表音文字に統一されつつある。そして第四に、戦後の国語政策の推進者たちは日本において漢字仮名まじり

を表記法とするに至った歴史的事実に対する理解を欠き、日本語がローマ字表記になればそれに越したことはないぐらいに考えていたのではないか、という点をあげました。あとの二つは参考事項ですが、最近アメリカ等の言語学者の間に、漢字仮名まじりという表記法は非常に能率であるという意見がはじまっている由だが、研究に価するのではないか。漢字の教え方の研究は足りないそうだが、そこに新分野を拓けば、そこから国語問題の全体に新しい道がひらけてくるのではないかということ。漢字の教え方については、小学校の一年生だけで五〇〇〇字を教えるぐらいわけではないという、あの有名な石井勲先生の方式を頭においての提案です。

このように六つの項目をならべて提案しましたが、要するに政府の権力で国語をいじくるのが飛んでもない間違いだということ。漢字は難しいと言われていたが、石井方式でやればいくらでも教えられるのだし、人間の頭はガラスの容器とちがって、覚えれば覚えるほど伶俐になり、使えば使うほどよくなる。この当り前の事実をもっと大切にしなければならぬと述べたわけなのです。「漢字仮名まじりを表記法とするに至った歴史的事実」というのを簡単に申しますと、日本にはじめて大陸の文化がはいつてきたとき、当時の人は初めは支那語として文献を読んでいた。例えば山という字は支那語の発音に近い「サン」という読み方をしていた。ところが山という字は日本在来の言葉の「やま」を意味するのだから、その字をヤマとも読むようになった。それが「訓」です。この訓読みを発明したために、漢字、漢文で書いてあるも

のにも送り仮名をつけ、返り点をつければ、その全体が日本語として読める。一方字のもつ意味とは無関係に、その字が示す音だけをとって、それを表音文字として使ったのが万葉仮名、さらにそれを崩して片仮名、平仮名が誕生する。こうして漢字仮名まじり文が生まれた。この独特の経路が、まるで性質の違うものを、巧みに自分のものとしてとり入れた日本人独自の工夫です。さらに支那語が日本に伝わった時期によつて漢字の音にも漢音、吳音、唐音がある。日本語は不合理だ。一つの字に多くの読み方があるのは不合理だといいますが、これは以上の歴史に根ざす当然の結果です。しかもそれを全部こなしているのが、複雑怪奇な日本人の頭脳です。それを政府の訓令や告示でいじれるはずはない。例えば音訓整理表というのがあつて、「父」という字の音は「フ」訓は「チチ」と決めてしまった。だから今の小学生は「お父さま」とは書けない。叱られる。こんなナンセンスが生まれているのが、現在の国語政策なのです。

さて右の提案を行いましたら、これを審議させられてはかなわないという人があつたので、この提案に対するリアクションを各委員が九月十五日までになるべく文書にして提出してほしいということになった。十月ごろから年末にかけて猛烈な議論が起つてくれることが望ましいと考えています。

私の意見はもとへもどれということではない。表記は次第に変わつて結構なのです。ただ学校

では明治に固まった日本文法、歴史的仮名遣等を教えていく、そしてそれを略式にくずすものはそれでもかまわないというように流していけばいい。それを政府の力でいじくるのがいけないというのです。ともかく盛なる論争を世の中に起してもらいたい。議論さえおこれば必ずい道に立ち至ると思うのです。今晚はそのお願いだけ申して、報告を終わります。(拍手)

俗論の横行

司会(小田村) 国語問題について木内先生から詳しい御話が出ましたが、次に先程の思想の混乱、教育の問題について、林先生に他の方々のご意見をお聞きになったところでもう一度ご発言いただきたいと思えます。

林 ディスカッションと言っても反対意見がないのでどうもファイトも湧きませんね。(笑い) 木内先生のおっしゃる国語問題なんかも賛成だから食ってかかるわけにいかないし。司会(小田村) 反対意見とおぼしきものが出ないと林先生ご発言がございません。

しかし反対ということではなくて、ここにおられる聴講者の諸君が諸君自身大学の一学生として、また自治会の一員として、この合宿で言われているようなことを自分の信条にするわけにはいかない、これまでうけて来た教育、あるいはジャーナリズムから日常吸収している知識ないしは物の考え方と非常にへだたった空気の中で苦しみを感じているとおっしゃる方もあり

かと思いますが、どうぞそういう方々の所感でもよろしいが、手をあげて発言していただきたいと思ひます。

林 私の意見に反対を引き出すために私の極端な意見を申し上げましょう。戦後の役人の中で一番困った存在が文部省の役人だった。それに大学教授、これも文部省の役人ですが、これらの人々がいろいろの混迷を残してきた。なかでも一番おかしいのは教科書問題で一〇〇万円よこせと言っている家永三郎、あるいは和歌森太郎、あんな人の書いた日本歴史の教科書をよむと、こんな国にどうして生まれたのだろうかと悲しくなってしまうように書いてある。それからもつとひどいのは京都大学の教授の井上清という人、この人に従えば、天皇制は明治以後に出来た。すなわち当時の藩閥政府が、ドイツやイギリスの政体をとりにいれて封建制の次にくる絶対君主制としての天皇制を考案したとはつきり書いてある。そして大学で国から月給をもらいながら、一方「赤旗」に書いてしきりに稼ぐ。それが今度、日本共産党が中共と縁を切ったとき中共派として残ったというので「赤旗」でひどく叩かれてある。そういう学者、これを私は曲学阿世というのです。もつともその中には単にジャーナリスティックな見栄だけではなく、己れの学問の浅さのために間違つた意見を吐いている人々もいるのです。しかしいづれにしてもそこに強い先入観があつて事態を曲げて見ていることは共通です。例えば維新の歴史を見ていると木戸孝允の手紙や、岩倉文書の中に天皇のことを「玉」と書いてある。それを進歩的な学

者たちは「たま」と拝んで、勤王の志士でも天皇を玉扱いにしたという。だがその「玉」は「たま」ではなく「ぎよく」——つまり将棋の玉将か玉座の玉のことでしょう。木戸孝允たちがいかに下情に通じているといつても「あれはいい玉だ」というような下品な言葉は使うはずがない。それは町人の言葉でさええない。雲助のことばです。それをいい加減な先入観で処理するからこんなことになるのです。或は最近騎馬民族説というのがある。あれは弥生古墳時代のころ大陸から騎馬民族が来て日本を征服した、それがおそらく天皇家の祖先だろうという新説です。しかしこれとても国家は階級の対立による征服関係がなければ成立しないというマルクス以来の先入観念が生んだ俗説にすぎない。

このような風潮に対してはやはり学生諸君が目覚めて、新しい流れを作らなければならぬ。そしてジャーナリズム自体に反省を求めなければいけない。反論を吐く学者を支持する学生層が出来なければいけないし、それは必ず出来る。時間をかけさえすれば必ず出来る。私はそう信じています。

山本 林先生のお話、それに先ほどの夜久先生のお話、全く同感ですが、問題の根源はどこにあるのか、議会政治の実態から見て私は次のように考えます。憲法というものはどの国であろうとその憲法によって示されている基本原則を変更することは認めない。すなわち革命を許さない。これは憲法の論理上当然でしょう。従つて憲法下において明確に革命を目的とする団

結、政治団体というものは認められない筈です。ところが現在の日本では憲法は革命への自由をも保障しなければならぬように考えている人が多い。すなわち憲法の保障する自由というのは、憲法が保障している自由を否定する自由をも保障しているという、実に奇妙な論が横行している。こうなれば結局憲法はないのと同じです。だが憲法の基本的原則を否定する自由だけは憲法は保障すべきではない。これは文字で書いてなくても当然でしょう。ところが今日ではその基本原則までも否定する社会を実現しようとする政党がある。その政党が議事を妨害しようとした時、警官を入れてもすれば大変なことになる。そうして翌日の新聞はこぞつてこれを叩く、それで国民は新聞のいうことを信じて国会へ押しかける。これではどうにもならない。それで「だまし打ち」の議決というのをやらざるを得ぬことになる。だまし打ちが悪いことはわかつてはいるが、憲法に対する基本的な考えが国民の間に確立されていなければ、結局こういうことになってしまうのです。

議会政治の限界

林 今のおことばと関連して木内先生と山本先生に質問したいのですが、私はアメリカで相
当の効果をあげている議会政治つまりデモクラシーも、ソ連においてそれなりの効果をあげた
共産主義もいずれも究極のものではないと思う。学者の説によると人類はまだ二十万年以上生

きるようですが、せいぜい三百年か五十年の歴史しか持たぬデモクラシーとコンミニュニズムが究極の政治形態だったら、おかしな話です。一方が他方をいかに批判し、否定しても私は目クソ鼻クソを笑うにすぎないと思つてゐる。従つて日本で政党政治をやるのなら、日本的な政党政治のあり方を自ら創造しなければならぬと思う。日本における政党政治、それは勿論マツカーサーが作つたのではなく明治以来苦勞して作り上げられてきたものですが、それも限界に来ている。政治は常に「修正」です。純粹な教条を保とうとするのでは政治は行なえない。修正が出来ないような政治家は政治家ではない。修正の天才はレーニンです。レーニンは「国家と革命」という征服国家説を、政権を取つて三ヶ月目に改めている。国家には行政の機能があらと言つて、新経済政策をとつている。ともかく政治はどしどし修正されなければいけない。そういう意味で本当に日本を治める政治のあり方は何か、それをお聞きしたいのです。それを考えない限り、いま山本先生の挙げられた議会の混迷は解決出来ないでしょう。

木内 林先生が私の講義をお聞きにならなかつたのは残念ですが、講義のあとで私に寄せられた質問は、いま先生がおつしやつた問題が一番多かつた。私は議会制民主主義はアメリカでもイギリスでも限度に来てゐると思う。なぜなら四、五年に一度選挙をやるのだが、四年先のことが頼めるかということが一つ、その上今は世の中が難しくなつて、国民には問題それ自体がなかなかわからない。従つて国民の意志というようなものはない場合が多い。特別な問題に

対してはよほど特別の国民教育をしないと判断が出て来ない。こんなことであちらでも実にま
ずいことになっている。それでもどうにかやつているが、日本ではこれまでやつてきた議会制
民主々義、これも実は借り物で、あなたの言葉でいえば日本のコア・パーソナリティから言っ
て間尺に合わない。その議会制民主々義ではいよいよどうにもならなくなつてきている。民主
々義というのは国民の意志が生きていければいいわけで、何も投票にばかり頼る必要はない。何
かそこに道がありそうだ。それを考えようというのが私の主張です。

憲法について

山本 私は今の憲法は基本的に変えなければならぬと思つていますが、なかなかそう言つ
てもどうにもならない所がある。従つて私はいまの憲法を一応建前にして出来るだけの事をや
つていかなければならぬと思つています。ところが先程申したように憲法擁護を口にしながら、
今の憲法をやめなければ実現出来ないような社会をつくるために、必要なら武力を使つて
も革命を断行する、それが出来たら憲法を変える、そんなことを言つている実践団体が認めら
れているのは、今の憲法のたて前から言つてもおかしいのです。いやしくも憲法というもののは
過半数をもつてしても変えられない。日本では提案すらも三分の二なければ出来ない。そのよ
うに基本的な不変なものを明示しているのが憲法でしょう。だから憲法のもとでは革命という

ようなことは決して許されないという解釈が一般化すればよほど安定してくると思うのです。

林 先生はいまの憲法を憲法と思っておられますか。私は占領基本法と思っておりますが。

山本 私は憲法と思っております。思っていないければ、それは変えなくてはいけない。

林 そうでしょう。今の憲法は憲法を否定する政党が議会で暴行することを許している、だから憲法ではない。

山本 いや許していると考えるのは錯覚です。

林 錯覚じゃない、あれは憲法が許していますよ。

山本 革命を目的とする政党はたしかに合法政党ではないが不幸にして事実上存在している。たとえば統制時代に法律上は禁止していたが闇取引というのが事実上存在していた。それと同じようなことが世の中にはたくさんあると思います。

林 しかし三分の一も議席を持つていれば闇と一緒に出来ませんね。

山本 だからそれが日本の不幸だということです。

林 だったら不幸の根源は現行憲法にあるのだからあれを否定しろということです。

山本 私達もその点骨を折っているのですが、一般の国民がはつきり認識するまでは……

林 そうそう、それはむしろ啓蒙運動の問題になってくるのですね。

山本 私は総理大臣が国会の答弁で今私が述べたような革命を許さない憲法の本質を明確に

すればいいと思う。これは世の中に大論争を起すでしょうが、いまの間に論争を捲き起せば、まだその方が犠牲が少なく、だんだんと本当のことがわかってくるのではないかと思います。

林 それでいまの憲法は残るのですか。

山本 残るよりも次のものに移る方法としてですよ。

林 あれは日本弱体化のための占領基本法ですよ。その憲法のもとでマルクス主義政党が多数を制すれば、どうにも手のつけようがない。本当に悩み多き憲法ですね。

木内 いま憲法があるかないかということですが、たしかに法制上はある、しかしその憲法はとんでもないつまらない憲法で、国民の本当の意識の中にはないというのが実際でしょう。私も憲法は前文と第九条は読みましたが本文は読んだことがない。それでも結構憲法を論じることは出来る。それが日本流なのです。日本人というのはウラのウラをちゃんとやれる国民です。だからともかくあの憲法のもとで国政は行なわれている。しかし本当の国民の意識の中にはない、そこが私の付け目なので、そこから改正にもっていきたい。一口にいえばあれを立ち枯れにしてしまつて、別のものをボンと作つて出したらいいたいというのが私の修正案です。西洋流の普通の手続きではなく、外国人が見て実に奇妙な、日本人独特の方法で処理できないものか……

林 案外な陰謀家ですね、あなたは (笑い)

木内 たしかに陰謀でしょうね。ワナにかけなくちゃ駄目なんだ。いまの日本の経済だつて、非常にうまく行っているが、これにもたしかに仕掛けられたワナがあるのです。ただそれに対する自覚がないのが日本の危いところですよ。

夜久 憲法についての考え方ということについてちょっと申し上げておきたいと思います。明治憲法は明治二十三年、明治天皇が時の重臣たちを集めて非常な検討を加え、祖宗の霊の前に固く誓われて発布されたものです。現代の軽薄な風潮からすれば想像も出来ないことです。が、全国民もまた天皇のお心を心として非常に固い決心でこれを守ろうと決意しました。しかし残念ながらこの創造時の感動が大正以後だんだん薄れて、今度の戦争中など、軍人の政治関与など明らかに憲法に抵触することも行われ、そうして終戦になった。そして日本国憲法が出来たのです。この新憲法については私は原則的に林先生がおっしゃるように占領基本法だと考えていますが、今後生まれるべき憲法はいま申しましたように日本の長い歴史の伝統に培われて、そうして世界の良識をとり入れ、全国民がそれを守って行こうと言うものになつてはじめて現実のものになるだろうと思うのです。憲法に対する感じ方の検討が必要でしょう。

林 いろいろ重要な問題はありますが、その中で特に大切な課題は憲法問題なのでしょうね、結論としては。

司会 (小田村) 憲法問題が一番重要だということに問題が絞られてまいりましたが、現在平

和憲法擁護をスローガンにしている人々が、その第一条の「天皇は日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴である」という天皇に対する敬愛の気持を全く足蹴にしてかえりみない。実におかしなことが平気で行われているのが現状です。どちらが良いとか悪いとかではなく、様々なことがおかしく動いているというこの事実だけはぜひ知っていただきたいと思えます。

最後にさし出がましうございますが一言申し上げたい。私はいま、明治時代を大きく支えたものが明治以前にあったのかもしれないということとひとつの和歌を思い出しました。それは孝明天皇の「天の下人といふ人こころ合はせよろづのことに思ふどちなれ」という御歌です。自分の専門だけにとちこもるのではなく、日本全体のことを考える人間になって、みんなが心を合わせてくれという歌です。そのおことばに合わせたかどうかは知らないが、少なくとも明治時代にはみんなが自分のセクションを離れて、全体のことを、国の運命を考えながら自分の職務に従事したのです。

いまここにお越しになっていらつしやる木内先生は経済の道の方、山本先生も経済学博士であられ、かつ政治家であられた。林先生は作家である。各々お仕事がおありですがなおかつ全体のことを憂えておられるのです。その、全体を憂えておられるということを諸君が知って下さったならばそれにまさることはないと思うのです。

きょう林先生も御一緒に阿蘇山にお登りになりましたが、その折おつくりになったお歌がご

させていただきます。

火の国の大阿蘇の野に友らつどひ国の命を語りけるかな
先生方、大変ありがとうございました。（拍手）



日
本
の
こ
こ
ろ

日本の世界像の系譜

名

越

二荒之助



韓国学生の語る世界像

神武建国の包納無窮性

「調和の原理」を示す十七条憲法

固定観念を排した親鸞

情の哲学を示す山鹿素行

日本の世界像の特徴

∧あるがままの人間性の確認―固定観念を排する―すべてを受け容れて

適応させてゆく能力―絶妙な調和の原理∨

まとめ―日本民族の世界的使命

カット・ふたりしづか（つぎねぐさ）

韓国学生の語る世界像

今年の合宿教室には、韓国の学生諸君を招待しています。私が招待の係を仰せつかりまして、下関から萩に案内して、阿蘇まで同道しました。私はその間韓国の学生諸君に接してきましたので、韓国では民族としてどのような世界像を持ち、使命感に燃えているのか、これをまず紹介してみたいと思うのです。

韓国には日本に似た神話があつて、これをずいぶん尊重しております。韓国の建国物語は、「三国遺事」という二五巻からなる本に書かれています。この本は一三世紀に僧一念という人が、建国の意義を明らかにするために、民間伝承をもとにまとめたと言われます。これによるとB C二二三三年に、檀君という人が天帝から任務を授けられて、地上に降臨して韓国を統一したのです。日本の神話で言えば、天帝が天照大神、檀君はさしあたり瓊瓊杵尊（にぎはぎ）と神武天皇を一緒にしたような人格にあたりましようか。

韓国ではこの日を記念して十月三日に「開天節」を盛大に祝つています。この日は日本のようにレジャーを楽しむ日ではなくて、学校も官庁もそれぞれの職場で式典を挙行し、韓国の悠久の歴史を偲ぶそうです。教育基本法第一条には、檀君の教えである「弘益人間」を養成することが、教育の理念であると、はつきり謳われています。憲法にも「悠久なる歴史と伝統に輝く

われら大韓民国は……」と書き出されて憲法が檀君以来四三〇〇年の歴史に基づくことを明らかにしています。

それからもう一つ。ここに韓国旗を用意しました。ちょっと親しみにくいデザインだと思われましょうが、この意味を聞いてみると、なかなか深い内容を持っています。真中の丸い円の中に青の部分が陰を現わし、赤の部分が陽を現わす。陰陽の原理を謳うものなんです。そして四方に出ている黒い線が易でいう卦であって、天地日月を示す。韓国には「韓国旗の研究」という大部な著書もあって、一口につくせませんが「宇宙創成と調和の原理」を示したものとということでした。だから天地日月の間であって、陰が大きくなり過ぎてもいけないし、陽が大きくなり過ぎてもいけない。適当な関連で調和をはかつてゆくのが韓国の国内政策であり、外交政策でもあるという説明でした。韓国の青年諸君はこのように、歴史に基づく民族の世界像とも言うべきものを持つております。小田村理事長は昨日のご講義で、「日本民族に与えられた輝かしい宿題」について話されました。また太田耕造先生は今朝のお話で「使命感なき民族は滅びる」ともおっしゃいました。それでは日本民族に課せられた宿題とは何か、使命感とは何か。

なるほど戦後にも使命感に似たものは語られました。しかしそれは「平和憲法擁護」や「社会主義社会実現」に関する外国製の発想が主であって、日本の歴史や古典に基づく日本固有の

ものではありません。私はこれから皆さん方と共に、世界に通用する日本民族の使命とは何か、日本の古典の中にこれを求めてゆきたいと思うのです。

神武建国の包納無窮性

まず日本書紀の「橿原に都を建つるの令」を選んでみました。私たちの祖先は日本の建国にあつてどのような考え方をもちて臨んだか。

「夫れ大人（のり）の制を立つる、義必ず時に随ふ。苟くも民に利あらば、何ぞ聖造（のわざ）に妨はむ。また当に山林をひらき宮室を（をさめつく）経営りて、恭（つつし）みて宝位（たかみくら）に臨み、以て元（おほみたから）元を鎮むべし。上は則ち乾（あまつ）靈（かみ）の国を授けたまふ徳に答へ、下は則ち皇孫正（すめみま）を養ひたまふ心を弘めむ。然して後に六合を兼ねて都を開き、八紘を掩（いへ）ひて宇とせむこと、亦可からずや。」（卷三）

冒頭に「大人の制を立つる、義必ず時に随ふ」とあります。こういう制度を建てるといふ固定的なイデオロギー体系を示したものではありません。ものの道理というものは、自然のうちに秩序だてられてゆくものだ、という表現です。教条主義の否定なのです。続いて「苟くも民に利あらば、何ぞ聖造に妨はむ」となっています。人民の利がそこにあるなら、それに従つてゆこう。これが聖造であるという考え方です。次に「乾靈の国を授けたまふ徳に答へ」とあります。乾靈」といふのは天照大神に当ります。天照大神から国を授けて貰つたといふ言

方ですね。神武天皇はあれだけの苦しい遠征を経験されながらも、「授け給ふ」と言われ、「徳に答へ」とおっしゃる実に謙虚な態度なのです。そこには自分が建国したんだというヒロイズムがない。

今年亡くなつたフランスの哲学者であり詩人であつたポール・リシャールは、天照大神が産業奨励の、しかも女神であつたこと、そして須佐之男尊の乱暴にあうと、天の岩戸に身をかくすような徳を備えた人格であつて、軍人でも帝王でも征服者でもない。こういう優しい権威が日本の創始者であることを、驚きをもつて指摘しています。神武天皇はそういう天照大神の徳に答えると言われた訳です。

そして「皇孫正を養ひ給ふ心を弘めむ」とあります。皇孫というのは瓊瓊杵尊です。自分の心を弘めるのではなくてその尊の心を弘めんとされるのです。しかも正義というものはこれだと言つて示すような独善的な態度ではない。正義は人々の心の中に養つてゆくものなんです。韓国の学生諸君が合宿の始めにメッセージを朗読しましたが、その中に「正しい歴史は正しい真心によつて作られる」という言葉がありました。正義というものはこのように、まごころの中に培われてゆくものであつて、単純に正邪に割り切つて、正が邪を粉碎するというものではありません。

「然して後に六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇とせむ」六合というのは国内というよ

うな意味ですから、日本の国内を都のように富んだものにしてゆこう。そして八紘というのは世界というような意味ですから、更に広い地域も含めて、一つの家のようにしてゆこうという意味です。一応の評釈をしてみましたので、ここでもう一度この文章をまとめて読んでみて下さい。原文に直接接すると私たちの祖先が包含して国家的統一をもたらしした気宇壮大なリズム感が伝わってきますね。

それでは先日の中東戦争で、皆さん方も関心を持っておられるユダヤ教というのはどうか。ユダヤ教はイスラエルの国教として五千七百余年の古い歴史を誇っています。そしてユダヤ神話（旧約聖書）は、キリスト教精神の源流として今なお西欧の人々の心を強くとらえています。そういう意味で日本の建国神話と対比してみたいのです。

ユダヤ建国神話の英傑は何としてもモーゼです。彼は一二〇才にして目はくらまず、気力は衰えなかつたと記録されているような大英傑で、エジプトから祖国カナンの地にまで民族の大移動を敢行しました。日向から大和に東征された神武天皇のご生涯と、実によく似ているのです。そのモーゼがシナイ半島の山中にこもった時神のみ告げがあつた。それが有名な「十戒」です。今紹介した神武天皇の八紘為宇の詔と対比できる言葉です。

その十戒の第一条には「汝、エホバの外に何者をも神とすべからず」とあります。「エホバ以外の神を拜む者には、死罪をもつて報ゆべし」という言葉もあります。ずいぶん厳しい、徹底

した精神の独裁を思わせるものがあります。「汝、何の偶像も拜むべからず」偶像を拜んだらいけないというのです。それに比して日本の天照大神は、究極神を祭り、自らが祭られる神でもあります。その他権威ある者は人間や自然が神と祭られています。偶像であらうとなかろうと、区別なく神とされているのです。そのように日本の場合には拘束がない。それに較べてモーゼは「汝エホバの名をみだりに口にすべからず」とまで言っています。エホバは超越者で権威ある者だから、名前を口にすることも慎しめと言うのです。この厳しい戒律と神武建国の詔の大らかさとを対比して頂きたいのです。

エジプトから脱出してゆく過程においてもモーゼは「ミデアンの男を悉く殺し、イスラエルの子孫すなはちミデアンの婦女子とその子女を生け捕り、その家畜と財貨を悉く奪ひ取り、その住居の村々を悉く火にて焼き払ふべし」と命じています。出エジプト記を読まれば、モーゼの荒武者のような激しさは、スターリンとヒトラーを一緒にしたような独裁力を奮っていることがお判りでしょう。神武天皇にも厳しい軍歌の雄叫びがありますが、モーゼのような憎悪をもつてする殲滅戦ではありません。神と悪魔の対決ではなくて、言向けやわす伝導的態度がその根底にあります。

「調和の原理」を示す十七条憲法

次に取りあげさせていただく聖徳太子は、仏教、儒教が流入して昏迷に陥った時代に、神武建国の意義を明らかにしながら、日本文化創業を果された思想的偉人です。ここでは太子の作と言われる十七条憲法の第十条を選んでみました。

「忿いかりを絶ち、瞋いかりを棄てて、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり心各執しよあり、彼是とすれば即ち我は非とす。我是とすれば即ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず。共には凡夫のみ。是非の理詎なんぞよく定むべき。相共に賢愚なること、鑲みみかの端なきが如し。是をもつて彼人は嗔ると雖も、還りて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙おこなへ。」

私は話の前置きに韓国旗をお目につけながら、「調和の原理」に触れましたが、この第十条は調和をもたらす心構えを示されたものという感想を持つのです。お互に完全な人間はない。自分の本性にたち返って自己を見つめれば、自分の愚かさを知らされるばかりである。自分は完全であると思うのは自惚れであつて、むしろ軽蔑されるべきでしょう。「共に是凡夫」、人間は至らぬ者同志である点に目覚めることが、調和の原理であるように思われるのです。

この事は国家についてもそのまま言えることで、完全な国家などというものは元来ないので、完全な国家などと信じているのは独裁主義の国くらいであつて、批判を全然許さない場合にそういう錯覚が民衆の間に起つてくるに過ぎません。「この世に天国を作ろうとしたら地獄

になる」という言葉があります。天国の社会を作ろうとしたら、激しい大弾圧による地獄を経験しなければできあがりはしません。むしろ社会の欠陥が目につくような状態にあるのがいいのです。そうすれば修正の余地があるし、修正が可能なのです。国家間に於ても、相互に交流を自由にしてお互に見習いあう状態においておくのが、国際間の調和の前提と言えましょう。それに関連してここに親鸞を紹介しようと思ひます。親鸞は聖徳太子を「和国の教主」と讃仰した人で、自分を常に「愚禿」と呼んでへり下っていました。ここに紹介するのは親鸞の作つた七、五調の詩（和讃）です。

固定観念を排した親鸞

「愚禿悲歎述懐」

浄土真宗に帰すれども 真実の心はありがたし

虚仮不実のわが身にて 清浄の心もさらになし

悪性さらにやめがたし ところは蛇蝎のごとくなり

修善も雑毒なるゆえに 虚仮の行とぞ名づけたる

これは親鸞が八十六・七才の時の作だと言われます。彼は浄土真宗の開祖とされているのです。その本人が浄土真宗に帰依しても、本当の心はないのだと言っているのです。この大胆に

して痛烈な告白を読んで驚かない人がいましうか。そして自分はニセ者で、誠実さのないわが身だ。「悪性さらにやみがたく」、心は蛇蝎（へびやさそり）のようになってしまった。自分をより善人に修業してゆこうとする態度も駄目なのだ。意識的「修善」は「虚仮の行」なのだと言いきっているのです。

このように自己に対する愚かさの痛感があるから、本人はより誠実になろうとして努める。その心こそが浄土真宗の心なのだ。人間というものは我執から離れることはできない。これこそが人間の本性なのだ、親鸞は身をもって示しているのです。

この親鸞の敲しさを見せつけられると、私は孔子を思い出します。孔子は「七十にして心の欲する所に従へども矩を超えず」、七十才にして自分は清浄になったのだ。自分は何をしても正しい道にかなうようになったのだ、と言っているのです。こういう言い方は一種の自惚れではないか。求道者の態度を放棄した姿ではないか。それに較べて親鸞は八十数才にしてなほ「虚仮不実のわが身」と悲歎痛哭しているのです。そして自分の宗教をすべて否定する修業者の講虚さに生きているのです。どちらがより深く人間性を把握したと言えましようか。

情の哲学を示す山鹿素行

山鹿素行も「上古に聖徳太子一人異朝を尊ばず、本朝の本朝たることを知れり」と言っ

太子を讃仰した人です。ここに紹介する謫居童問は、素行が幕府の学問を批判したために、赤穂に幽囚せられておつた時に、子供が学問上の事について質問したのに答えた記録です。

「利害の心あらざれば死灰槁木にして人にあらず。人情は古今ことならず。四海ともに同じ。故に孟子性のあとを論じて以^レ利為^レ本と言へり……当時の学者ややもすれば、利害の心なりとて、この心を絶せんとすること尤もあやまれり。皆此の知をきはめざる故の惑なり。」

死灰は死の灰、槁木は枯れた木。現代で言えば木石にあたりましようか。利害の心がなければ木石みたいなものだ。人情は古今東西変らないのだ。だから孟子も人間性を論じて「利ヲモツテ本トナス」と言っている。これは親鸞が「愚禿悲歎述懐」の中で述べた、深刻な告白を客観化したとも言えましよう。また素行は、当時の学者がややもすれば利害の心をなくしようとしていることを、「尤もあやまれり」と指摘しています。現在の日本の学者の間にも、人の情を忘れた議論が横行しています。その代表的なものが、マルクス主義でしょう。

マルクス主義というのは、生産手段の私有をやめて公営にしてしまふのです。例えばソ連の土地は、コルホーズという集団農場や国家の土地なのです。農民はいくら働いても自分の収益にならないから、働きません。そこでレーニンはネツプ政策を採用して、農民に一人当五アー程度度の私有地を認めた。そしてすべての労働者にノルマを課した。それでも収穫高はツアー時代ほどあがりません。私もソ連抑留中コルホーズで働きましたが、ジャガイモなんかでも莖

だけ抜いてゆく。そして転がり出た芋だけ拾ってゆく。何アール収穫したように見せながら、何パーセント働いたというようにノルマ係りの女の子に作業量を記帳して貰う。

あわてたレーニンは教養上の革命を唱え、スターリン以後はソヴェト的人間の養成を唱えて、利害や打算で動かない人間に作り変えようとなりました。しかし人間の本性というものは変えることができません。親鸞が言っているように「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし」なのです。それではソヴェト経済を修正するにはどうしたらよいか。親鸞や素行の心理学を応用すればいいのです。

この合宿教室にソヴェト経済を専門にやっておられる吉田靖彦先生（彦根大学経済学部助教授）が来ておられるので聞いてみますと、いま住宅私有地というのは全農民の五パーセントしかない。しかしそこから挙げる収穫高は、穀類で三〇パーセント以上、酪農では五〇パーセント以上だそうです。だから現在の住宅私有地を倍にしたら、農業問題は一度に解決です。（人間の性の深い理解を欠いだ政策の失敗は、農業問題だけでなくあらゆる場合に指摘できる事を附け加えておきます）

日本の世界像の特徴

私は日本の古典の中の三、四の例しかあげることができませんでした。時間の関係でつくせ

ませんので、概括的ですが古典から見た日本的世界像の特徴と見られる点をいくつか挙げて結びとさせて頂きます。

第一に挙げられることは、あるがままの人間性の確認の上に立っていると、言えるのではないかと思います。例えば古事記ですが、古事記物語は他の国の神話と較べて、ずいぶん人間的な臭味がある。そしてそこには特定の教義がない。戒律というものもありません。人間性の典型というべきものが、そのまま直叙されています。だから現代の皆さん方が読まれたら、顔を赤くされるような所もあります。現代で言う性や肉体の世界が、そのまま謳われています。それがずいぶん出てくるんです。しかし性の世界だけではない。人間が筋肉を奮わしながら叫ぶ雄渾な軍歌の響きがあります。自然をも泣かす悲劇の雄叫びもあります。それは国家生活の中に謳われた人生さながらの悲苦動乱の記録というよりほかありません。

また日本書紀では、世界を一つの家のようにしてゆこうという大らかさ、民の利をそのまま反映させてゆこうとする幅の広さ、親鸞や素行のように人間性の奥底まで極めた深い心理学、そのように人間性をそのまま認めてゆこうというのが、日本的世界像の特徴ではないかと思われるのです。

次に固定観念を排するということが言えるのではないかと思うのです。日本的考え方、日本

的制度、それはこういうものだという特定の観念形態というものはないので。だから日本には思想がないなどという人が出て来るのです。キリスト教、仏教、儒教、回教、マルクス主義、ファシズムなどのように特定の教祖がない。特定の教義というものが無い。この事をうまく言っているのが歎異抄です。「念仏には無義をもつて義とす。不可称、不可説、不可思議の故に」、この場合念仏というのは、心の救われ方そのもの、というような意味でしょうか。親鸞はそれを具体的に示さなかつた。いや示すことを拒否した。「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし」と言つて、自分の発見した救われ方そのものを大胆に否定しているのです。そしてこうだと定義できないのが定義なのだ、それは不可称、不可説、不可思議の故に、と言うのです。素行も「理なきが理なり」人生を理で説明できない、それが人生の理なのだと言っています。

例えば「資本主義」という概念があります。それを定義化したのでは、固定観念化するだけで理解したことにはならない。封建時代にも市場経済はあつたし、需要供給の関係で物は動いていました。貨幣もあつたし、経済の動き方は自由経済（資本主義）の原則そのものでした。封建主義とか資本主義とかいう定義だけで理解すると、現実的な把握ができない。学問というものは固定観念を積み重ねた体系を作つたり、それを理解することではなくて、むしろそれを打ち破ることによって生きてくるのです。

次はすべてを受け容れて適應させてゆく能力を持っているという事です。岡倉天心という明治の巨人は、明治三十五年に「東洋の理想」という本を英文で書いて、ロンドンで発刊しました。その中に

「日本はアジア文明の博物館である。いな博物館以上のものである。何となればこの民族の不思議な天才は、古いものを失うことなしに、新しいものを歓迎する生ける適應主義の精神に於て、過去の理想のあらゆる段階に注意するよう彼を導くからだ。」

と言つています。日本は本来の民族宗教である神道を失わず、仏教、儒教を受け容れ、それを日本的なものに消化してきました。その他西欧文明やキリスト教を受け容れて日本的なものに適應させつつあります。しかしマルキシズムはまだ消化したとは言えません。西欧諸国は階級的イデオロギーを脱皮して、西欧的社會主義（社會主義インターに代表されを英國労働党、西独社民党など）として定着させていますが、日本はまだマルクス主義の魅力圈内にあつて低迷しています。しかし日本人本来の思考法に立つならば、マルクス主義の日本化などやすやすと實現できるはずです。

しかし一貫して続いた日本の歴史をながめれば、国初以来の天皇政治の原形を保持して民族宗教を失わず、幾多の外来宗教や文明を包含しながら今日に至つています。こんな国は世界でも例がありません。建国以来変らぬ王政を維持している古い例としてはエチオピアがありま

す。しかしエチオピアは西欧文明の導入が行われていないし、宗教は国内でキリスト教と回教が対立した状態です。隣の韓国には仏教も儒教もキリスト教も生きていますが、過去の歴史の断絶があり、中心となる民族宗教がありません。

先日日本に来たトインビーは、伊勢神宮にお参りして次のような感想を毛筆で書きました。

Here, in this holy place, I feel the under-lying units of all religions 彼は伊勢神宮という聖域にすべての宗教の根源的な単位を感じたというのです。伊勢神宮は日本神道を造型化して、そのまま現代に伝えたものです。古事記の持つ自然さながら、聖徳太子の言われる包納無窮と言う言葉が、そのままトインビーの言葉の中に立証せられているように思われてならないのです。

日本は古代から「大和」と呼んできました（邪馬台国ではありません）。聖徳太子の言葉にも「和をもって貴しとなす」とか、「自他の二境を存して修業せば、物とその苦楽を共にすることを得ず」という言葉があります。自分と他人との間を分たない広く大いなる精神、共鳴共感の世界を求める精神が強調せられております。日の丸は万物を公平に照す太陽を象徴したものです。更に明治天皇のお歌の

ひさかたの空はへだてもなかりけりつちなる国は境あれども

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

まつりごとただしき国といはれなむものつかさよちから尽して

おのづから仇のころもなびくまで誠の道をふめや国民

などを拝誦すれば、天皇という独特の地位のみが生み出す大らかな格調がただよっておりま
す。トインビーがもしこれらの御製を感得したら「私は明治天皇の歌の中からすべての元首が
抱くべき精神の根源的な単位を感じた」と言うかも知れません。

最後に私は韓国旗にも謳われている絶妙な調和の原理をあげたいと思います。戦争中日本に
やってきたドイツ人ブルノー・タウトは、その著「日本美の再発見」の中で、日本だけにある
調和の美を指摘しています

「桂離宮にあつてはいかなる要素もそれぞれ個性を持たないものは一つもない。それはあたかも
何人も強制を蒙ることなく、各人がその本性のままに行動してしかも調和を保つようなよき
社会の成員のごとくである。まことに桂離宮は文化を有する全世界に冠絶せる唯一の奇蹟で
ある。パルテノンに於けるよりも、ゴチックの大伽藍におけるよりも、ここでははるかに著し
く『永遠の美』が開顕せられている。それは我々に同一の精神をもつて創造せよと教える。」
「日本神道は最も単純な豊かさを持つ」と言つたブルノー・タウトは、桂離宮を構成する要素
を見て、「各人がその本性のまに行動してしかも調和を保つ良き社会の成員のごとくである」

と絶讃しています。タウトがもし十七条憲法を読んだら「調和の美的原理は桂離宮であり、政治的哲学的原理は聖徳太子にある」と言うかも知れません。いやそればかりではありません。日本の国柄そのものが、絶妙なハーモニーを奏でながら動く要素を、太古以来持ち続けているのです。

まとめ—日本民族の世界的使命

私は最後に「日本の児らに」と題するポール・リシャールの詩を紹介したいと思います。

汝の国に七つの榮譽あり

新しき科学と古き知恵

ヨーロッパ精神とアジアの精神とを

自己のうちに統一せる唯一の民

これら二つの世界、来るべき世に

両部を統一するは汝の任なり

フランス人でさえ、日本の勉強の中からこれだけの事を擷んでいます。私たち日本の青年た

ちに、世界史に課せられた使命を、このように卒直に訴えているのです。私の拙い発表も、その線に沿うものではありません。しかし日本の思想史の源流は、一人の個人によつて指示できるような狭いものではありません。むしろ日本の精神史は、民族の成員ひとりひとりが、古典の中から豊かな命のかてを擲んで、自らの使命を切り開いてゆくものだ、と、教えていると言えましよう。

今朝の講義で太田先生が触れられたように日本がいくら経済の繁栄をしても、日本の心と民族の使命感を失うなら、日本という国の存在意義を失つてしまいましよう。ここに居る私たちが、今直ちにこの使命感に燃えねばならないのです。しかも今お話申しあげた内容は、戦後は勿論、戦前の文部省教育の中には取りあげられなかったのです。民間の国民文化研究会につながる戦前の学生運動―私にとつてはここに来ておられる加藤敏治先輩（八代市助役）や、宝辺正久先輩（下関・会社経営）に、合宿や輪読を通じて教えられたものであることを紹介して、私のお話を終りたいと思います。

（岡山県立笠岡商業高校教諭）

聖徳太子「十七条憲法」

小柳陽太郎



うひ山ぶみ

第一条——「和」の世界

第二条——篤く三宝を敬へ

第三条——君臣のあいだ

カット・さわあたらぎ

「うひ山ぶみ」

この合宿教室もいよいよ明日までということになりましたが、十七条憲法のお話にはいる前にこれから山をおりてあらたな気持で学問に取り組まれる一つの指針として、本居宣長の「うひ山ぶみ」という書物を御紹介しておきます。この書物は学問に取りくむ初学者のための心得を書かれたものですが、その中で宣長は学問の方法として、古典の註釈を書いてみることをすすめています。

「書をよむにただ何となくてよむときは、いかほど委しく見んと思ひても限りあるものなるに、みづから物の註釈をもせんとところがけて見るときには、何れの書にても、格別に心にとまりて、見やうのくはしくなるものにて、それにつきて、又外にも得る事の多きもの也。」

古典の中の一つ一つの言葉のうちにひそんでいる先人の心は「ただ何となくよむとき」にはなかなか見えてはこないものです。しかしどんなに幼い感想でもかまわない、自分なりの率直な感想を、古典の一つ一つの言葉に則して書きとどめてゆけば、単に「あの本はよかつたな」という程度のことではなく、乾いた土の中に水がしみこんでゆくように、先人の心が自分の心に直接にしみこんでくるようなよろこびを感じることが出来るはずで、こうしてはじめて、書物の一冊々々が私たちの一生を支える大きな力となってくるのです。

しかもこの方法は単に学問の手段として大切であるというだけではなく、実は日本における学問自体の方法としてこれまで重要な位置を占めてきたのです。江戸時代に例をとってみても儒学者のすべては論語、孟子、その他の経典の註釈に生涯をかけているし、宣長自身も「古事記」の註釈に、賀茂真淵との劇的な邂逅があった三十四才の時から六十九才まで、実に三十五年間の月日――生涯の大部分をかけているのです。（宣長は古事記伝完成後三年、七十二才でこの世を去っています）自らのさかしらで道を築こうとするのではなく、先人の言葉に随順し、先人の心を正確にうけつごうとする姿勢が日本における教学を一貫していること、そしてその中にみのり豊かな学問的業績が無数に生れてきたことを深く心にとどめてもらいたいのです。

古典を読むためには、単に文章を解釈するという知的なレベルでこれに接するのではなく、先人の心を偲ぶという心の働きが縦横無尽に行われて、その中に知的作業が包摂されていかなければなりません。従ってそのためには、私たちは自分たちの心を清らかにし、豊かにし、しかも柔らかくするように鍛えなければなりません。そのような心の訓練なしに古典にふれても、古典は決して私たちの前に姿をあらわしてはくれないのです。

その古人を偲ぶ学問という時私の胸にすぐ浮んでくるのが、黒上正一郎という方が書かれた「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」という書物です。この書物は昭和五年、当時の第一高

等学校にあつた「昭信会」という会から出版されたものですが、殆んど世に知られることもなく、皆さまもはじめてお聞きになられたことと思います。しかし私どもは或る機縁からこの書物に接し、それ以来祖国のことを考え人生の問題にとりくむ時には、常にかげがえのない指針として仰いでまいりました。これからお話ししようとする十七条憲法についての感想も、専らこの書物によつて導かれて、聖徳太子のお言葉にふれた時に生れたものですし、話の途中にこの書物にふれることもあると思いますので、はじめにご紹介しておきます。ぜひ心にとめておいて下さい。

第一条

「一、に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふこと無きを宗と為す。人皆党あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然れども上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。」

皆さんはほとんど十七条憲法の全文は読んでおられないと思う。しかしその第一条の、その

最初の言葉「和を以て貴しと為す」という言葉はよくご存知のことと思います。しかしなまじその言葉を知っているために、多くの人は十七条憲法の全部をその一つの言葉に概括してしまつて、あとは読まないでもなんだかみんなわかつたような気になつてしまつてゐるようです。

「和を以て貴しと為す」——「仲好くするのが一番大切だ」太子はそう言われたのだと考える。しかしそのような理解の仕方だけではどうにもならないのです。大切なことはその言葉がどのような文脈の中で語られているかということ。それを読みとることが「文」を読むということ。しかし多くの人々は、さまざまの言葉をその背景から切斷したままでうけとつてしまふ。背景を切斷するということは、その言葉の「根」をとりさることにもなるのです。ところが人々は平気でその根を失つた言葉を組み立てて理論化していく。そうして理論が整然と展開すればこれが学問だという。これでは眞実は何一つ表現できません。

さてこの「和」という言葉を理解するためには、これと反対の概念としての「忤ふ」という言葉と並べて見ていくことが大切でしょう。「忤ふ」ということは単なる意見の対立などを指すのではなく、議論をするにしても、その奥底に統一された実感がないままに事を進めていくこと、これに反して「和」にはその統一感があることを言うのではないか。言葉をかえていえば、「和」には相手の心を汲みとろうとする心の広さがある、そこが「忤ふ」と決定的にちがうように思います。

次の「人皆党あり、亦達れる者少し。」この「たむら」という言葉は語源的に「むらがる」などと関係があり「自己中心に閉ざれた世界」と解してよいかと思います。これに對して反對の「さとれる」には「達」という字が用いられていますが、ずっとむこうまで心が届く、相手の心の中に飛びこんでゆく心の働きを示している言葉でしょう。―だがすべての人間はこの開かれた世界に背をそむけて、自分の世界に閉じこもろうとばかりするのだ。こういうわけで「或は君父に順はず、乍ち隣りに違ふ」―君父とは国家生活における天皇、家庭生活における父親、すなわち個の世界ではなく、全の世界を統一する位置に立つ人、それが君父でしょう。その君父の心に順うことなく、「たちまち」隣人と心がはなればなれになつてしまふ。この「たちまち」という言葉も大切でしょう。君父に順わないという心の姿勢は、そのまま隣人との関係を乱すことにつながっていく、その心の微妙な働きを、この「たちまち」という言葉は示していると思います。

ここで最初からもう一度読んでいただきますと、すべてが對句の形式をとつていることがわかりでしょう。對句とは中国で常に用いられる修辭法です。しかし中国では例え「和して同ぜず、同じて和せず」というように、對立的な概念を配列して言葉を整えてはいますが、それが單なる言葉のあやにとどまつていることが多いようです。しかしこの「和を以て貴しとなす」と「忤ふことなきを宗となす」とは單なる概念的な對立ではなく、後者は前者を補足する

すがたで、いわば全人生の表裏を総合的に表現している、そのような構成になつてゐることに注意していただきたいのです。「人皆党あり」と「達れる者少し」の關係も同じですし、「君父に順はず」と「隣里に違ふ」が「乍ち」という言葉によつて心理的に脈絡せしめられてゐるのは前述の通りです。

更に「和を以て貴しとなす」という言葉のあととはすべて人の心の醜さが描かれてゐることに心をとどめてもらいたいのです。もしこの醜さの表現がなかつたとしたらどうか、その場合を想像してもらえば、先程私が申し上げた「一つの言葉をその文脈の中に置いて見る」この意味はきつとわかつていただくとおもうのです。「和」という言葉は、その醜い人生の事実の上に浮んでゐる——私にはそれが十七条憲法の急所であると思われまゝ。「和」というものをスロ—ガンにかかげて仲好くしようとしても、どうにもならない人生の事実がある。我々にとつてできることは、この醜さを直視することだ。たじろがずこの事実を直視するとき、はじめて「和」の世界はおのずから実現されるものではなからうか。太子はこの人生の姿を憲法第十条では「人皆心あり、心各執あり」とのたまひ、さらに続けて「彼是とするときは則ち我は非とす。我是とするときは則ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず」と矛盾相對の世界に低迷する人生の姿を描いて「共に是れ凡夫のみ」と告白しておられるのです。次に「然れども上和ぎ、下睦びて事を論ふに諧ひぬるときは」とありますが、「上和ぎ下睦

びて」とは憲法十五条にある「上下和諧」という言葉と同じく、身分の上下をこえて人と人とが心を通わせあう姿勢をさしています。「事を論ふに諧ふ」という、その「諧ふ」とは調和を保つこと、調和とは全体が一つのものに固まってしまうことではなく、すべての人が自己の信条を活発に吐露しながら、すなわち部分は部分として生き生きと働きながら、しかもそれが全体に統一されていく姿をいうのです。さらにこの「諧」という字は元来「八音和諧」という言葉もあるように、音楽におけるさまざまの音が美しいハーモニーをなしている場合に使われた言葉であることも大切なことでしょう。次の「事理自ら通ふ」という、この事は「現象」、理は「道理」、すなわち現象とそれを貫く道理が生きたものとして統一されている姿をいうのです。理とはまた「ことわり」とも言います。「ことわり」とは「こと」——即ち現象を「わり」——分析し判断して、現象をして現象たらしめている道理を発見していくことでしよう。判断という言葉もこの「わかつ」という字が使われているのです。しかしものごとをわかち、判断する時には、正しく、木でいえば木目もくめに沿って、生きた姿を保つたまま切りこんでいかなければいけない。「こと」がもっている固有の木目におかまひなく、論理という刀をふりおろしてしまえば、その「こと」は死んでしまう。そうではなく、「こと」と「ことわり」が緊密に相応じ、相則して働くときに、そこには無限の力がわいてくるのです。その二つのものが相応じる美しい姿を、太子は「事理自ら通ふ」と表現しておられます。「通ふ」とは息がかようこと、い

のちが生まれること、生きたものとして働く姿をいうのです。

現代の学問の風潮は「事」をおきざりにして「理」が独走している、人々は事実によって動くのではなく、主義によって動く。そういう風潮の中で、事実の木目にびつたりと沿って現実を分析していくことばに接したとき、太子のこの「通ふ」という言葉が実感として迫ってくることを度々経験します。本当の学問にはその、事と理が通いあうさわやかさが必要なのです。そう考えてきますと「事を論ふに諧ひぬるときは、則ち事理自ら通ふ」ということは学問論の根本にふれる言葉だと思えます。そして最後に「何事か成らざらむ」という言葉で結ばれています。この言葉は激しい。そこには実に力強い確信が秘められている。そのあふれるような太子の御気持をこのことばの中に充分読みとつていただきたいと思えます。

ここでもう一度最初にかえつていただくと、「和」が第一条の基本ですが、その「和」の世界さえ実現すれば——ということとは具体的には「上和ぎ」以下に述べられていることですが——その時には「何事か成らざらむ」なのです。しかしそのためには、われわれは「人皆党」ある現実の醜さを凝視しなければいけない。現在人々はさまざまの角度から平和を論じている。しかし太子のお言葉をよめば、平和を実現するためには、人間の醜さを徹底してみつめなければいけないことがわかるのです。だが所謂世の平和論者は自らをあくまでも清しとし、自分達に協力しない人々をかぎりない憎しみの目でみつめている。平和を守る一団と戦争を好む一団と、

その二つはまさに神と悪魔のごとくに対立し、自分達は常に神の世界に立っていると自負しており、自分達の心の中にひそむ人間としての醜さには一顧だに与えようとはしないのです。この硬直したような思想に一体何ほどの力があるか、自分の心の中の醜さを正面からみつめた途端、そのすべての理論は崩れ去るのです。

戦争と平和は対立した概念ですが、俺は戦争をとる、俺は平和をとる、というようにはならない。そうではなく、この人生では実は一人の人間が戦争と平和の両者を演ずるのです。戦争は人間の醜さが形をとって現われたものでしょうが、平和とはその醜さの他にあるのではなく、その醜さを凝視し、それを抑えることによつてはじめて実現されるものなのです。戦争と平和という二つのことばはたしかに概念としては対立していますが、人生の事実の中では一つに溶けあつて存在しているのです。

この間の消息を明治維新当時の政治家三条実美は次のように述べています。

「それ天下は治まるものと思ふべからず。乱るるものと思ふべし。乱るるに従ひ、従つて治む」

乱れるのが人生なのだ、その乱れる人生に従いながらそこにすぐれた政治を実現していく、荒馬乗りのベテランにはきつとこんな経験がある筈です。人間の小さな小さい智慧などではどうにもならない頑固な事実、それと呼吸をあわせながら、そこにすぐれた世界を実現していく。

やはり幕末から明治にかけての動乱期を生きた政治家ならではの言葉だと思えます。現代に最も欠けているものは、この「乱るる」という痛感でしょう。その痛感を飛びこえたところで「きれいごと」が一つの理想として語られる。だが人生の事実ぬきの理想とは絵に書いた餅にすぎますまい。そんなものに命を賭けることは出来はしない。私たちが命を賭けるという時、その対象は、やはり生きたものでなければいけない。生きたものとは、「党」ある人生に、「乱るる」を常とする人生にふれたところにしか生まれないのです。

第二条

「二、に曰く、篤く三宝を敬へ、三宝とは仏法僧なり。則ち四生の終帰万国の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法を貴ばざる。人尤悪しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ。其れ三宝に帰せずんば、何を以てか枉れるを直さむ。」

この第二条は「篤く三宝を敬へ」ということで有名な、仏教を大切にせよという教えですが、これも第一条と同じく最初の言葉に概括してしまわないで、太子の御心を言葉に従って、全文から読みとつて下さい。

「仏法僧」とありますが、仏とはいふまでもなく仏様。法とはお経に書き記してある、仏道に
 すすむ大切な道理。僧は僧侶。一応そういうふうに考えていいと思います。しかしこれをもう
 少しこまかに見ていくと、仏とはいわば帰依の対象、法はこの世の道理を言葉で現わしたも
 の、僧とは、元来一人の坊さんのことではなく僧団のことです。道を求め、仏の教えに帰依し
 ながら、お互いに心を通わせあっている人々と考えてよさそうです。

私たちはたとえ仏教に帰依することではなくても、生きていく限り、必ず何か帰依の対象が必
 要でしょう。このように自分の心を捧げる対象、すなわち「ほとけ」を求めていくことは、人
 生の意味を追求するのと同じことだといつていい。ではそのためにはどういう学問をしたらいい
 いか、人生の正しい生き方を示したものを、それを説いてある書物、これが法です。さらにそう
 いう帰依の対象を同じくし、ともに法を学ぶ者が心を通わせあつていく世界なしには、求道生活
 は実現できない。その世界を私たちは僧と呼ぶことが出来そうです。そのように考えてきます
 と、「仏法僧」というのは、必ずしも仏教の中だけの言葉ではなく、人生の本質にかかわる、一つ
 の心理的な事実を現わしている言葉であると思います。この「仏法僧」とは「則ち四生の終帰、
 万国の極宗」である、生きとし生けるものすべてが最後におもむくべきところであると太子は
 おっしゃるのです。ここでは「帰」という言葉に注意していただきたい。「帰」とは、意識し
 てそこに歩いて行くのではない。そうではなく、心のふるさととして、自分の命の本源として

そこに帰つていくといふのです。いのちの源に帰つたとき、すべての人にはこの「仏法僧」といふ三宝の世界が見えてくる筈だ、そういう確信が「四生の終帰、万国の極宗」といふ言葉の中に示されているといえましょう。「何れの世、何れの人か、是の法を貴ばざる」といふ、普遍化され、客観化された精神の姿が鮮やかに描かれるゆえんです。

「人尤悪しきもの鮮し。能く教ふれば之に従ふ。」——この世では極悪非道という者は実に少い。どんな人の心の中にも、正しい人の心に感応する何かがある。従つていかに心悪しきものと考えられていようと、心をくだいて教えてゆけば必ず正しい道に従うものなのだ。これは人生に対する強い確信です。信頼感です。それは決して一つの理論ではあるまい。世の人の心をじつと見つめられた太子御自身の痛切な人生体験の中から生まれたことばでしょう。特に太子のそばには母君の伯父であり、さらに妃の父である蘇我大臣馬子がいた。その馬子が、太子の母君穴穂部の間人皇女の弟穴穂部の皇子と、それを擁した物部氏を滅し、さらに帰化人東漢直駒を使つて崇峻天皇（同じく穴穂部間人皇女の弟君にあたる）を弑逆しまつたことはあまりにも有名です。穴穂部皇子と物部守屋が戦死したのは太子一四才の時、さらに崇峻天皇がおかくれになつたのはそれより五年あと、太子一九才の時です。その翌年、推古元年太子は立つて皇太子におなりになつたのですが、その馬子に対して太子がいかに心をくだかれたかは想像にあまりありますし、外ならぬそのことが太子御一代の御施策の主調になつたと言えましょう。そ

の天皇弑逆という未曾有の残忍さを敢えてした馬子の血ぬられた刃は、常に太子のお心の前にあった。その悲劇的な肉親相剋の時代に、太子は敢えて「人尤悪しきもの鮮し」と仰せられ、「能く教ふれば之に従ふ」と確信を表明されたのです。以つて太子のお心の深さを偲ぶべきであります。

そして最後に「其れ三宝に帰せずんば」この仏法僧に自分の心を寄せていかなければ、「何を以てか枉れるを直さむ」と結ばれるのです。この結びは第一条の最後の言葉「何事か成らざらむ」と相応じて実に強い力がこもっていることに注意していただきたい。この確信を支えているものは、「人尤だ悪しきもの鮮し」という人間への信頼感であり、さらに仏法を通して垣間見られた、いわば「世界的精神」に対するよろこびであった。それまで日本という国の中に閉じこもつて生きてきた日本人が、大陸に目を開いたときに感じた、開かれた世界、普遍化され客観化された世界に対する感激がそこにはあると思うのです。だがその「世界的精神」が生きて働く場所はやはりこの日本という国土です。日本という国柄、その歴史的伝統の上に世界的精神は花開かねばならない。こういう脈絡をたどつて第三条が書かれるのです。普遍と具体、宗教と政治が結びつく大切なポイントが、この第二条と第三条の間に伏せられているのです。

太子がお書きになつた三経義疏(勝鬘、維摩、法華経の註釈書)の中で維摩居士の人柄を説明された個所に「国家の事業を煩しとなす。大悲やむことなく志益物に存す」という言葉があ

りますが、これは維摩居士の説明であると共に、太子御自身のお心の表白だと思われれます。その意味するところは國家の事業という具体的な現実生活は実に煩わしい。だが大悲―民衆の悲しみを自分の悲しみとして受け入れ、民衆のうめき声を自分のうめき声としてうけとめないではおられない切実な心がおさえがたく動いて、益物―民衆に幸福を与えようとするねがいがあるのだということです。普遍が具体と結びつく姿が単なる概念の配列としてではなく、切實極まる心の動きを通して表現されているすばらしい言葉だと思ひます。この普遍と具体の結びつき、それが第二条から第三条に移る呼吸です。

高等学校などでよく教材として扱われる徒然草、あの書物はそれなりにすぐれた古典だとは思ひますが、そこでたびたび主張される「出家」―これを兼好は一大事という言葉で呼んで人生における最も重要なこととして描いている。しかしその限りにおいて、そこに現われた仏教思想は実に衰弱したものだと言わざるを得ないのであります。太子も同じく出家という言葉を使つておられますが、それは「一人出家すれば魔宮皆動ず」という言葉です。ここにいわれる出家とは、俗世界から離れて、いわゆる仏教の世界にのがれていく、この世のことはどうなつてもかまわない、そういう逃避的精神ではなく、一人の人が真に決断すれば、いかに悪魔の巢喰う宮殿でも、動かすことが出来るのだ。魔を破摧し得るのだという実に積極的な精神をさすのであります。出家した、決断した人の心の強さをまざまざと示す言葉です。そこに人間の心のすばらし

さがある。欲望をすてて山野にかくれるなどは、この逞しい精神に比すればまことに劣弱な精神と言わざるを得ないので。そこにはすでに「現実」の手応えはなくなっている。だが太子の御言葉の中には、「現実」がはげしく息づいている。「現実」の中に力強くふみとどまつた雄々しい姿がある。太子は菩薩の真の姿をここに求められたのです。菩薩は大士とも書きますが、大士はまた「ますらを」とも訓まれます。「ますらを」とは日本人がいだきつづけてきた理想的な人間像であることを一緒に考えてみて下さい。

第三条

「三、に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載せて、四時順行し、万氣通ふことを得。地天を覆はむと欲するときは、則ち壞るることを致さむのみ。是を以て君言ふときは臣承る。上行へば下靡く。故に詔を承りては必ず謹め。謹まざれば自から敗れむ。」

時間がありませんので要点だけ申しますが、最初の「謹」という字に注意して下さい。謹しむとは単に従うのではなく、心の内をじつと見つめて行動するということです。君臣の間柄は

天地と同じであり、従つて天は上に地は下にあつてはじめて「万氣は通ふ」のです。「通ふ」とはいのちがきざすこと、開かれた世界を思わせる言葉です。そこには権力関係を越えた「自然の法則」がある。それは次の「上行へば臣靡く」という言葉にも現われています。太子は「上命ずれば臣従ふ」とは書かれなかつた。上に立つ者が行ふ、その行いに心をうたれて、下の者は自然な姿でその勢に身を委ねるといわれるのです。三経義疏の中で、誤つた道に進んだ者が菩薩の生き方によつて身を正すさまを「大士（菩薩のこと）の広道を見れば即ち自然に恥を懐く」と表現されていますが、自らの行いを恥じて上の行ふところに従ふ姿が「靡く」ということかと思われまゝ。「故に詔を承りては必ず謹め、謹まざれば自から敗れむ」——この最後の「謹まざれば自から敗れむ」という言葉も実に確信に満ちた言葉です。

ところがこの君臣の関係を天地の關係にたとえたのは、中国の戦国時代、管子という書物からの引用にすぎないという説がある。太子は管子の理論を用いて日本における君臣の關係を意義づけたというのです。だが果してそうか。管子の言葉は次の通りです。

「群臣を制して生殺を擅はしまにするは主の分なり。令を県かけ制を仰ぐは臣の分なり。威勢尊頭は主の分なり。卑賤畏敬は臣の分なり。令行禁止は主の分なり。奉法聽従は臣の分なり。故に君臣相与に高下処を異にするは天と地との如し。其の分画の同じからざるは白と黒との如し。故に君臣の間明らか**に**別たるれば、則ち主尊く、臣卑し。此の如くなれば則ち下の上に従ふは響

の声に応ずるが如く、臣の主に法るは影の形に随ふが如し。故に上令し下応へ、主行ひて下従ふ。以て令すれば則ち行はれ、以て禁ずれば則ち止み、以て求むれば則ち得。此れ之を易治と謂ふ。」

たしかに全体の大筋は似ていますし、太子が憲法を書かれるときには、この管子の言葉が太子の意識の中にあつたかもしれない。しかしそれを意識することと、引用し模倣することとは本質的に違う。それを混同するような粗雑な頭では思想を語る資格はありませんまい。この太子のことは単なる引用であると極めつけることが如何にナンセンスであるか、心をこめてこの二つを比較すれば誰の目にもあきらかです。「群臣を制して生殺を擅にするは主の分なり」その冒頭の言葉だけ読んでも、その君臣の関係は実に冷たい。これだけでも太子との思想的なへだたりの大きさはあまりにも明瞭です。両者とも君臣の関係を天地の關係にたとえてはいる。しかし、管子における「天地」はそのへだたりに重点があり、その二つは永久に交わることはない冷やかさを以て対立しているのです。これに反して太子においては天地は一つにとけあつて有機的な全体を構成する。そこには秩序があり、秩序にはいのちが芽生える。それを「万氣通ふことを得」と表現されたことは先に述べた通りです。それは第一条の「和」の世界にも通うあたかな調和の世界である。しかし調和の中にも厳然たる秩序が保たるべきことをこの第三条で述べられているのです。この二つの思想の相違、そこに太子の思想に迫るポイントが

あり、日本の精神的な伝統に対する理解の急所があるはずです。しかし現代流行の学説はその相違にはことさらに目を蔽い、例えば次のように言うのです。

「憲法は中国古典、仏典などからの引用が多く、とくに儒教經典からの引用は全篇のいたるところにみられるが、太子が儒教的な徳治思想にのみ終始しなかつたことは、なかに法家の思想を引いているのでもわかる。太子は表面を徳治思想で飾りながらも、内に天皇権力確立に必要な法家思想を秘めていたとみてよからう。」（岩波講座「日本歴史」古代2、七五頁）

法家とはここにあげた「管子」をさすと見ていいのですが、この儒教の徳治思想の衣の下に、天皇権力確立のため管子の思想を内に鎧つていたという指摘の粗雑さは、原典に一寸でも則して読んだ者には、あまりも人を馬鹿にした暴論であることがあきらかでしょう。もしもこれが露骨な政治的意図をもったアジェンションでなければ、過去の日本を軽蔑し、すべての歴史を階級の対立相剋という観点からしか見ることの出来なくなつた、思想の硬直化現象の所産であると言うより外に言葉はありません。しかもこの文章が現在の日本では一応最高の知的な水準にあると思われている「岩波講座」の一節であることにも心をとどめて下さい。日本における学問の乱れもまたきわまれりと言わざるを得ません。

思想は決して図式では理解できない。中央集権という図式の中には管子も太子もふくまれるかもしれない。岩波講座の筆者はその図式というわななに落ちて、生きた思想を見失つてしまつた

のです。思想を理解する唯一の道は思想を語った人の、その一つ一つの言葉を丁寧に扱う以外にはないのです。心静かに先人の言葉に耳を傾けるときだけ、先人はその心の奥を語ってくれ
ると思います。

(福岡県立修猷館高校教諭)

短歌創作の意味・
山田輝彦



短歌創作の意味

万葉のこころ

恋の歌と戦いの歌

留魂と慰霊

カット・あしび

短歌創作の意味

これから一時間、短歌入門の講義をすることになりますが、一時間の講義でたちまち名歌が作れるような秘訣などあるはずがありません。短歌創作の技術的な面は、昨年合宿記録の中の「短歌入門」の項に殆んど網羅してあると思いますので、それに譲って、本日は実際に即した具体的な話をしたいと思います。

歌を作るといふことは、この合宿では一つの強制です。この自由な世の中で強制するといふのはよほどの理由があるからに違いないとお考えになるでしょう。実際それは「作つてごらんになればわかる」といふ平凡な言葉になつてしまうのです。しかしそれでは納得のできない方もいらつしやるので、少し説明を加えたいと思います。

芥川竜之介という作家をご存知だろうかと思ひます。昭和二年の七月二十四日に服毒自殺をして亡くなりました。彼の死は、昭和の時代のマルキシズムとかファッシズムとかいうような血なまぐさい思想が大波のように押し寄せて来る中であつて、いわゆる教養主義の脆弱さを示した象徴的な死だといふように言われております。その芥川の事実上の代表作と言われる「羅生門」といふ作品がございます。お読みになつた方はご存知だと思いますが、その主題は大体次のようなものです。王朝時代の末期、貴族に仕えていた下人が失業して、羅生門の下で雨止み

を待つている。秋の夕暮れで雨はますます激しい。今夜は寝る所もないというので、羅生門の二階に登って行くのです。時代は王朝の生活が崩壊して、やがて武家の時代に移ってゆく頃で、餓死者が沢山でる。捨てる場所もないので、皆羅生門の上に持つて行って死骸を捨てているのです。その累々とした死骸の中で死んだ女の髪の毛を抜き取っている老婆がいるのです。それを売ってたつきを立てようというわけです。そこで下人は義憤にかられてその老婆をきびしく問責する。すると老婆がこういうふうに言います。「自分だつて好んで死人の髪の毛を抜いているわけではない。あの女も生きていた時には蛇を取つて来て、それを乾して乾魚だと言つて帯刀の侍達に売つて暴利をむさぼつていたんだ。自分だつて、この女の髪の毛を抜かなければ生きてゆけないんだから自分はこのうするのだ」というふうに言います。そこで下人は「そうか、よくわかつた。それじゃ俺もお前の持つてゐる物を剥ぎ取らなければ生きてゆけないんだから、お前の着物を剥いでしまふぞ」と言つて、老婆の着物を剥いで、真暗な暗闇の中に消えて行つたというふうに書いてあります。

それを読みますと非常に虚無的な感じがします。すべての人間はみな強いエゴイズムを持つている。エゴイズムこそ人間の生きる原動力なのだ。そういうエゴとエゴが牽制し合い、反撥し合い、食い合いながらこの世のバランスが保たれているのだというのが芥川の人間観なのです。ところが、その芥川の「羅生門」の材料になつたのは「今昔物語」と「方丈記」なので

す。「方丈記」の飢饉の描写は実に悽慘です。あちこちの築地のほとりには行き倒れになった餓死者がそのまま腐っている。風が吹いて来ると耐えられないような悪臭が臭つて来る。そういう描写の続いた後で、夫婦で生活している者で、離れ難いものは、愛情のより深い者の方が必ず先に死ぬと書いてあります。またその次には、親子で生活している者は必ず親の方が先に死ぬと書いてあります。「必ず」という言葉、原語では「定まれる事にて」という言葉が使つてあります。これは何を意味するか。芥川のように人間というものはエゴとエゴの均衡の上に生きているのだという考え方に対して、「方丈記」の場合はそうではない。餓えの中に放置された親子は、「必ず」親の方が先に死ぬということは人間と動物との悲しい違いなのです。古典の世界の方が遙かに正確に人間を凝視しているのではないのでしょうか。同じようなことが姥捨山の伝説にも言えるようです。この説話は「大和物語」という平安朝の物語にあります。あれは自分を育ててくれたお母さんを、嫁が早く捨てに行けとあるので仕方なしに泣く泣く捨てに行きますが、帰って考えているとたまらなくなつて、迎えに行つて連れて帰るのです。捨てつきりにしたのではないのです。ところがあの姥捨伝説から材料を取つた「楢山節考」という芥川賞の小説は、おばあさんが自発的に死に行くといふことになつておりますが、あれは捨てつきりになつて死んでしまふ。こう考えてくると、古典に比して近代の人間観が如何に残酷で非情であるかといふことがよくわかります。古典の世界の方が遙かに救いがある。そう

しますと人間の社会というものは、時が経つに従つて進歩しているというような簡単な歴史観では解決のつかない問題が沢山出て参ります。進歩しているというのは、われわれの暮しが便利になつたというだけで、人間の心の問題に即してみると、人間は進歩しているどころではない。近代の人間の方がよほど残酷で非情な心を持っているのではないだろうかと感じるわけです。つまり人間らしい情意というものは、文明の進歩に伴つて必然的に涸渇して来る。情意の涸渇という問題は、イデオロギーの問題以上に、人間にとつて決定的に重大な問題である。この事実をただ文明に伴う必然的な動きであるといつて放置していいものでしょうか。人間の歴史は今やデッド・ロックのところまで来てしまつた。人間の心が日ごとに荒れずさんでゆく状態を直視し、何とかしてそれを克服しなければならぬ。これは現代に生きている人間の一つの宿命でもあるし、義務でもあらうかと思ひます。

そこで、もう一つ現代というものを考へる契機として、一つ課題を出したいと思ひます。東京女子医大の教授に千谷七郎という方がおられます。その方に「漱石の病跡」という本があります。その中で非常に私の心にとまつた箇所がありました。それは「思」という漢字の分析なのです。上の「田」は田圃の意味ではなくて、裸の大腦を上から眺めた形だということです。ここに四つのしわがあるのですが、専門の言葉でよくわかりませんが、命名者の名前によつて、シルビー氏溝とかローランド氏溝とか名づけられています。それはどうでもいいことで、つま

り「田」は脳髓の象形だということが大切です。下の「心」はもちろん心臓です。つまり「思」ということは、脳髓と心臓の協力だというわけです。それは理性と心情、知性と感性といいかえても同じです。その二つの調整作用が「思う」ということなのです。ところが、近代の精神史は、脳髓が心臓を征服してゆく過程だといふのです。知性や理性が心情や情意の領域を蚕食してゆく歴史が近代の精神史なのだと言っておられるわけです。理知というものが一方的に心情というものを食いつくしていく。それが近代人の人間観というものを作り上げていったということになるだろうと思います。

従つてわれわれは心の荒れ果てていく状態を何とかしてくいとめなければならぬ。そのためにはもう一度人間の誰もが持つている一番根本的な、素朴で素直な心情に立ちかえてみようということ。そういう心情の世界に立ちかえるというのは決して後退ではないのです。それを後退と思う心が人間をますます残酷にして行くのだと思います。人間の一番奥底のものに帰ることが必要です。われわれが短歌を作る目的の背後には、言わばそういう大きな背景があるのです。

合宿申込書の中には短歌創作の目的として、「思想及び表現の正確さを修練するため」というように書いてあったと思います。つまり、思想といつても言葉を抜きにして思想はありません。思想イコール言葉である。従つてこの会では言葉というものを非常に重視いたします。

正確な、まことのこもった言葉、つまり生きてきた言葉で自分の思いを表現する、それを人に伝えてゆくということが行われていない。そこに現代の学園のみならず、現代の人の生きる姿勢というものの根本的な欠陥がある。従つて正確に生命のこもった言葉を使う、あるいは人の言葉を正確に読むという修練が、短歌の創作と相互批評を通じて、徹底的に行われる必要があるわけです。

万葉のこころ

お手もとに配布した「短歌入門資料」には、万葉から現代まで二十数首の歌が収録されています。万葉集という書物は八世紀の終り頃に出来たものですから、約一二〇〇年ほどの歳月をくぐり抜けて伝承されて来たものだということになります。ここに選んだ材料は冒頭の志貴皇子しきのみの歌を除いては全部無名の歌人のものです。有名歌人の作品なら、俺たちが詠めないのは当り前だとおっしゃるので、全く名もなき民の歌を抜き出して見ました。これから順次に説明を加えたいと思います。

最初の志貴皇子という方は天智天皇の皇子で、万葉の第一期の代表歌人の一人です。この時代は日本の古代国家の形成期で、鬱勃たる気風が躍動していた時代です。そういう清新の気を一首に凝結したような歌で、日本民族の青春を歌った象徴的な歌だと思っています。

石^{いは}ばしる垂水の上のさ蕨の萌えいづる春になりけるかも

「石ばしる」というのは枕詞です。しかし全く形式化される以前の、おそらく岩の上を激したぎちながら流れるという意味が生きていると思います。「垂水」というのは小さな滝のこと、「上」というのは「ほとり」という意味です。「さ蕨の」の「さ」というのは接頭語で意味はありませんが、「さ」という字がつくと、いかにも萌え出したばかりのやわらかい蕨という感じが致します。芯ができて固くなつてしまった蕨ではなくて、やわらかい萌えたばかりの生命の象徴のような語感があります。「滝のほとりに若々しい蕨が萌え出す春になつたなあ」という意味です。真すぐによりみ下された春のよろこびの歌です。この歌をよくよんでみますと非常になめらかでしょう。それはラ行の音が非常に多いからです。たとえば「ばしる」の「る」です。「垂水」の「る」、「さ蕨」の「ら」、「いづる」の「る」、「春」の「る」、「なり」の「り」、「ける」の「る」というふうによりみふうにラ行の音がずっと続いている。ラリルレロという音はなめらかです。カキクケコという音は鋭角的にとがっているでしょう。アイウエオという音は母音でやわらかいでしょう。言葉にはそういう微妙なひびきがありますが、それがこの歌には実によく出ています。日本人というのは何と心の中の微妙な感情を言葉に形づくる名人だろうかということ、こういういい歌をよむとしみじみ感じます。外国では、詩人と

いう者には独特の天才を翼けた者だけがなれるのであって、普通の人では到り得ない世界だときまっているらしいのです。ところが日本人は微妙な心の陰影を、名もない多くの人々がたやすく言葉の世界に形成することが出来るということは、実にありがたいことです。しかも一〇〇年前の歌が、きのう作られたものようになまなましい感動を呼ぶのは不思議という外はありません。

次は「夷歌」と申しまして、夷国の民謡を集めたものの中かから一首抜き出したものです。

信濃道ちは今の墾道刈りばねに足踏ましなむくつ沓はけわが背

「信濃道」と言うのは信濃の国へ行く道という意味です。「今の墾道」とは新しく開墾した道です。そこには「刈りばね」つまり樹の切り株が多い。「足踏ましなむ」の「し」というのは尊敬の助動詞なのです。だから「はだしでいらつしやると切り株をお踏みになるかもしれない、どうか沓をはいていらつしやい、わが愛する夫よ」という意味なのです。「背」というのは「妹」の対照語で、「妹」が妻、あるいは女性一般の呼び名で、「背」は男の場合のそれです。「わが背」というのを「わが夫よ」と言いかえると、もう原語のもつ優しい語感が失われてしまいます。「わが背」という言い方はこの言葉以外では現わせない古代の女性の優しい

心情をふくんでいます。これが日本の情意というもので、自分のご主人を外国式に呼び捨てにする現代女性とは感覚的に随分断絶があるように思われます。

次は「防人歌」です。防人というのは、九州の沿岸を守るためにやって来た東国の兵士のことで、岬を守る人という意味だと思います。

父母が頭かき撫で幸くあれていひし言葉せ忘れかねつる

これは東国の兵士の作ですから詭なまりが使つてあります。「幸くあれて」は「幸くあれと」でしょうし、「言葉せ」は「言葉ぞ」の訛ことばでしょう。この歌は一読して作者が自然にわかるでしょう。これは若い防人、つまり少年兵の歌です。父母が自分の頭を撫でて、「幸いであれよ」「元気で行つておいで」と言つたその言葉が忘れられないという意味です。これは私情、わたくしの悲しみというものを詠んでいます。自分は少しも悲しくはないんだ、喜び勇んで行くんだという歌が本当の人間性の表現なのだろうか。やはりお母さんお父さんの言つた言葉が忘れられないと詠むのが本当の人間性の表現ではないでしょうか。日本の古典には、自分は大君に召されたのだから喜び勇んで行くというような歌は殆んどありません。既成の概念の枠組みの中で物を言うというのは本来の日本人の心ではないのです。

道の辺の荊うまつらの末うれに這うふ豆まめのからまる君を別わかれか行いかむ

「荊うまつら」は野茨うまつらでしよう。「末うれ」は木の尖端うれという意味です。「道の辺に咲いた野茨の先の方
に這ういかかった豆の蔓つたのように、私に縋すがりついて別わかれを惜おぼしむ君と別わかれて私は戦場いくさばに出てゆく
のだ」という意味です。「道の辺の荊の末うれに這うう豆の」までは、「からまる」という言葉を引
き出す序詞じりです。こういう表現は農民の生活経験けいけんに密着みせきしたものです。農民がいつも見なれて
いる豆の蔓つたを、縋すががりつく恋こひしい恋人の姿すがたになぞらえて詠よんでいるわけです。これも女々めづめしい
心こころといえは全く女々めづめしい心こころなのですが、それをたじろがずに詠よんでいます。
次は妻との別わかれの歌なのでしよう。

蘆垣あしかきの隈くま処ところに立ちて吾わが妹子むすめが袖そでもしほほに泣なきしぞ思おもはゆ

「思おもはゆ」の「ゆ」というのは自発の助動詞すけごころといって、自然に何々する、ここでは自然に思
われるという意味です。「蘆あしの葉はで葺ふいた垣かきの方かたにひと知しれず立たって、妻つまが袖そでもしおれる
ほどに泣ないていた、その姿すがたが思おもわれてならないのだ」という意味です。以上三つの歌はいずれ

も、父母や恋人や妻と別れてゆく歌です。わたくしのかなしみなのです。そういうものをふり切って始めて次のような歌が出て来るわけなのです。

今日よりは顧みなくて大君の醜しこの御楯みたてと出で立つわれは

「醜しこ」というのは「みにくい」という意味ではなくて、「勇猛だ」という意味です。「今日からはそういう私の心というものにそむいてみかどの守護兵として出て行くのだ」という決意の表明です。聖徳太子は「背私向公」、私に背いて公に向うといわれましたが、自分の私情を滅して公だけの人間になれと要求することは、人間性を残酷に破壊することになります。それは日本人の心ではなかったのです。私の心に残る髪を引かれるような思いをしながら、なおかつ自分の使命のために、その私の心にそむいて出かけて行くというのが、この歌の真情なのでしょう。「今日よりは顧みなくて」の背後には、私情にかかずらう日常生活の肯定があるわけです。戦争中に入れ替わが教えられた万葉集の歌には、こういう戦いの歌はありましたが、前述のような恩愛の歌は抹殺されていきました。そういうところに非常に問題がありました。そして戦後の教科書には全くその逆の現象が見られます。そういう古典の取り扱い方は、古典を甚だしく冒瀆するものだと思います。やはり私の悲しみの情を詠んだ歌、しかもその悲しみに堪

えて公のために出て行く歌、その二つの心はともに人間の真情であつて、それを二つながら載せるといふところに本当の万葉の生命があると思ひます。もし防人の歌に、戦意を昂揚するよ
うな、勇ましい進軍ラッパを吹いて出て行くような歌ばかりが並んでいたら、私たちは決して
万葉の心に感動しないだらうと思ひます。自分の政策に都合のよいところだけ切り取つて古典
を学ぶというような方法は、われわれの決してとらないところです。父母や恋人や妻と別れを
惜しむ恩愛の情の上に、はじめて「醜の御楯と出で立つわれは」のきびしい決意が、スローガ
ンではない内省的な力で迫つて来るのです。そして、こういう先人の悲しみによつて国が守ら
れて来たという事実も、自然に納得されることと思ひます。

恋の歌と戦いの歌

資料の明治の項に出ている連作「ひそめる思ひ」の作者岡田質も無名歌人です。子規の門下
三井甲之は、「アララギ」と袂を分つて「アカネ」や「人生と表現」の主宰者として独自の道
を行きましたが、その影響下にあつた人というだけで、今は経歴も何も分らない人です。ここ
に抄録した五首はいずれも強烈で純粋な恋愛の歌です。こういうほとばしるような恋の歌は、
現代では仲々見出しがたくなりました。現代には性愛や情欲はあるけれども、それが本当に恋
愛にまで昇華されたものはだんだん影が薄くなつて来たようです。北村透谷は「恋愛は人生の

秘鑰なり」と言いましたが「秘鑰」とは秘密の鍵という意味です。本当に素晴らしい恋の歌を生む心は、間違つたものとは本当に戦かう強い力になってゆくものです。恋を知らない戦い一辺倒の歌というのは、とかくから元気の歌になってしまい勝ちです。「ひそめる思ひ」というのは、ひそかに人を思っている胸の思いを詠んだ歌という意味です。激しい情意が溢れ出て、字あまりの多い表現になっています。

おもひなぐたづきも知らずうららけき春日ゆ隠りねどに臥すわれは

病中の作です。「おもひなぐ」の「なぐ」は、波がおだやかになるといふ意味の「なぐ」だと思います。「胸の思いをなごませるすべもわからず、うららかな春日にそむくようにして自分分は臥床にふしている」という意味です。

恋ふらくに力は湧き来いたづきのゆるる期おもへば待ちがてぬかも

「恋ふらくに」の「らく」は「こと」といふ意味です。だから「恋ふるに」と同じ意味にとつてよいのです。「待ちがてぬかも」の「がて」といふのは可能の意味なので、直訳をすると、

「待つことができないなあ」ということになりました。「あの人を恋しく思う時、本当に生きる力が湧いてくる、今の自分には病気のなれる時を思うと、その時期が待ち遠しいなあ」という意味になります。

ただくるしいかにせよとかまなかひに消えぬ面影われをまねくに

これは倒置法が使つてあります。「まなかひに消えぬ面影われをまねくに、ただくるしいかにせよとか」という表現を逆にしたのです。「まなかひ」というのは「眼前」です。「眼前に消えない面影が私を招いているのに、一体どうすればいいのか、ただ苦しいだけだ」というわけです。痛切な思いをためらわず激しくぶつつけていて、恋のムードを楽しんでいるというような発想ではありません。こういう恋の歌は万葉以外には余りありません。古今や新古今になると、もつとポーズをとつて恋のもの思いに耽つているような歌が多いのです。

かたらねば内をつく思ひちごのごときみがみ名呼ぶにせめてなぐさむ

「あなたと語ることをしないと、悲しみが心の中から衝き上げてくるような思いがする。子

供のように君の名を呼ぶと、せめてそれが心のなぐさみになる」という歌です。

わか草の君が足もとにこれの身をまろびふさば足り君の足もとに

字余りの多い歌ですが意味は明瞭です。「若草のように若々しいあなたの足もとに、自分の身を投げ出せば心が満ち足りるだろう」という意味なのです。随分激しい恋の歌ですが、こういう歌と並んで、次の「出征の折よめる」のような歌ができたところに、明治の素晴らしさがあるのではないでしょうか。

この連作の作者猿田只介という人は、やはり無名の歌人です。この作品は日露戦争の時の従軍の将兵の歌を集めた「山桜集」という歌集にのせられています。その「山桜集」の中には、大将から一兵卒の歌まで全く平等に並んでいます。その中に、この召集令を受けた時の歌があります。こういうのが典型的な連作の歌で、私がことさら解釈を加えなくても真すぐに心にとおつてくると思います。

待ちわびし召集令をうけしより心をどりぬなとはなしに
君の為国の為なりとはいへど老いしちち母思はぬにあらず

いさましきはたらきせよといひさして涙にくもる母のみことば

ふた親わらわに妾わらわつかへむ国のためいざとはげますけなげなる妻

門の辺におくるみ親ををろがめば泣かじとすれど涙こぼるる

手をつかへなみだぐみたる教へ子の姿を見れば胸さけむとす

いざやいざ朝日のみ旗おしたててふみにじらなむ露しこくさの醜草

一番最後の歌だけが戦いの歌でしょう。「露の醜草」というのは「とるに足りない奴ばらよ」という意味なのです。非常に激しい戦闘の意志が表現されています。しかしそれまでの六首はみな悲しみの歌です。親に別れ、妻に別れ、教へ子に別れる、私を捨ててゆかねばならぬ苦しみの歌です。そういうものの上にはじめて公に参じて行く歌が詠まれている。これを最後の一首だけ抜き出して、好戦的な歌だ、日本人は好戦主義の民族だというように批判するのは的はずれています。むしろ最初の六首のような心情が本当の日本人の心情なのです。そういうやさしいものを破壊したり、脅かしたりする者に対して、はじめて強い雄叫びの歌がでくるのです。

明治の時代というのは、こういう純粋な恋の歌と、悲劇に耐えて戦った人の歌が、二つ並んで作られた時代であった。戦いの歌だけが出来る間は、決して偉大な文化のなしとげられる時

代ではないと思います。

留魂と慰霊

最後に、われわれと学生時代を共にした二人の戦没学生の遺歌を紹介したいと思います。松吉正資君は東大法学部在学中、昭和二十年五月十日、沖繩特攻作戦に参加、水上偵察機で自爆して亡くなられた方で、弟さんがわれわれの同人として、この合宿に参加しておられます。合宿などで一緒に勉強した折の、紅顔の面影が今でもありありと浮んで参ります。

述懐

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたたかきかな
数ならぬ身にはあれども吾を送る人のおもひにこたへざらめや
うつそみはよし砕くともはらかなのなさけ忘れじ常世とこよゆくまで

最初の歌には「人のなさけ」という言葉があります。ふるさとの人が自分に寄せてくれる情、それにこたえるために自分は死んでゆくということなのです。次の歌にも「人のおもひ」という言葉があります。最後の歌にも「はらかなのなさけ」という言葉があります。国民同胞たちの、自分をこの年まで育ててくれた恩愛の情。そのいつくしみをとこしへに忘れまい。その

ためにうつそ身の命を捧げるのだという気持で少しも思い上った所がありません。しかも、戦いの歌ではありません。ふるさとの人たちの心に別れを告げてゆく歌なのです。そして終戦の三ヶ月前に、諸君と同じ二十二歳ぐらいの年で、鹿児島南方洋上で戦死されたのです。こういう歌をよむと胸がつまります。真心というものは理屈ではないのです。どういう精緻な理論でも、理論というものは人の心を納得させないけれども、真心というものは万人の心を納得させるといふことがよくわかります。こういう悲劇を二度と繰り返さないためには、本当に亡くなった人の思いに心を寄せることが必要で、それこそ本当に平和を念願する人の義務であろうと思えます。

次の和多山儀平君は、熊本高等工業を卒業後、直ちに予備学生として海軍に入り、やはり昭和十九年の十一月十七日に南支那海の航空母艦上で敵の戦闘機と機銃で戦って、機関砲に撃たれて戦死した人です。この人は、眼光爛々とした色の浅黒い偉丈夫で、竹を割ったような性格でした。その性格が歌にもよく現われていて非常に強い戦いの歌になっています。

出陣にあたりて

畏きや命みことかかふり夷えいしらを打攘うちばらふべきときはきにけり

君のためのち死すともしきしまのやまとしまねをとほに護らむ

みくにいまただならぬときつわものと召され出でゆく何ぞうれしき

吾死なば後につづきてとこしへに御国護れよ四方よちの人々

最初の歌の「かかふり」は「冠」という言葉から来たもので、頭の上にといたたくという意味です。「かしい天皇のご命令をいただきまつて、敵兵たちを討ちはらうべき時が来た」という意味です。最後の歌には「後につづきて」と書いてあります。そして「御国護れよ四方の人々」、後はお願ひしますよと言つて、二十二歳の青春を南支那海の上で死んで行つたのです。

私はこういう歌を読むと、歴史というものは、本当に厳肅な場面においては「留魂」である。こういう人は魂を留めて死んで行つたと思わずにはいられません。そして後から行くものは「慰霊」をもつてそれに応える外はありません。これは何も日本だけではないと思います。歴史は天然現象ではなく、人間の意志によつて守られるものですから、「留魂」と「慰霊」はあらゆる民族の意志継承の原型です。ただありがたいことに、日本では留魂ということも、慰霊ということも、古来歌の道によつて行われてきたということです。誰でも簡単に出来る歌の道によつて、それが行われてきた。これは日本の文化を最も深い所で支えて来た事実なのです。だから私たちは、今よんだ松吉君や和多山君のような悲劇を繰り返さないためにはどうしたらよいか。ただ空念仏みたいに「平和」「平和」と言っているだけではないけなひではない

か。無量の思いを祖国に傾けながら死んで行つた人の心に、自分の思いを寄せることが出来ないような人に、何で平和が実現できるだろうかと思わずにはいられません。

最後に、一生に一ぺんしか出来ない辞世の歌のようなものを例にあげたので、あまり皆さんが緊張されて、「ああいう歌を作らないと、やつぱり主催者の期待にそえないのではなからうか」というように思われては困ります。しかしわれわれが歌というものをやるのは、単なる娯楽や教養や、あるいはたしなみのためではありません。広い深いわれわれの伝統というもの、人間の一番大切なところにつながってゆくためには、やはり歌を学ぶことが不可欠の条件だということに気づいていただきたいのです。だから日本人は歌のことを「敷島の道」と言ってきました。われわれの生きる姿勢がその中で学ばれるという意味で「道」といわれたのです。狭い意味の「芸術」という枠を越えて、深く強くゆたかに、しかも美しくまごころを歌い上げる。そういう高い次元の芸術性への志向こそが、日本人の歌というもののあり方であったのだということをお申し上げたかったのです。

(福岡県立若松高等学校教諭)

年
間
活
動
報
告

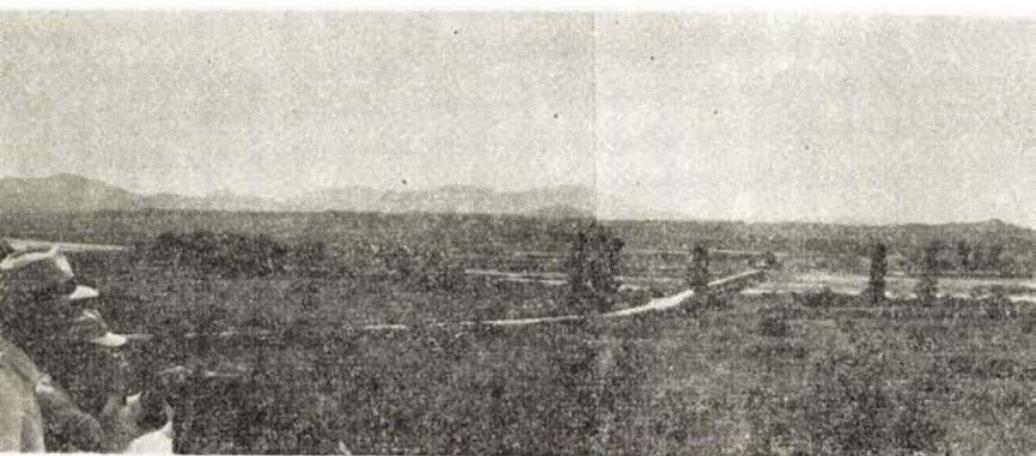
一年の歩み

— 雲仙合宿より阿蘇合宿まで —

九州大学法学部四年

古川

修



雲仙合宿を終えて

読書会の始まり

韓国訪問

各地区小合宿

太宰府合宿―春季「結集合宿」

カット・板門店より北鮮を望む
―訪韓学生団撮影―

雲仙合宿を終えて

一昨年、昭和四十一年八月九日、全国五十四の大学から集った百七十三名の学生は、四泊五日の合宿生活を終えて、緑濃き雲仙の山を降りた。山を降りて行く参加者一人一人の思いは、さまざまであつたが、一言でつくせば、それは今迄にない団体生活の中で、痛切に味わつた、日本人として生きていくことのよろこびときびしさだつた。毎朝、君が代の歌の調べと、国旗掲揚で一日がはじまる。このこと一つでも、それは多くの参加者にとつては、まことに新鮮な体験であつた。全てにおいてマスプロ化され、機械化されていく今日、多くの青年は日本人として共に生きていく共感の世界を見失いつつある。この、人と人との断絶をいかにして、克服し、この荒涼とした精神の世界にいかにして、「国民同胞感」とでもいうべき、国民としての共通の心情を甦らせることができるか。それがこの合宿教室に与えられた課題であつた。だが、心をつなぐことは世上一般に言われているように、単にイデオロギッシュな面で、思想を訓練することからは生まれない。心をつなぐことは「ことば」をつなぐことであり、「ことば」をつなぐことは、「ことば」を鍛えることから出発しなければならない。こうして「言葉」の修練としての和歌創作が行われたが、われわれはその体験を通して、同じ日本語を使つていながら、「言葉」というものが、いかにむずかしいものであるかということを学びえたの

である。さらにわれわれは、古典にとりくむべきことを教えられた。古典を学ぶことは、いうまでもなく祖先の心におのが心を寄せて、祖先の心を身をもって知るといふことである。祖先がいのちがけで守り育ててきてくれたものを、受けついでいくところに、われわれ現代に生きる青年に共通するきびしい使命がある。混乱した思想界のただ中であつて、それぞれに道を求めてこの合宿教室に参加した多くの友にとつて、この合宿での体験は、かかる思想の混乱を統一へ導くかけがえのない指標となつた。しかしその道は、極めて困難な道であることも知つた。それは組織をつくつたり、宣伝を強化することによつて、解決のできることはない。一人一人の誠実な生き方をつみ重ねることによつてのみ枯渴しつつある国民相互のきづなは守られ、育てられていくのである。一人一人が自分の持場において、その努力をはじめることが、合宿教室を終えて、山を降りていく一人一人に与えられた課題であつた。

(編者註、この昭和四十一年に行なわれた雲仙合宿についての詳細は「日本への回帰」第二集を参照していただきたい)

読書会の始まり

九月に入り大学の授業が始まると同時に、合宿に参加した友らは大学別に或は各地区別に集まり読書会を中心とした活動を開始した。東京地区では在京学生を集めて行なう「東京八日

会」が四年前から行われていたが、雲仙合宿のあと、輪読用テキストとして選ばれたのは「歎異抄」であった。更に今年に入ってから、小林秀雄先生の「私の人生観」の輪読をはじめた。先生は夏の合宿教室に講師として数回お見えになっており、昭和三十九年の桜島合宿では「常識について」という講演で学問の本質を語ってくださった。われわれにとって身近に心の師として仰ぐ方である。

さらに北国の富山では、富山大学信和会が昭和四十一年の六月に発足したばかりであったが、合宿後は国民文化研究会の先生方が学生時代から人生の書として読み続けておられる、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」(黒上正一郎著)が輪読のテキストとして用いられた。唯物的な思想のうずまくただ中で「信」を求めて生きていこうと決意したわれわれにとって聖徳太子の言葉は力強い心の支えである。「若し天下の道理を論ぜば悪を遣り善を取るはず已に始まりて方に能く人を勧む。若し自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む。」とは維摩経義疏の太子の御言葉であるが、太子の時代が崇峻天皇弑逆を中心とする暗澹たる時代であったことを思えば、この僅かな言葉の中に偲ばれる太子の人生観の力強さには千古を貫くものがあるといえよう。

関西地区では京都大学信和会を中心にして吉田松陰の「講孟余話」の輪読会が始められ、岡山大学バルカノンの会では合宿以前からのつづきで「古事記」の輪読会が行なわれた。九州大学

信和会で使われたテキストは「古事記」であった。丁度そのころ、国民文化研究会の夜久正雄先生の「古事記のいのち」が国文研叢書として出版されたが、古事記をはじめて読むわれわれにとっては、まことに得難い入門書であった。長崎大学は信和会、大分大学は国民文化研究会、鹿児島大学は社会科学研究会（後に誠和会もできる）を母体として同じく勉強がはじめられていった。なお上記したテキストの外にも、「隠者の夕暮れ」（ペスタロッチ）東洋の理想（岡倉天心）文明論之概略・学問のすすめ（福沢諭吉）昭和の精神史（竹山道雄）人間の建設（岡潔・小林秀雄対話）緑の日本列島（林房雄）論語、などが折にふれて選ばれていたことを付記しておく。

韓国訪問

昭和四十年の夏、国民文化研究会によって日韓学生の交換が計画された。日本から韓国を訪問する学生、韓国から来日して夏の合宿教室に参加する予定の韓国学生、いずれも待機してその実現を期したが、当時の険悪な日韓の国交状態のために、ついにこの計画は日の目を見なかった。それで四十一年は、別途の計画を進め、八月二十日前後の関釜連絡船によって、十六名の班を韓国に送ることになった。団員十四名の学生は、昭和四十年度の合宿教室に参加後、一年にわたって国民文化研究会の諸合宿に参加し、四十一年の雲仙合宿では幹部の任に当たった者

であった。台風の影響で、出発が数日遅れたため、急遽空路に変更、八月二十六日、一行十六名は福岡の板付空港より釜山に向って出発した。一行は左記の十六名である。

團長川井修治(国文研副理事長・鹿児島大学助教) 副團長小泉明(国文研理事・經理士)

学生団員 島津正数 古川修(九州大) 井上慎一、福島義治(京都大) 北島照明、徳田浩

士(鹿児島大) 森重忠正(長崎大) 岸本弘(富山大) 寺川真知夫(神戸大) 伊藤三樹

夫(岡山大) 磯貝保博(中央大) 今林賢郁(早稲田大) 岩越豊雄、山路忠重(亜細亜大)

十四名の学生にとって、外国旅行ははじめての経験であった。釜山まで空路わずか四十五分という隣国であるが、政治的に険悪な関係をつづけている現状においては、まさしく「近くて遠い」国であった。今回の訪問も、日本と韓国の政治問題の摩擦から、実現が危ぶまれたのであるが、ぎりぎりのところで、政治的解決をみて、無事出発することができた。ビザ解除第一号であったから、我々一行は、日本を代表して行く旅行団として、恥ずかしくない態度をとらねばならぬと、思いをひきしめたのであった。未知の国へ行く期待と、海を越えて両国青年の間に友情の絆を確立するという使命の重さをひしひしと感じながらわれわれは出発の途にいたのである。

早稲田大 今 林 賢 郁

訪韓の朝

とつくに
外国に向はんとする今朝はしも空晴れゆきて心躍るも

待ちに待ちしこの日にしあればおのづから友らの面も輝きてあり

釜山上空

飛び立ちし機ははやすでに外国の空に舞ひ来て速度ゆるめぬ

はろけくも思ひきたりし外国の今はうつつに迫り来るなり

着地、タラップをおりる

いにしへゆえにし深かりし外国に我等今しもおりたたんとす

外国の土地をしふめば思はずも身内ふるひて心ひきしまる

朴鐵柱先生の出迎へをうく

いにし日の集ひがえにしとなりし師の君の迎へ給へり笑顔たたへて

今林君の歌によまれている朴先生と我々の出合いは、昭和四十年春の八木山合宿の時であった。戦前、日本で勉強しておられた先生は、戦後、韓国へ帰国されてから、李承晩政権の圧迫に耐えながら日本文化研究所を運営され、日本文化の研究をつづけてこられた。そして昭和四十年、終戦後二十年、夢にまでみた日本をふたたび訪ねられたが、すでに日本文化の良さが驚くほど失われてしまっていることにひどく落胆されておられる時、縁あつて福岡県八木山におけるわれわれの合宿にみえられたのであつた。この時の先生との出合いが、その後日韓学生の

交流計画へと進んでいったのである。その先生と、研究所の学生の方々の出迎えをうけて、我々は異国の地におりたつた。

飛行場にはもう一人忘れることのできない方がおられた。その方は我々にとつては、はじめの対面であつたが、戦前、国文研の先生方と志を同じくして、日本で学ばれたという朴昇浩氏である。韓国動乱の時に、妻子と別離してふたたびあうことのない悲運にもめげず、昔の同志である先生方を心の支えとして生き抜いておられる氏の姿に、我々は、国境を越えてつながる志の深さと、尊さを教えられたのである。

こうして九月五日まで十一日間にわたる韓国旅行が次のような日程で行なわれた。

一日目、釜山市内見学。

二日目、日本総領事との面会、大韓陶器、水産センター、梵魚寺見学。

三日目、慶州の古跡見学。

四日目、首都ソウル着、日本国大使館への挨拶、日曜新聞社への挨拶、日本文化研究所の学生との懇談。

五日目、国軍墓地の参拝、韓国動乱の記念館を見学。

六日目、中央政府で丁一権國務総理に訪韓の挨拶、板門店見学。

七日目、仁川工業地帯見学、仁荷工科大学、仁荷実業高校見学、農村視察。

八日目、慶熙大学参観および学生との懇談。

九日目、梨花女子大学、ソウル大学、高麗大学の見学および学生との懇談。

十日目、反共連盟の学生との懇談。

十一日目、帰国。

右に列記した日程は、その概略であるが、この旅行についての詳細な報告は、最近、「訪韓学生研修団報告書」として国民文化研究会から出版されているので、ここでは旅行中特に心にとまっていたいくつかの印象を記すにとどめたい。

その一つは、三日目慶州の古跡を見学したときの深い感銘であつた。

「……昨日の梵魚寺と今日の新羅文化見学を通じて感じたことは、韓国の歴史には断絶があると言ふことである。韓国人はそれに対してすぐ、加藤清正の『朝鮮出兵』を言うが、決してそればかりではない。それは新羅文化と李朝文化の断層である。李朝は新羅文化のすぐれたものを受け継ごうとしなかつた。それは朝鮮の役という外的なものとは本来何の関係もないのだ。陶器にしても李朝時代のものは新羅時代のものに比べればお話しにならないほど劣つてゐる。それに比して日本にも度々戦乱の世はあつたが、二六〇〇余年の間、皇室を中心を守り来たつた日本文化の尊さと、日本民族の幸福を、ここ韓土に於て、しみじみと感ずるのである。」



慶州駅の「白馬部隊」

これは富山大学工学部岸本君の記録の一部であるが、このような感想は団員すべてのものであり、今後、韓国の問題を考えてゆくためには、どうしても深めていかなければならない韓国文化論の一頁であった。

その思い出深い慶州の駅で、ソウル行の汽車を待っているとき、奇しくもベトナム派兵の「白馬部隊」に出逢った。韓国がベトナムへ軍隊を派兵していることは知っていたが、我々は、その生々しい姿を目にしてはげしい緊張をおぼえた。そこには、まさしく、国際政治の厳しい一面が、現実としてあった。鹿児島大学の徳田君は、彼の眼に焼き付いたその時の光景を次の様に記している。

「ソウルからの『白馬部隊』の専用臨時列車が慶州駅に着いた。スピーカーからの軍歌はいつそう高らかになり、群集の間から軍歌の大合唱が始まった。その中、ある一人の老婆が車に近寄り、汽車の窓ごしに若い兵士に何事か一心に話しかけている。若き兵士は褐色に日焼けした顔から真白な歯を

のぞかせ、老婆の肩を軽くたたいて慰めていた。その姿が私には実に印象的であった。」
五日目、我々一行は、国旗をかかげ、正式の儀礼をもつて国軍墓地を参拝した。ここには、韓国動乱の際、共産軍との戦いで倒れた戦死者四万七千人が眠っていた。緑の芝生がしきつめてある傾斜地には、四万七千の真白な柱が岡また岡に続いている。我々が、そこで深い祈りをささげている丁度その時、かたわらでは、ベトナムで戦死した十七柱の英霊の国葬が行われていた。我々は、国葬をじつとみつめながら、吹奏楽の静かに流れゆくのを耳にして、海一つ隔てた隣国のただならぬ様を今一度まざまざと見せつけられるおもいだった。

岡山大学 伊藤 三樹夫

国のため命失せにし人もへば湧きくる思ひのおさへがたしも
とつくにの人とはいへど国のためつくせし人は胸を打つなり
彼ら又国につくせり吾ら又祖国のために死なむとぞ思ふ

六日目、我々一行は、丁一権國務総理との会見を終えて、板門店に向った。北と南との間は、休戦の状態にあるとはいえ、一触即発の危険が常に潜在している。軍事分界線に近づくとつれて、基地は多くなり、鉄橋などにも爆破装置が仕掛けてあるということであった。国連軍の最前線基地で昼食をすませ、板門店に入った。蝶が舞い蟬が鳴く一見のどかな丘陵地帯を支

配しているピンと張りつめた緊迫感が五体を支配する。ここは静かなる戦場であった。

長崎大学 森 重 忠 正

民族は同じといへど異なる主義にわかれてわが敵とよぶ

イデオロギーの違いから、民族が分断されるということが、いかに悲惨なことであるかを、我々一行は、肌身に感じさせられたのであった。それは、南北統一ということを安易に考える甘いヒューマニズムやオプチミズムをよせつけない、現実の厳しさであった。

各地区小合宿

読書会を中核として展開された各大学の活動は、十月に入って大学別の合宿となって新らしい段階にはいった。

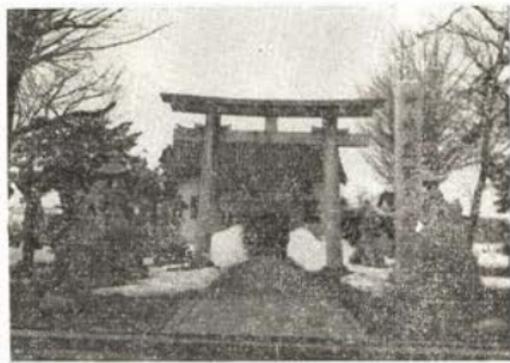
早稲田大学信和会	十月八日～十日	藤沢市緑ヶ丘ユースホステル
九州大学信和会	十一月十一日～十四日	福岡市外 太宰府飛梅会館
岡山大学バルカノンの会	十一月十九日～二十一日	岡山市 吉備津神社
京 都 大 学	十一月二十一日～二十三日	京都市東山区 日向大神宮

鹿児島地区学生グループ	十一月二十五日～二十七日	指宿市 圭屋ニースホステル
東京地区学生グループ	十一月二十三日	東京都北多摩郡田無
亜細亜大学国民思想研究会	十二月六日～八日	川崎市自協学舎
長崎大学	十二月二日～三日	長崎市大音寺
富山大学信和会	十二月十日～十一日	富山市 熊野神社

これらの合宿の中で、私は九州大学を中心とした合宿にしか参加していないので各地の合宿の模様をここで報告することは出来ないが、どの大学でも合宿が終った後、合宿地で作られた和歌、感想文、講義のレジュメ、参加名簿などがガリ版刷りにされて全国の友らのもとにとどけられ、それらの刷り文によって遠くはなれたところで合宿を営む友らを偲ぶのはありがたかった。ここではそれらの刷り文のうちの一つ、富山大学信和会の合宿記録「学園に心の交流の場を求めて」の一端を御紹介しておきたい。この刷り文はザラ紙の印刷を十四枚重ねただけの粗末なものであったが、現代の索漠とした学生生活には到底求め得ない、ほとぼしるような熱気がただよい、真剣に道を求める友らの心が行間に溢れていた。

「十二月十日午前八時、大学の正門に『学園に心の交流の場を求めて——富山大学信和会合

宿」と墨黒々と書かれた看板を立てた。自分らの欲目であろうか、今まで学園のところかまわず立てられていた政治運動の貼り紙に比べて何とも言えない清々しい気分に満ちていた」ということばからこの記録ははじまる。その日は「今にも雪の降りそうな寒い日」であった。広々とした部屋、しかもガラスが一、二枚われているという粗末な部屋ではあったがひきしまった空気の中で開会式、輪読会、和歌についての講話(富山県立図書館、広瀬誠先生)、研究発表と日程は進んだ。「広瀬先生がカバンから次々と取り出された古い歌集、歌を高らかによまれたときの目の輝き」が参加者の胸にやきついた。二日目には十七条憲法、吉田松陰の士規七則の輪読、そして和歌創作が行われ、昼頃には国文研の長内俊平先生が東京より来られた。学生の研究発表のあと、三時から先生のお話があった。「先生は『自分の感動は話せば薄れてしまふようであまり気が進まない』と前置きされながら、淡々と飾らずに話されてゆく、その先生の態度は我々に深い感動を与えた。自分の感動を人に伝えるとき、我々はどのような態度を取らなければならないかを先生の御講義の中に学んだ。」さらに研究発表、和歌の相互批評のあと「十時ごろから長内先生が届けて下さったウイスキーを飲みながら夜のふけるまで語り合い、そしてまた手拍子を打ちながら師も友も共に歌った。明日に迫った別れを惜しむかのように腹の底から声を出して歌った。いつまでも歌いたいと思った。歌いあかしたいと思つた。」



合宿地・熊野神社

三日目、閉会式、「皆思い思いに合宿の印象を述べた。短い合宿であつたが、皆何か心を打たれるものを感じていた。ある友は『信和会の目指すものが何であるか今ようやくわかりかけて来ました』と言つた。この言葉に今度の合宿の意義の全てが含まれてゐた。」そして「別れ、「長内先生は朝食をすませてから車で富山駅へ向かわれた。先生の車が見えなくなるまで皆手を振つてゐた。車の中から先生も小さく見える手を振つていらつしやつたのが今も忘れられない。」

この全体の流れの記録のあと、合宿地で作られた和歌、毎朝神前において拝誦された明治天皇の御製、そして合宿を終えたあとの感想文が細かな字でぎつしりと記録されている。その中で富山大学の岸本君と広瀬、長内両先生のお歌とは、師弟という地位の差、年令の差をこえた真実の平等の世界の表現としてここに書きとどめておきたいと思う。

広瀬先生をお迎へして

静かなる師のまなざしは光るごとく声高らかに歌詠み給ひぬ

富山大学 岸 本 弘

静かなる師の御言葉も敷島の歌読むときはつよくひびきぬ
身にしむる寒さの中に正座して友の言葉を師は聞き給ふ

長内先生東京より来て下さる

なつかしき師の顔まだかと待ちをれば笑みを浮べて師は手を上げ給ふ
忙しき身もかへりみずまごころをわれらが集ひによせ給ひける
この上はこころの限り尽すのみ祖先みやの教へ一筋に求めて

富山県立図書館 廣瀬 誠 先生

しぐれ暗く降りしく夜道踏みなづみひた急ぐなり傘かたぶけて
暗やみの御堂の中ゆあかあかと灯しもれたり友らがまどるか
冷え透ほる夜の御堂にあひ集ひ学びの道を語る友どち
冷えだたみに友らとゐならば火桶の火つぎつつ語るくだちゆく夜を
日の本のまことの学びの道求め努むる友らたのもしきかも
語りやめ息づくときに寒々としぐるる響き屋根すぎゆくも
別れ告げま暗き夜道出づる時わがつく息は霧の如しも

富山大学の合宿へ参加する汽車の中で

めざむれば越路の空は雲たれて枯草原に冷雨ひさめそぼつも

たちまちに雲下り来て大粒のあられますぐに窓をたたくも

岸本君からの便りの中に「どんな合宿になるか楽しみです」とあるを

楽しみですといふことば嬉しむいかならむ時にありても楽しと言ふべし

合宿に集ふ友らの名そらんじつつ何語らんと思ひつつゆく

金沢でそばを食みて

玉そばをゆでるおきなのふるまひのせまらざる見れば越路なるらし

○

本当に合宿に参加できて、こんなに嬉しいことはありません。今、三重県の

熊野市から東京へ帰る寸前、汽車を待ちつつ書いております。

わが車見えずなる迄手を振りて別れ惜しむか若き友らは

帰るさに神通渡れば雪白き遠山嶺みねは薄日に映えりつ

おのおのも特色ありてかんばせも語りしことも心に残りぬ

つたなかる話なれどもよろこびて聞く友あるは嬉しかりけり

とほしかる小遣ひさきてわが為と土産をたびし若き友らよ
見返れば神通川の川上の山なみすそにかすみたなびく

太宰府合宿―春季「結集合宿」

昭和四十二年夏の夏の大合宿に向けてのリーダー、今林(早大)、岸本(富大)、福島(京大)、伊藤(岡大)、古川(九大)、徳田(鹿大)の六名は、一月にはいつてから文通によって、春季「結集合宿」の計画をすすめていった。二月には早大の今林君からリーダーを代表して長文の檄が全国各地の大学に配布された。こうして三月十九日、福岡の南、太宰府天満宮の境内、飛梅会館で春季「結集合宿」が行なわれた。

この合宿には、次の各大学から二十名が参加した。

九州大学、熊本大学、長崎大学、鹿児島大学、神戸大学、関西大学、同志社大学、京都大学、中央大学、早稲田大学、亜細亜大学、慶応大学、玉川大学、上智大学、東京工業大学、富山大学
ここに集る三十名は今後われわれの運動の中核として各地で活動をつづけるのは勿論、来るべき阿蘇における夏季大合宿のリーダーとしての責務をも果たすべきメンバーとしてここで全精神を傾けた合宿をもとうとするのである。合宿は完全に学生の手によって運営された。

合宿の第一日目は午後七時に開会した。開会式、オリエンテーションの後、自己紹介をし

て、班別にわかれてお互いの所懐を表明しあつた。

翌二日目は、七時に起床し、宿舎の前庭、樹令千年の大楠のかたわらに国旗を掲揚、明治天皇の御製を拝誦した。

二日目の午前中は、黒上正一郎先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」を全員で輪読、午後からは、九州大学の古川の「和歌についての体験発表」があつた。和歌創作の体験を語り、小林秀雄先生の「言葉」という文章を引用して、「歌とは情をととのへる行為である。言葉はその行為の印である。言葉は生活の産物であり、頭脳の反省による産物ではない。定義として生れたものでもなければ、符牒として生れたものでもない。」という言語認識の根本について、我々は深く考え直してみようと語つた。その後、全員で、各自創作してきた和歌の相互批評をおこなつた。

夜にはいり、京都大学の福島君の体験に即した意見の発表があつたが、次のことばが特に印象に残つた。

「親子の愛情がどういふものであるのか、ということが、弟の死を両親が悲しむ姿にふれて実感した。他人のところがわかるということは思いやりである。勇氣ある男とは、細やかな心づかいをする人である。物質を物質としてあつかうのではなく、物にこもっている心を見と

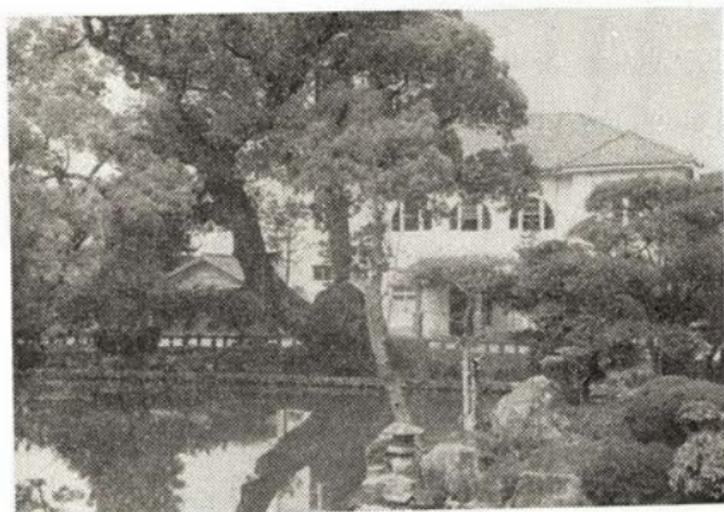
らねばならない。」

その後、国文研の山田先生にご講義していただいた。先生は「朝聞道夕死可矣」という論語の言葉を引用され、「聞」ということは先生の肉声を聞くことであり、すぐれた師とのめぐり逢いということがその人の人生を決定するものであると説かれ、「この世の中には生命よりも大事なものがある。それに気づくことが学問である」と話をむすばれた。このご講義は皆に深い感動を与えたが九州大学の小柳君はその時の気持を次の二首の歌に托している。

命よりたふとき道のあるといふ師のみことばにわが身ふるひぬ
生命かけて悔いぬものありそを求め学びゆくべしと師はのたまひぬ

三日目の朝は、徳田君による黒上正一郎先生の太子のご本の読書体験発表の後、二日目につづいてこの書物を班別で輪読した。午後からは、太宰府の苔寺を訪ねた。連日の討論に疲れたわれわれには、雨にぬれた苔の緑と砂の白さがひとときわ目にしみた。

夕方、高熱のため帰省地の福岡で病床にあつた今林君が、小康を得て合宿地を訪ねた。今林君はこの合宿の為、これまでリーダーの中心となつて努力を積み重ねて来ていただけに、病いの床にじつとしていられたのであろう。友を迎えるわれわれの心はずんだ。



太宰府・飛梅会館

京都大学 福島 義治

階下より病癒えしか元気なる君の声聞き思はず立ち上りぬ

長かりし高熱のためか前に増し君がほほのやつれ目立てり

さはあれど君の元気なる声聞きて我も心のやすらくを覚ゆ

時々はまだ苦しげに咳をする君よ身体をいたはり給へ

彼は、未だ熱のある身体であったが、その手になった檄文を参照しながら、「内から力あらしめるものを、一人一人が探求してゆかなければならない」と訴えた。

その後、国文研の小柳先生の「菅原道真と三条実美」についてのご講義があった。およそ一千年の隔りをもつこの二人の歴史上の人物が、ここ太宰府を機縁として深い心のつながりをむすんでいることを知って、日本の

歴史の一つの貴い血脈にふれるおもいがあった。

四日目の朝は、九州大学の稲津君が意見発表、寺田寅彦の「手首」の問題を引用し、バイオリンやセロの場合、下手と上手ではまるで別の楽器のような音が出るのは、手首の関節の柔らかさにある、それと同じく、教育や政治においては、教育者、為政者の手首が堅過ぎてはいけない。「心の手首」を柔らかくするよう努力しようと言った。

その後、鹿児島大学の徳田君が、現在の政治問題について論じ、特に現行日米安保条約の期限が切れる昭和四十五年に向けて、左翼革命家の政治活動が極めて危険な様相を呈していることを具体的な例をあげて警告した。

夜は、夕刻到着された小田村先生(国文研理事長)を囲んで、質疑応答の形式で、先生のお話を伺った。「人々は平等の世界を口にするが、たとえ共産主義の世の中になろうとも、所詮人間社会に差別はさけられない。その場合、人の上に立つ人がいかに心の修行ととりくむか、諸君は真剣にそのことを考えなければならぬ。」という先生の言葉が心に残った。

五日目の最終日は、今後の活動のための連絡会議をおこない、夏の大合宿への勧誘方法などについて検討、その後、一人一人が、合宿の感想および今後の抱負を語った。

この合宿の直後三月の二十八日から三日間、神奈川県藤沢で、全国から集まった女子学生の合宿も行われて、かねがね女子学生の間で続けられていた和歌通信「きづな」による交流を更に深めることができた。こうして四月、われわれはそれぞれの母校で新しい学期を迎えた。前年度の雲仙合宿教室のレポート「日本への回帰」(第二集)も出版された。今夏、八月五日からひらかれる阿蘇における大合宿の案内のピラも出来上った。

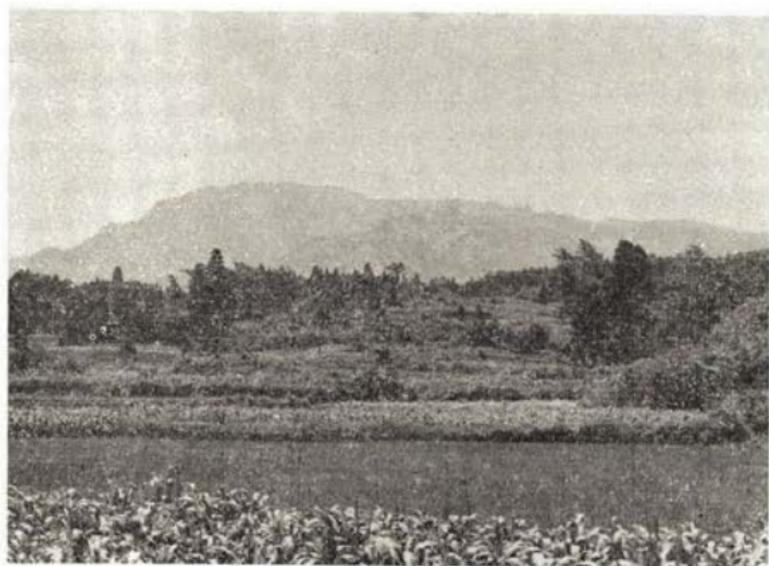
機は熟した。阿蘇大合宿を目標に、学内の未知の友に、或は近隣の大学に友を求めて、心と心をつなぐ網の目は次々にひろげられていった。

第十二回「合宿教室」

のあらまし

岡山大学理学部三年

伊藤三樹夫



講義

パネル・ディスカッション

短歌創作・相互批評

班別討論・班別輪読

慰霊祭

カット・合宿地よりのぞむ阿蘇高岳

昨年、早稲田大学の紛争に続き、法政大学をはじめ各地で相変らず大学問題が続発している。さらに中共・ヴェトナム・イスラエルと世界の激動はたえない。国内においても浮薄な泰平ムードのうちに、様々な問題が累積し、時代は一層混沌の度を増しつつある。そのような中であつて、我々は基本的な人生態度を厳しく凝視しながら、広く世界に目を向けつつ、生きた学問を求めてゆかねばならない。かかる思いを抱きつつ我々は日常の読書会や数回にわたる地方小合宿の中で、現代に生きる青年学生の姿勢を問い続けてきたのである。

こういうつみあげの上に第十二回「合宿教室」は行われた。期間は昭和四十二年八月七日より十一日まで、場所は阿蘇五岳の麓「ホテル阿蘇の司」研修テーマは次の二つであつた。

A. 世界の動向と日本の進路

B. 基本的な人生観の探求

会場からは雄大な阿蘇の山脈が仰ぎみられ、集い寄る我々の胸にも雄渾な気迫がひしひしと迫る。幹部学生の二十数名はすでに二日前より会場に集合し、部屋の割当てや名札作り等諸準備に忙殺されている。

八月七日、いよいよ第十二回「合宿教室」開始の日である。三百三十七名という合宿教室始まって以来の多数の参加者が全国各地からつぎつぎと集つて来る。再会を喜び合う者、初参加で少し緊張気味の者、様々な友らを受付係の学生がテキパキとさばく。会場の広場には「共に

学び共に語ろう、学問と人生と祖国を」と書かれた垂幕が青い空にくっきりと浮かんでいる。参加者の内訳は次の通りであった。

◇参加学生（男子） Ⅱ東北大学、早稲田大学、中央大学、明治大学、一橋大学、東京工業大学、東京大学、日本大学、上智大学、亜細亜大学、学習院大学、国学院大学、玉川大学、国士館大学、順天堂大学、二松学舎大学、防衛大学、明星大学、拓殖大学、皇学館大学、金沢大学、富山大学、京都大学、関西大学、神戸大学、大谷技術短大、岡山大学、広島商科大学、山口大学、下関市立大学、福岡大学、福岡教育大学、九州大学、西南学院大学、大分大学、長崎大学、熊本大学、熊本商科大学、宮崎大学、鹿児島大学、鹿児島経済大学、鹿児島工業短期大学、（計一八八名）

（女子） Ⅱ東京女子大学、学習院大学、早稲田大学、日本経済短期大学、玉川大学、共立女子短期大学、実践女子大学、法政大学、山脇短期大学、岡山大学、西南学院大学、九州大学、鹿児島大学（計二二名）

◇社会人 Ⅱ福岡県高校教諭、熊本県小中学校教諭、高千穂相互銀行、宮崎トヨタ自動車株式会社、入江興産株式会社、飲食業、鹿児島経営者協会、荒木事務所、吉川工業株式会社、高田工業株式会社、新日本協議会、日本遺族会、（計五四名）

◇招聘講師四名、見学参加者七名、韓国学生団六名。

◇大学教官有志協議会五名。国民文化研究会四五名、事務局六名、総計三三七名。

参加男子学生は十、十一名を単位として、十八班を編成し、春、太宰府でおこなわれた幹部学生合宿を経験した学生が各班に班長として一名配属された。昨年とちがって、今年は副班長が廃止され、さらに男子班中、二つの班は四年生だけで特別に編成された。又数名の国民文化研究会会員が助言者として各班についた。オブザーバー参加の女子学生は八名を単位として三班を編成、社会人参加者はこれを五班に分け、会員が二名ずつ世話役としてついた。日程は別表の通りであるが、就寝の時間以後、各班の班長、ならびにこの合宿を経て社会人となった若い先輩達が集合して、その日の各班の問題点を話し合い、班運営の万全を期した。さらに今年も昨年にひき続き若い先輩達によって、「運営委員会」が構成されたが、これらの人々は班長会議終了後、日程表の検討等運営に全力をそそぎ、毎日睡眠時間は三時間足らずという状態であった。なお今年は全般の指揮を早稲田大学四年の今林賢郁君が行ったが、これは各班の連絡、朝の起床、集合の指示等並々ならぬ努力を要した。

午後三時より開会式。開会宣言につづいて国歌斉唱二回。続いて△われらの祖国を守るために命を捧げられたすべての祖先のみたま△に対して一分間の黙禱。

大学教官有志協議会の長崎大学、植木九州男先生、国民文化研究会の鹿児島大学助教川井

8月9日(水) (第3日)	8月10日(木) (第4日)	8月11日(金) (第5日)
起 床 同 左	起 床 同 左	起 床 同 左
講 義 「日本民族の中核 性格」 (林講師)	講 義 「ベトナム問題に ついて」 (山本講師)	(講 義) 「今上天皇の御歌」 (夜久)
休 憩		全体意見発表
質 疑 応 答 (林講師)	班 別 討 論	感想文執筆
記 念 撮 影	リクリエーション 中 食	閉会式・中食
中 食	(講 義) 「十七条憲法に ついて」 (小柳)	解 散
大学教官有志協 議会 挨拶	班 別 輪 読	
阿 蘇 登 山	和歌全体講評 (山田)	
夕 食 入 浴 散 歩	夕 食 入 浴 散 歩	
パネル・ディスカ ッション	班別の 和歌相互批評	
班 別 討 論	慰 霊 祭	
同 左	最後の夜の集い 就 床	

第十二回「合宿教室」のあらまし（伊藤）

第十二回「合宿教室」日程表

	8月7日(月) (第1日)	8月8日(火) (第2日)
7.00—		起床 (洗面・清掃)
8.00—		朝の集い (国旗掲揚・体操) 朝食
9.00—		挨拶 (太田講師)
10.00—		講義 「世界の転機と日本」 (木内講師)
11.00—		班別研修 (木内講師の御講義 について)
12.00—		リクリエーション
1.00—		中食
2.00—		質疑応答 (木内講師)
3.00—		班別討論
4.00—	開会式 オリエンテーション (韓国来訪団紹介) 班別での自己紹介	講義 「古典に見る日本世 界像の系譜」 (名越)
5.00—		
6.00—	夕食 入浴 散歩	夕食 入浴 散歩
7.00—		短歌導入講義 (山田)
8.00—	(講義) 「わが民族に課せら れた輝かしい宿題」 (小田村)	
9.00—		班別討論
10.00—	班別討論	
	就床	同左

修治先生、熊本大学教育学部三年の永井幸男君がそれぞれ力のこもった開会挨拶を行った。

植木先生は次のように述べられた。

△私は交通事故で怪我をしていましたが日本人としてじっとしておれない気持でやって来ました。私が常に問題としていていることは、日本人としてなさねばならない仕事とは何かということとであります。それは祖先から受け継がれてきた尊い魂をさらに受け継ぎ、残してゆくことではないか。そう思つて参加しました。▽

続いて川井先生は△今度の合宿は韓国からの参加もあつて、国際的な大合宿になった。この合宿は決して物見遊山の集会ではない。我々のめざすところはあのスローガン『共に学び共に語ろう、学問と人生と祖国を』ということにつきるが、これについて少し敷衍させていただけだ。▽と前置きされ、次のように説明をされた。

△我々は特別な学問体系を押しつけようとしてゐるのではない。大切なことは学問と人生観の一致である。学問がいくら出来てもそれを支える人間の基本的態度がなければかえつて危険だ。学問、理論の基礎となるべき姿勢の確立こそ急務である。共に学び共に語ろうとする人生は、常に自分一人が楽しむ人生ではなく、他と共なる人生、友と共に歩んでゆく人生である。広い同胞的な広がり、無限の過去につながる歴史的な人生を探究してゆきたい。

△祖国とはわれらにとつてもつとも価値ある生活単位である。我々の生命を托し、理想を实

現してゆく場は祖国をおいてありえない。現代には祖国軽視の風潮があるが、国家の運命をいかに受けとめるべきかを真剣に考えて欲しい。》

ひき続き国民文化研究会会員の紹介が行われ、最後に地元の学生を代表して永井幸男君が登壇、△私は今年四月に行われた太宰府合宿に参加して得難いものを得た。その貴重なおもいをしっかりとにぎりしめながらこの五日間を本気になつてぶつかりたい。》と決意を述べた。こうして開会式は合宿への様々な期待と緊張のうちに終つた。

次に、オリエンテーションの時間に入ったが、富山大学工学部四年の岸本弘君は自分の体験に基づき、毎日を真剣に生きることの尊さと広い大きな心を持つことの大切さを次のように訴えた。

△阿蘇のような大きな広い心をもって合宿をやりたい。広い大きな心をもつということほどんな些細なこと、小さなことも心をこめて聞くということである。顧みれば二年前の自分はいかに心が小さかつたことか。だが今、自分には友達がいる。私に友が出来たのではない。友がいたということに気付いたのだ。心が豊かになると友がいたのだということがしみじみと分つてきた。大切なことは友がいることに気付くことである。心を広く他に向け、友のまなざしを受けとめることである。私は大学生活で力いっぱい生きてきたつもりだが、真剣に考えるとますます分らないことが多くなつた。しかしこれだけはいえる。一つ一つの問題を解決するた



聴講する韓国学生

めには一つ一つからだでぶつかってゆく以外にない。自分が真剣に生きているかどうかをためすのはこの一日、この今日をおいて外にありえない。

△次にこの合宿でわれわれは日本文化を学ぶのだが、そのためには祖先の心や友の心を感じとることの出来る心をもって歴史や古典に取り組んでゆきたい。古典のいのちにふれるためには、私達もいのちをもって古典を読まねばならない。▽彼の言葉は一つ一つ明快で熱がこもり、聞く者の心に合宿への新たな決意を感じさせたのであった。続いて生活上の規律についての注意があり、オリエンテーションを終った。

ひきつづき小田村理事長によって韓国学生団の紹介が行われた。外国学生の招待は今度が始めての試みである。彼らは我々と同様に合宿の全日程に参加し両国間の親善に尽すことになっている。李団長ならびに張君が韓国語で挨拶を述べられた後、亜細亜大学の金泳国君が張

君の挨拶を次のように通釈した。

△正しい歴史は真心からのみ生まれる。皆さんがたは明日を創造する主体として、祖国が何を要求し、又祖国のために何をなすべきかを考えるためにここに集まっておられると思います。我々は皆さんの真摯なる探求ぶりを参観させていただき、我々の祖国の真の位置を世界の中で定立すべく努力するつもりです。現代はある一国だけでは存在できない。密接な関係のある隣国同士の間密な関係が必要です。これを機会に両国学生間の友情を深め合うことが出来ることを望みます。△

彼らの祖国を思う真剣な態度は強く我々の胸を打った。そしてお互いに祖国を担う青年の重要性を一人一人が胸の内にかみしめるうちに紹介は終わった。

かくて、心からこみ上げてくる合宿への闘志と張りつめた緊張の交錯のうちにいよいよ第十回「合宿教室」は始まったのである。

講 義

招聘の三講師は経済学博士山本勝市先生、経済評論家木内信胤先生、ならびに作家の林房雄先生である。各先生共に日頃より我々がその御著作に親しみ深い感銘を受けてきた先生方であり、この混迷の日本を深く憂え、縦横の御活躍をされている方々である。ご多忙の中を阿蘇に

滞在され、質疑応答を含めた三時間にわたる講義の外、パネル・ディスカッション、さらには学生の班別討論にまで時間をさいて出席され、学問の姿勢や人生の態度を心をこめてお話し下さった。書物では得ることの出来ない諸先生の人格そのものを直接肌に感じることが出来たことは貴重な体験であった。

さらに二日目の朝には亜細亜大学学長太田耕造先生もおみえになって短かい時間であったが、国を思う心情のあふれたお言葉に接することが出来たのはありがたかった。先生は「指導者の教養」と題して話されたが冒頭に経史の学についての重要性を説明された後、 \triangleleft 亡国の原因はみな国民精神の衰退による。国家は外からではなく内から亡びる \triangleright と一人一人の国民としての自覚の大切さを訴えられた。

二日目、木内先生は「世界の転機と日本」と題して講義をされた。先生は \triangleleft 現代の世界の混乱とはベトナム戦争だとか中共の文化革命などの騒ぎそのものではなく、それを見る見方が混乱しているのだ \triangleright と先ず、ものの見方の基本を述べられたあと \triangleleft 最近の世界の大きな特徴として今まで権威とされたものがその権威を失いつつある \triangleright と色々実例をあげながら説明され、 \triangleleft このような事実から察せられることは文芸復興以来、偉大な成果をあげてきた西洋思想がその限界を示しているということである。西洋思想というものについて根本から考え直さねばならない。今後は日本人が自ら生きてゆく道を見出すことが必要だ \triangleright と現代に生きるべき日本人の道

を力強く示された。

三日目、林先生は「日本民族の中核性格について」と題して講義された。先生は、日本人が国際社会の一員である為にはなによりもまず日本人でなければならぬ。日本人としての宿命を荷い、己れを成熟させ、日本の文化遺産を身につけて国際社会に参加しなければならぬと日本人としての自覚の大切さを訴えられた。更に日本民族の中核性格について説明され、神話には科学でとらえる事の出来ない重要な要素がある。民族生命の性格とその連続性を感じるためにはそれにふれることが必要である、と神話のもつ意義を強調された。

さらに四日目、山本先生によって「ベトナム問題について」と題して講義が行われた。先生は、アメリカが青年の血を流し共産化と戦ったという事実がなかったなら、日本も韓国も赤化されていたに違いない。「ベトナム侵略反対」というが、「侵略」とはどこから出てくる言葉なのか、と孤立した中で米国の痛ましきほどの努力に言及され、ベトナムの実態をくわしく話された後、もしアメリカが引上げるようなことになればその後にはむきだしの憎悪感による数倍の流血がみられるだろう。又、ラオス・カンボジア・マレーシア迄共産国の手が伸び、日本が受ける被害は想像を絶するものがある。日本人が門外漢的立場にあつて徒らに米国を非難することは許されない、とベトナム戦争に対する偏った見方の危険性を説き、もつと事実を知るべきだ、と日本のなすべき役割を力強く訴えられた。

順序が前後するが、第一日目の冒頭講義は、国文研理事長小田村寅二郎先生の「わが民族に課せられた輝かしい宿題」であった。先生は「日本人としての自覚、国民としての責任を忘れ、人類の一員であるなどと言っている者は根本的に人間観が間違っているのではないか」と「日本人であるよりも前に人類の一員」という陥りやすい思考法の誤りをきびしく批判され、日本人としての正しい生き方、日本国家の把握の仕方を具体的、歴史的に対外関係の推移を跡づけつつ言及された後、「日本人は明治以来西洋の「ゴッド」と「神」を混同してしまった。我々は宗教のもつ本質に取り組むことを根底におき、西洋文明の撰取における正しい姿勢を確立することを宿題として生きてゆかねばならない」と力強く結ばれた。

二日目の午後には岡山県立笠岡商業高校教諭名越二荒之助先生によって「古典に見る日本世界像の系譜」と題した講義が行われた。先生はソ連に抑留された体験を基にしつつ、古典に流れる日本の魂について、古事記や聖徳太子の言葉を中心に「調和の精神」を人間のありのままの姿を凝視する「固定観念にとらわれない」日本精神のすばらしさを具さに説明された。そして「地球よりも重い、いのちよりも大切なものがある。それを我々は守らねばならない」と訴えられた。

第四日目の午後の講義は、福岡県立修猷館高校教諭小柳陽太郎先生によって「聖徳太子の十七条憲法について」と題して行われた。「古典を読む時には、故人の心を偲ぶ縦横無尽の心の

働らきがなければならぬ」と古典を読む姿勢について述べられ、原典の言葉に正確にふれながら十七条憲法を説明された。〈皆と同じ心になって苦しむ事なしには「和」という統一された世界は開けてこない〉〈人間の愚かさ、醜さに目をつむった平和論などに一体何の意味があるか〉など先生の言葉には深く心にくい込むものがあつた。

最終講義は亜細亜大学教授夜久正雄先生の「今上天皇の御歌について」であつた。先生は先ず国民精神と国家の関係から話しを進められ、〈天皇を今日まで存続せしめたのは、尊厳なるもの、まことあるものを仰いでいこうとする国民一致の精神であつた。我々はそこに天皇がまことに民を思われていたという事実と、祖先が天皇を信じていたという事実をみる〉と述べられた後、〈人間の行為や思想はその人の感情によるもので、それを知るにはその人の言葉を見るしかない〉と具体的に天皇の御歌を解説された。先生は天皇の民を思う尊い心について語りつつ壇上で絶句され、一瞬水を打ったような厳肅な空気が講堂を包んだ。この大きな感動のうねりのままに講義は終つた。それは又この五日間の講義のしめくりにふさわしいすがすがしい感動であつた。

パネル・ディスカッション

今年のテーマは「現代日本の最も重要な課題は何か」である。木内・林・山本先生を中心

に、大学教官有志協議会の夜久・川井先生が並び、参加者はそれを扇形に囲んでその討論を聞くという形式である。

小田村理事長の司会のもとに、一人一人の先生が各々重要と考えておられる問題を述べられた。

まず木内先生は「今までの日本は経済に力を入れてきたが、今後、西欧思想を脱却して政治と教育を日本的で正しいものにせねばならぬ。特に小学校、大学の教育に問題がある」と指摘され、つづいて林先生は「現代は曲がった学問をしている者が大衆に迎合してまかり通っている時代であるが、このような無責任な曲学阿世の徒は世論によつてすみやかに排除すべきである。」「山本先生は「現在の政治が優柔不断で勇気がないのは、思想が混迷している為にそれらに惑わされているからである」と述べられた。さらに夜久先生は「憲法や国語問題、教育問題などに共通して見られる戦前と戦後の断絶に深く注意しなければならない。この断絶をうずめることなしに今後、日本人として進むべき道はない。」「川井先生は「国民みな心が一つにとけあわせるような日本になりたいが、かかる国民同胞感確立の為の一大啓蒙運動の展開が急務である」とそれぞれ重大な問題を提起された。

次に木内先生が昨年以來引きつづいたテーマとして戦後の国語問題についての補足説明を行われたあと「思想の混迷」についてももう少し論じて欲しいとの司会者の要望に対して、林先生

はハマルクス学者の偏狭な思想に対してもつと学生自身がめざめ、正しい教授を支持するといふ流れが学生自身の間を生れなければならない」と訴えられた。

つづいて山本先生が「現憲法の根本精神を革新しようとする団体がその憲法下で認められているのは不合理だ」と発言されたのに対して林先生は「現在あるのは憲法ではなく「占領基本法」にしか過ぎぬ」と述べられ、「不備は認めながらも現実に憲法であることは尊重せねばならぬ」と主張される山本先生との間に鋭い討論がかわされた。さらに夜久先生からは「たとえ現憲法護持論者にしろ、憲法をいのちをかけて守ろうとする意志がなく、自分の都合のよいように解釈しようとする風潮がある」と憲法そのものに対する姿勢の欠除が指摘された。

時間が少なかった為に徹底的な討論を聞かれず残念であったが、講義の時とは又ちがった諸先生の間味がひしひしと感じられ、その後の班別討論も一段と内容を深めることが出来た。

短歌創作・相互批評

合宿教室における短歌の創作は非常に重いウェイトをしめている。我々が歌をつくるのは、単なる技巧的、趣味的な目的からではなく、歌を通じて人間の情意を回復し、友の心の中にまで入ってゆくことの出来る豊かな連帯意識を培うためである。又それは言葉の訓練と同時に自己自身の心の動きを明確に凝視することの出来る力を養うためでもある。



阿蘇中岳登山

第二日目、福岡県立高松若校教諭山田輝彦先生により「短歌入門」と題した短歌創作の導入講義が行われた。

先生は芥川の「羅生門」を引用しつつ、理性が情意を侵蝕していく近代精神の危機を指摘し、 \wedge 情意の涸渇は現代の人間にとって最も重要な問題である \wedge と前置きされたあと我々は心が荒れはてていくことに対して真剣に取り組まねばならない。もう一度、素朴な人間本来の根底に帰ろう。これは決して後退ではない。我々がこの合宿で短歌をつくるのは、この豊かな情意の回復を思い、思想を語ることが許されぬからだ \wedge と歌を作ることが現代の精神状況においていかに大切なものであるかを訴えられた。そして万葉集や今次大戦に出陣した先人の歌を味わいつつ \wedge ありのままの心情を素直に表現しよう。歌を詠む気持になると人生は実に豊かなものだ \wedge と分つてくる \wedge と具体的な作歌上の技術指導が行われた。

第三日目、阿蘇登山時に短歌創作が行われ、約六三〇首

の歌稿が出来上った。この歌稿をもとに第四日目の午後、山田先生による短歌講評、さらに夜に入って班別の相互批評が行われた。歌を作ることもむずかしいが、友の歌を通じてその心の中に入ってゆくことも容易ではない。和歌をお互に批評しあうことは一つの歌を通じて心と心が和合せんとする激しい闘いなのだ。自分の歌を分ってくれた喜び、友の気持を理解し得た心のすがすがしさ——和歌というものがこんなにまで我々の心に深い繋がりをもたらすものかというのを改めて痛感したのであった。

班別討論・班別輪読

班別討論はこの合宿では欠かすことの出来ない重要な時間である。我々は単に先生方の講義を聞くだけでなく、それをどう受けとめたかを自分自身の言葉を通じて表現し合い、その内容を自分自身の血肉としなければならぬ。この班別討論はその修練の場であり、又お互いの悩みを打ちあけ合い、友の言葉一つ一つ心をこめて聞くという相互理解の場でもある。

毎日二時間程度の時間がとられたが、ここでは単なる弁説は全く通用しない。生命のない言葉がいかに空疎なものであるか、それは合宿を経験した者なら誰でも感じる痛感なのだ。そして真剣であればあるほど言葉の限界というものに気付く。何度我々は自己の思いをうまく表現できない苦しみを味ったことだろう。あのもどかしい沈黙の重苦しさ。だが、真剣に語り合え

る、心の底から自己の思いを吐き出せるということはなんとすばらしいものであろうか。人生にはこんなにも深い喜びがあったのだ。始めは不安であったが、我々の心は次第に心情の渦巻く深い心の世界に目ざめてゆくのであった。

第四日目、黒上正一郎先生の「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の班別輪読が行われた。

その前に小柳先生による輪読導入講義が行われ、本を読む時にはその著者と心を通わせ合う姿勢が前提とならねばならないことを知らされていた後だけに、読み方にも一つ一つの言葉に心を傾けようとする努力がみられた。各班によつて読む箇所は異っていたが、著者の人生を思う真摯な態度に心打たれない者はなかつたであらう。それと同時に、読書とはいかにかりそめならぬ行為であるかをひしひしと感じさせられたのである。

慰 霊 祭

昨年が続いて、今年も慰霊祭が厳粛に行われた。これはあらかじめ決つていた行事ではなく、合宿期間中の全員の意志が自らに結晶したものであった。ここに祭られる祭神は「平時、戦時をとわず日本の国を守る為に尊い命を捧げられたすべての祖先のみ霊」である。

第四日目の夜、宿舎の大広間に簡素な祭壇がもうけられた。(宿舎の裏の草原の草を刈つて祭場がしつらえられていたが、強い雷雨があるという予報で急遽変更された) 消燈された室内

では、暗闇の中に一对の蠟燭のまたたきが目にしみた。お祓に代えて、国文研の三宅将之先生により三井甲之先生の「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」の和歌が二度くりかえして朗詠される。森厳なしらべが心にしみ入るようである。続いて全員黙禱を捧げ降神の儀が行われる。「海征かば」のメロディーが静かに流れる。祭壇に神饌を捧げ、夜久正雄先生の明治天皇御製拝誦が行われる。十五首の御歌一首一首が惻々と胸に迫る。小田村理事長による祭文奏上。なお後記の祭文は理事長が合宿の緊張した空気の中で祭事の前、二時間余りで作られたもので、参加者全員の心に強い感動を呼び起した。献詠に代えて今年全員で「海征かば」を二回斉唱した。古代、大伴氏がみかどに忠誠を誓った「言立て」といわれるものに、信時潔氏が作曲したものであるが戦後教育を受けたわれわれはこれまでこの名曲をうたう機会がなかった。「海行かば 水浸く屍 山行かば 草生す屍 大君の辺へにこそ死なぬ 顧みはせじ」民族の胸深くねむる高貴な生命への帰属感情が、海鳴りのように響いてくる。異常なほどの感動がわれわれの胸をうった。終って全員一斉に二拝二拍手一拝。黙禱。かくして「海征かば」のメロディーの流れる中に、昇神の儀が行われ、しわぶき一つしない闇の中で慰霊祭はとどこおりなく終った。祖先を祭るということは理屈ではない。それは遠き祖先につらなる自己の命の尊さをひしと確める厳肅な生の確認であり、同胞へ国家へと心をはせゆく大らかな人生へのめざめである。我々は民族の伝統的儀式を通じて祖先を祭ることの

尊さを身を以て体験したのであった。儀式は午後八時四十分より約四十分を要した。その際拝誦された明治天皇御製と、奏上の祭文を左に記して置く。

△明治天皇御製拝誦▽

神祇

くのために身をかへりみぬますらをに神も力をそへざらめやは（三七）
をりにふれたる

くのためにたふれし人をおもひつつねたるその夜のゆめにみしかな
ひさしくもいくさのにはにたつひとは家なる親をさぞ思ふらむ
くのためにたふれし人をきくたびにおやの心ぞおもひやらるる
世とともに語りつたへよ国のため命をすてし人のいさをを

鏡

国のためいのちをすてしもののふの魂や鏡にいまうつるらむ（三八）

秋夕

国のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて（三九）

写真

国のためかばねをすてしますらをのすがたをつねにかかげてぞみる

凱旋の時

外国にかばねさらししますらをの魂も都にけふかへるらむ

をりにふれたる

ますらをも涙をのみて国のためたふれし人のうへを語りつ

子

みなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親のいさをを（四〇）

往時

おもかげもみえずなりけりいにしへの人のことばは耳にのこれど（四二）

おもはずも夜をふかしけり国のためたふれし人のものがたりして

神祇

わが国は神のすゑなり神まつる昔のでぶりわするなよゆめ（四三）

△祭 文▽

久方の天つみ空をかぎりて、雄々しく立てる阿蘇の山の真広きカルデラの真なか、緑色濃き
これの丘べを、祭りの庭と定め喚ばひ奉れるみ祖のみたまのみ前に、第十二回学生青年合宿教

室参加者三百三十名に代りて、小田村寅二郎謹み敬ひも申さく、今日の此の時を撰び、種々の品をみ前に献げまつり、み靈なごめのみ祭り仕へまつりて、告げまつらくは、われらの祖国日本を遠きいにしへにひらきたまひし、神々み祖たちのみたま、またとこしへに栄ゆく国の行末を祈りたまひつゝ、祖国の永遠のいのちのなかに、おのもおのもの、現身うつしみを捧げたまひし千万のみ祖たちのみ靈、また、現世うつしよの生くる限りを、み心傾けたまひつゝ、み国のいのちをいや高く培つちかひ育て、東洋と西洋の文化を批判撰取せんと努めたまひて、素直にて雄々しく、おほらかなるみ心もちて、いのち過ぎたまひけるみ祖たちのみ靈を、これの祭りの庭に、魂よばひまつり、おろがみまつりて、いまわれらは、われらの真心捧げてみ靈をなぐさめまつる。われらはいま、ただならぬみ国のさまに気付かしめられ、敷島の大和島根に語り継ぎ言ひ継ぎにける言の葉の道の、乱れに乱るるさまに目覚めしめられぬ。学びのみちも、われらが通ふ学び舎の気風も、また教へのみちも、教へびとの集ふ教官室も、またまつりごとのみちも、政治家の集ふ国会も、おのもおのも道ふみ迷へり。いまにして、人の真心を尊ぶことの、よろづに先立つと思ひ定めずば、悪しきけはひはいよよしげく、やがて正すすべなくなりゆかむ。ここに集ひしわれらは、われらの力足らはぬを歎き、われらの誠の、なほいたらぬを恥ぢつつ、「共に是れ凡夫」といふ聖徳太子の悲痛きはまりなき御心を仰ぎまつり、また明治天皇の、「まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり」とうたひましし大御心ををろがみまつり、われら足

らはぬ身なれども、己れの身のみをいとほしむ心を抑へ、まごころを通ひ合せ、いまの世のさ
 まいかで正さでやむべき。み祖たちのみ霊うけつぎ、つがの木のいやつぎつぎに、すめぐにの
 とはのいのちを、日の本の後の代々まで伝へまつらむ。み民われらは、心つくして努めまつら
 む。また、さきの戦ひに敗れしあとに、とづくにびとの威圧のもとにつくられし、いまのみく
 にの憲法の、その第一条にさへあきらけく記さるるところに従ひ、み民われらもろともにまめ
 やかにわが大君に仕へまつらむと誓ひまつらむ。み民われらもろともにまめやかにわが大君に
 仕へまつらむと誓ひまつらむ。天がけりますいくちよろづのみ祖たちのみ霊よ。われらの足ら
 はぬ心のうちを、うつしくみそなはしたまひ、みちびきたまへと、かしこみかしこみも申す。

×

×

最終講義のあとに全体意見発表。こみあげてくる感動をいだいて次々と登壇者が断えない。
 参加して本当によかったという心からの叫び。ある者は来年も是非参加したいと力強く言う。
 これからも真剣にやろうと訴える者。五日間の合宿の高まりが爆発したような感激であった。
 合宿全体の集約として小田村先生が、△うわつらでない国を思うところ、人を思うところが
 一粒の麦となつて生まれたとするならこれ以上の喜びはない▽と前置きされ、合宿のまとめを
 十箇条にわたつて述べられた後、△これだけは心に残してもらいたい。この人はいい友だな
 あ、えらいなあと思つた時その友達を尊敬して下さい。これを友情というのです。そのような

すなおなつき合いを広めてもらいたい。人間らしい態度と勇氣をもつて現実に処して頂きたい。と結ばれた。感想文執筆に続き正午より閉会式。訪日韓国学生団長李聖祚氏の挨拶に続き明星大学の奥田克巳先生、鹿児島大学の川井先生の挨拶があり、最後に学生代表の東京大学文科二類一年石村善悟君は、△どんなに小さくても、自分の力でこの日本を支えてゆかねばならない。合宿は終わったが我々の人生はこれからずつとつづいてゆくのだということを銘記しよう。と決意を述べた。例年通り、主催者側と参加者が向きあつて、こみ上げてくるものをかみしめつつ「螢の光」を斉唱する中で、今年の合宿もその全ての行事を終了したのであつた。

X

X

宿舎の前では、帰る者と、整理に残る者とがかたく手を握り交しつ、お互いの別れを心から惜しんでいた。

歌
集

— 学生、青年の作品より —



九大信和会合宿 (四一・一一)

脇阪君に

九州大 稲津 利比古

ひと月も顔を合はせぬ君にしもまみゆることのうれしかりけり
会合に出でこぬ君は何ゆゑと思ひめぐらすこともありけり

ほがらなる面輪を見せて語りをるその言の葉にまことこもれり

独特な言葉の響をただよはせゆつくり語る姿たくまし

古事記の輪読にて

九州大 古川 修

友どちと声朗々と読みゆけばくぐもる思ひ開けゆくなり

佐保姫の悲しき最期限のあたり見るがごとくに迫り来るなり

太宰府裏山にて

九州大 片岡 健

常盤木の木立にまじりもみぢ葉のひときはさえて美しく見ゆ

起床係をして

九州大 島津 正数

安らかに眠り入りたる友どちに起床告ぐるは心苦しも

起きねばならぬと気のみあせれどもおそくいねたる君にえ言はず

裏山にて

九州大 蒲牟田 高雄

友どちと別れてひとり分け入りぬ色づき茂れるその美しさに
ふるさとの野辺によく似たりたゞ一人友等の声を彼方に聞くも
枯れ草に寝ころびて見るもみじ葉は松の緑に赤くうかびぬ

岡山大学バルカノン合宿 (四一・一一)

岡山大 伊藤 三樹夫

汗ふきつゝ社に來れば木々の間にすでに來し友待ちてをりけり
秋風のさはやかに吹く中山の吉備津の社に友集ひ來し
合宿にむかふ思ひの足らざるを思へば恥かし己が心よ
ともすれば心ゆるみて己が氣の弱くなりゆくはげましはすれど
はるばると遠くより來る師の君もあるを思へば力湧き來ぬ
友どちと語ればたちまちあらはるゝことばの乱れを恥かしく思ふ
すなほなる己が思ひをそのままにつげにし後の心ちすがしき
言葉こそ人の生きゆく鏡なりとつくづく思ふ人と語れば

岡山大 花田美登里

おづ／＼と合宿参加を頼みしにあたたかく許されし父ありがたき
合宿に出でゆく我をがんばつておいでと祖母は見送り給ふ
静かなる神社への道急がるゝ一年の昔思ひいでつゝ

京都大学信和会合宿 (四一・一一)

御製拝誦

京都大 溝江 優

薄紅き木々に囲まれ静まれる古き宮居は美しかりけり

池の辺に群がり生ひし熊笹は寒さにあへど青く美し

詠みゆけばみ歌の調べは流れゆく早瀬に似たる心地するなり

あふれくる胸のうちなる熱きものとどめえずしてことばにつまりぬ

詠み終へし心のうちはすがすがし静けき宮の神のみ前に

京都大 案本雅之

直き心そをば命と生きゆかむ蔽しき人の世には立つとも

いたづらに思ひためらふくさ／＼の心を捨ててたゞ生くるのみ

鹿児島地区合宿 (四一・一一)

鹿児島大 北島 照明

もろともに語り尽さむ生命こめ集ひし友は少なけれども

夕つ方浜辺をあゆみて

おきつ辺ゆ吹きくる風にうちまじり湯けむり白く立ち昇りたる

初めて合宿に参加して

鹿児島大 寿美 博太郎

書読^みみつゝそを持つわが手ふるへたり違ひし我を今ぞ正さむ

み友らの胸燃えたぎる合宿の同じき道を我も行かばや

富山大学信和会合宿 (四一・一二)

富山大 煙田 重信

たのしみは思ひがけずにくる友の長き手紙をとりて読むとき

夜おそく仕事続ける父母のきびしき姿に心うたるる

富山大 岸本 弘

底びえの部屋の中にて友達と古の書を読み過しぬ

凡夫といふ言葉にこまれる痛切のおもひを語る友のみ言葉

東京地区合宿 (四一・一一)

聖徳太子憲法十七条にふれて

玉川大 山本 満

悲しみと苦しき思ひ絶えぬ日の多かりし中にこのみ言葉は

朝食の用意をしてくれた山路、岩越両兄へ 早稲田大 今林賢郁

すき間より吹き入る風にも思はるる今日の武蔵野の朝の厳しさ

朝まだきとく起き出でてみ友らは朝餉の仕度をはじめ給ひぬ

立ちのぼる湯気をふきつつ食ふ今朝の友らのみ手なる朝餉うましも

東京工大 内田 厳彦

名にし負ふ武蔵野の野辺は聞きしごと美しき野の広ごりてをり

友らみな近くにあると思ひつゝ石ころ踏みしめ道を急ぎぬ

合宿の帰途橋の上で友と別るゝに

学園に一人たりとも吾が思ひ語り伝へて過ぐすべきやは

静かなる闘志いだきてわれはたゞ友の手握りじつと目を見つ

長内先輩の語を聞きて 亜細亞大 岩越 豊雄

今立たずばわが一生はたゞ無為に過ぎゆくのみと切に思はる

願はくば己にこもらず人々に心開きて語りゆきたし

亜細亜大学「天地」より

亜細亜大 山内健生

帰省せし我を喜びとりとめのなきことどもを母は語りぬ
生活に疲れし母の手助けも出来ぬ我が身のはがゆかりけり

亜細亜大 宝辺幸盛

たらちねのみ親を思ふ心こそ学びの初めと教はりにけり
いつはらぬ心をつねに忘れずに鍛へぬくこそ学問と思へり

太宰府合宿 — 春季結集合宿 — (四二・三)

九州大 古川 修

今林君四十度発熱といふ電話をうけて

共々に合宿準備に努め来し君が病ひの知らせに驚く
遅くまで合宿日程発送に努めし疲れのひどくなりけん
思はぬこと突然起りいかにしてこれより先をせむかと迷ひつ
合宿のこと思ひつゝ君が病ひはやく癒ゆるを切に祈れり

京都大 福島義治

古川兄より電話にて今林兄の急病を知る

長かりし苦勞の疲れいでたるか合宿を前に病に臥すといふ
台宿に向ふ決意を述べし折の君の瞳は輝きてをり
君により心洗はれつたなかる我も発奮せしこと多きに

今林君の家を訪ふ

九州大 稲津利比古

なつかしき君の面輪にあらはれしやつれしあとをさびしく見まもる
注射にて熱は下がりしと答へしが咳する様は苦しげに見ゆ
幾度も寝てをれといふに聞かずして体起して語らんとする
まだ今は静養を要すと説きぬれど合宿に行くとなほも言ひ張る

九州大 志賀健一郎

集

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の御本に接して
み言葉の一つに心開かれて思はず再び読み返しみる

ますらをの心を述ぶるみ言葉に身内に熱き血潮流るる

歌

合宿参加の檄文をよみて

京都大 井上慎一

力強き言葉続きて友どちの深き憂ひのみなざるおぼゆ
学び舎の荒れたるさまを憤り正さむとするその意志尊し
学び舎を正すは生くるおのが身の姿勢正すにひとしきを知る

事務室にて

師の君の語らるる声書よみを読む声の聞え来吾を誘ふごと
大きなる討論の声聞ゆれば我もともども語りたしと思ふ

早稲田大 今林賢郁

病みつゝも友らのことのみしのばれてわが胸内ゆ思ひはせゆく
いまだ見ぬ友らもあまたいませども同じ思ひにつらなるうれしさ
もろともに集ふえにしはかりそめならず心尽してすごさせ給へや
をちこちゆ集ひ給へるみ友らよ思ひのたけを述べつくせかし

風邪のため床につきし我を案じ給へる友らのみうたをよみて
友どちの歌のかずかずよみゆくにたゞありがたしと思ふのみなり
うつゝには見えねど通ふひとすぢのいのち迫りくるこれのみうたは

班別討論にて

熊本大 永井幸男

おろかなるおのが意見を真剣に聞く友どちはありがたきかな

今林先輩回復して合宿へ来る

同志社大 長尾 治

顔色のいまだすぐれぬ先輩の馳せ来給ひし心ありがたし

慶応大 小山紹夫

思ふまま心のままをかたらへる友のまなこのきびしきかがやき

うちつけに心のたけをかたらへばきびしき友の言葉返り来

かくまでも難きことゝは思はざりきおのが心を開き語るは

藤沢女子合宿 (四二・三)

東京女子大 梅田咲子

様々の思ひを胸に集ひ来し友よ語らむ心ゆくまで

日頃より気心わかりし友なれど今いつそうのきづな強めむ

小田村先生をお迎へして

さゝやかな集ひのために忙しきみわざをさきて師は訪ひ給ひぬ

師の君に導かれつゝ書を読むそこにこめられし御心しのびつつ

くり返し読めばみいきいきと脈打つごとく胸にせまりく
み言葉の高き調べにしみじみとみ心しのびくりかえし読む

合宿の後に

合宿のよろこびこめて寄書きを友と書きたりはるかなる友へ
つつがなく心暖まる集ひ終へたゞうれしさの胸にこみあぐ

聖路加病院

延近史子

訪ぬれば竹やぶのかげの離れ屋ゆ笑ひ声高く流れ来にけり
いらつしやい明るき声の友を見て思はず我も笑み返したり
真心を尽くせと語る友の言葉に今更のごとく胸を打たるる

江の島の頂上にて

早稲田大

河原倫子

目の前の広ぐる海に点々と帆に風うけてヨットすべりゆく
海原ゆ吹き来る風も心地よく三浦半島をのぞみ見るなり
素足にて岩場に遊ぶ子供らの声聞え来るはるか下より

学習院大

小田村静代

にこやかにほゝゑみかはし語り合ふ友の瞳のかがきやきて見ゆ

合宿に気のりせぬまゝ来たれども心なごみてうれしくなりぬ

藤沢に集へる友は少けれど心通はせ共に学ばむ

ともすれば心乱るゝ我なれど身にそなへたし強き心を

「きづな」(女子学生通信誌)より

西南学院大

内野敏子

繁華街のはずれに立ちし花売りの白菊買ひて我は帰り来

さび色に濁りし秋の海静か海苔養殖の竹を沈めて

基山にて

澄みわたる空にそびえし頂きにはや登りたる人の影見ゆ

妹の受験近づく

西南学院大

大村圭子

受験地の地図を買ひ来てみつめるる旅慣れぬ母連れそふといふ

○

熱気帯び話し続ける教室の窓にはいつしか夕焼けのあり

東京女子大

梅田咲子

夕暮れて燃ゆるがごとき西空のはるかかなたに富士山の見ゆ

あかねさす日の暮れゆきて美しき武蔵野原の夕空の色

多摩川べりを友どちと歩きて

学習院大 小田村 静 代

春風にさざなみ立てて多摩川の川面は静かに流れゆくなり
高らかに笑ひ声あげ興じゐる友にまじりてそぞろ歩きぬ

静かなる川の流れにぼんやりと我を忘れてしばしたたずむ
川べりに腰をおろしてひとときをいこふわれらに涼風そよぐ

京都の町にて

早稲田大 河原 倫 子

建ちならぶ家々の屋根の黒瓦春の日うけてにぶくひかりぬ

東福寺にて

山門の黒き瓦もどつしりと大きなる寺にいともふさはし

薬師寺にて

境内の木の切株に腰をかけ真近に塔をしばしながめぬ

水色の空を背にして東塔の水煙真直ぐに伸びゆくごとし

聖観音像を見て

ふつくらと丸みをおびし手のひらに射す日のあたりてまぶしくひかりぬ

阿蘇大合宿 (四二・八)

出陣の御歌を聞きて

明治大

向田正志

御講義で読みあげられし故人の御歌の調べ胸にせまれり

阿蘇の山を一人歩まれる小田村先生の姿をみて

九州大

淵本忠信

いかにせば師の御心は安まらむ己が小さきをすまぬと思ふ

慰霊祭に参加して祈るとき、神風特攻隊の

記録映画を思ひ出して

岡山大

斉藤利明

わが国を命をかけて守りたる祖国の御霊安らかにと祈る
我もまた守りてゆかむこの国を拙き力のかぎりつくして

岡山大

田中輝和

父母に阿蘇の集ひの喜びを告ぐる筆跡に力こもりぬ

中央大

飯田勝一

歌

み友らと肩くみあはせ歌ひゆく夜のつどひは楽しかりけり

来年もまた来るのかと問ふ友にきつと来るぞと答ふるわれは
玉川大 姫野道夫

韓国学生と接して
九州大 田中康裕

戦ひたる国より来たる学生のひかるひとみはきびしさありけり

言の葉のちがひをこえて伝はりく国を思へる強き心の

天皇の御製拝誦を聞きて
早稲田大 広瀬清治

大君のみ民の上にかけらるゝ深き心を始めて知りぬ

大君の深き心を知りぬればわが国民くにたみのありがたきかな

大君の深き心を知らずして空論交せる人もあるらむ

国民よ今こそ聞けや大君のうけつぎませる深きみこころ

友どちと阿蘇合宿に集ひきて大君の御心知りてうれしき

朗々と読み上げらるゝ大御歌の調べぞ我の胸に迫り来

御心のありがたしとふ友どちの強き言葉に我もうなづく

九州大 志賀建一郎

心開き思ひのほどを述べたしと思へどつたなし我の言葉は

白煙の登り立ちゆくふかみよりほゆるが如き大地のうなりす

九州大 平山正憲

先生の心根しのびくりかへしくりかへし聞くそのみ言葉を

鹿児島大 徳田浩士

あをあをと緑したたる大阿蘇のすすき野原を風走るなり

中央大 徳永耕一

いにしへのすめらみことの御言葉は閉せる我の胸を開きぬ

九州大 小柳左門

夜久先生の御講義を聞きつつ

声つまりまぶたをとちてかなしみをこらへむとされしみ姿尊し

民の上に思ひはせたまふ天皇のかしこき御歌をありがたく聞く

長内先生を囲んでの最後の夜の集ひにて
長崎大 白石肇

高らかに詩を吟じらるる師の御声部屋いっばいに響きわたりぬ

おとなしき友も大声はりあげておのが校歌を歌ひゆくかな

鹿児島工業短大 稲留信男

ひざまじへ語りし友のその姿むねにきざみて帰らむ我は

胸の内確かむるごとく語りゆく友の言の葉心に残れり

鹿児島大 松木 昭

慰霊祭にて

九州大 稲津 利比古

ほの暗き祭壇にむかひ祖先みやらのみ霊なぐさむ今宵尊し
ひもろぎにみ霊降くだられしと思ひつつ声高らかな朗詠を聞く
「海征かば」を皆と歌へば胸内の思ひ高まり涙出で来ぬ

大分大 中原 義人

ゆく道の遠くひとすぢつらなればまごころこめて生きむとぞ思ふ

岡山大 伊藤 三樹夫

はるかなる阿蘇のすそ野を友どちの声も高らかにバスはゆくなり
むくむくと湧き上りくる噴煙に大地のいぶきの力を感じぬ
地の底にこもる力のあるふれ出て永遠とほに燃ゆるか阿蘇の火の山

長崎大 安東 巖

三日前は互ひに知らぬ友どちが肩くみあひて写真とりあふ

献詠の代りに「海ゆかば」を歌ふ時にあたりて

歌ひつつ涙こぼれぬ国の為命を捨てし英^{みたま}霊思へば

合宿に初参加して

鹿児島大 中西和夫

めがねごしに笑みたまふ師にむかへられ来て良かりしと顔ほころびぬ

オリエンテーションにて

富山大 岸本弘

全国ゆ集ひし友に我が思ひをいかに伝へむと心さはぎぬ

我が声の高まりゆくを覚えつゝただひたすらに語り尽くせり

講義が終り床の中で

亜細亜大 才川晋

今一度師の御講義のみ言葉をかみしめてをれば胸迫り来ぬ

ひしひしと迫り来る師のみ言葉にいかに生きむかと心迷ひぬ

自己紹介にて

九州大 小松大輔

はじめての友にわが名をつぐるとき身のひきしまるおもひしにけり

夜ふけまで語りし友のその姿また見むと思ふ心つのりく

中央大 小山吉継

各地より集ひ来りし友どちと語り合ふのも四度となりぬ

九州大 片岡健

おのがじし思ひをこめてうつたふる友らの心にかにそふべき

おのおのが思ひをこめて語れどもなぜか心の通はざりけり

語り合ひ語り合ひしてわづかにも友らの心にふるるうれしさ

班にて

学習院大 小田村静代

何故か心閉して打ちとけ得ぬ友と語りぬ夜の更くるまで

とつとつと思ひを述ぶるその友の目は輝き来夜の更け行けば

心こめ語りてゆけばかたくなと見えにし友も素直なりけり

早稲田大 河原倫子

乳を呑む子馬見つむる母馬のまなざしやさしく慈愛に満てり

小田村先生の御講義を承りて

岡山大 三宅教子

活字にてひそかに知りし師の君のみ声聞きつつ心ときめく

東京女子大 梅田 咲子

息荒くやうやく着きし山頂に立てば山風耳もとに鳴る
灰色の雲の下りきて草原の彼方の馬のかげうすれゆく

夜久先生の御講義を聞きて

九州大 浜田 博子

天皇を思はるる師はみ心のあふるるまゝに御声つまりぬ

福岡県八幡西高校教諭 村田 英雄

感激に目をかがやかし語り合ふ若人達の頼もしきかな

知らざりし同室の人も何時のまにか別れ難き友となりぬる

班員の方々と話しつゝ 福岡県立香椎高校教諭 田中 利一

はげましつはげまされつゝおのがじし進みゆかましまこと求めて

夜久先生のご講義をききて

師の君の心のさけびいたきほど胸にせまりて泣かまく思ほゆ

熊本県山鹿市大道中学校教諭 中満 重明

歌 カルデラの夜空を裂きて雷雨来ぬ討論の声の激するとき

さはやかに朝明けは来ぬすさまじき阿蘇の雷雨のしづまりしのち

休憩の時若き学生たちと情熱をこめて

話し給へる師の様を見て

熊本市江南中学校教諭

広瀬和夫

ひとこともききのがさじと見つめぬる姿うつくし師をかこむ友

八代市立第三中学校教諭

水木正和

日程を告ぐる係の声きびしゆるみし心にむちうつごとく

乱れたるこの世になほも一すぢの光かゝぐる人々のあり

全体意見発表を聞きて

熊本市立竜南中学校教諭

石村俊明

涙してとつとつのぶる若人のまことに打たれわれも涙す

亡き戦友を偲びて

熊本市立京陵中学校教諭

郡保雄

散りゆきし友思ひつつはたとせをなすべしらず今日までは来ぬ
ひとたびはすてし生命をあらたにもささげむと誓ふ大阿蘇の峰に

今上陛下の御製を讀みて

熊本県砥用東中学校教諭

北島道治

身にかへて止めたまひしといふ終戦の御製を讀めば涙せき上ぐ

あ と が き

窓の外はすでに青葉、若々しい自然のいぶきがみなぎっているが、木々の葉末のかすかなそよぎにも、み
 国のさまただならぬを思わしめられるこのごろである。エンタープライズの入港とともにあげた昭和四十三
 年は、事ある毎に国民の志気の衰弱を白日のもとにさらした。国家生命を分断せんとする左翼勢力の暴挙と
 その前になすべを知らぬ、所謂良識層の低迷とは、来るべき一九七〇年を前にひかえて、無気味なまでの
 緊迫感をおぼえさせる。この混沌とした時代のただ中に、「葦牙」のごとく萌えあがるものは何か。それを
 念じつつ、われわれは本書を出版した。

今年の第十三回「合宿教室」は八月三日より七日迄、霧島の「キリシマ第一ホテル」に決定、講師として
 は、昨年にひきつづき木内信胤先生（九回目）と、ドイツ文学者竹山道雄（三回目）、政治評論家の高谷覚
 蔵（初回）の両先生をお迎えすることになっている。韓国、高千穂の霊峰のふもと、遠く錦江湾に浮ぶ桜島
 を望む雄大な霧島の高原に、全国の友らの集う日も、三月あとに迫った。再会する師友のおもかげと未知の
 友らのまなざしを偲びつつ編集の筆を擱きたい。

昭和四十三年五月十日

編 集 委 員

(岡山)	三宅将之
(北九州)	山田輝彦
(福岡)	小林国男
(福岡)	小柳陽太郎

■ 国民文化研究会
出版図書目録

A 6 版 88頁 定価 150円 千40円



混迷の時代に指標を求めて

青年、学生に訴う

青年、学生諸君!!

われわれ—国民文化研究会—は、諸君に深い関心と大きな期待を寄せている。

なぜならば、諸君は国民各層の中でもっとも活力に

富み、真理と正義に対して、もっとも敏感な年令の人

たちであるから。次代を背負うものは諸君である。

混迷に沈淪しつつある祖国の命運を聞く鍵を托された

ものは、諸君をおいて他にはないからである。

このレポートに収録された内容についての価値批判は読まれる方々のお心のままにおまかせすべきですが、こうした事業が自発的に生まれだしたこと、三十才台の人々が、直接に二十才台の人々の啓蒙にのりだしたところなどは、味あうべき問題をもっていると思う。

—「はしがき」から—

講義

経済学の考え方と日本経済への

適用および政策の方向：石村暢五郎

平和革命論の検討：川井修治

世界史の発展：広田洋二

日米開戦の真相：渡辺 明

ソビエト第二十回大会における

「スターリン批判」を中心に：日下 藤吾

マルクス資本主義崩壊必然論

について：吉田 靖彦

共産治下国民生活の実態：名越二荒之助

昭和史をめぐって：森 裕三

社会主義文学理論の検討：山田 輝彦

民族的抒情の回復を阻むもの小柳陽太郎

抒情詩論：夜久 正雄

日本政治の再建のために—特に天皇制の

問題について—：小田村寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等—写真

A6版 定価 50円 ㊦20円



民族自立のために

—ぼくらはかく祈り かく意志する—

—戦死した友と未だ見ぬ子孫に
この書を捧げる—

国民文化研究会

目次

- 民族復興の根底をつちかうもの
- 合宿にいたる経過
- 合宿人員の構成
- 経過報告
- 班別編成
- 班別討論
- 全体討論
- 講師別討論

- 合宿感想集
- 参加者からの手紙
- 参加学生、青年に訴う
- 写真—

講義

- 現代日本の盲点……………名越二荒之助
- 現代思想の根本課題……………川井修治
- 歴史観の諸問題……………浅野晃
- 世界経済の基本的動向……………伊部政一
- 日本経済の特質と
- 経済計画の方向……………石村暢五郎
- 日本文化の位置……………竹山道雄
- 現代哲学の窮極の問題……………高山岩男
- 日本文化の源流—聖徳太子の
- 信仰思想を中心として……………高木尚一
- 日本文化の血脈……………南波恕一
- 学生生活と国民生活……………小田村寅二郎

新書版 113頁 定価 100円 30円

民族復興の根柢を培うもの



○パネル式座談会「共産社会に住んでみて」

—在ソ11年児玉氏・杉本氏・同8年池田氏
同5年名越氏・同4年富岡氏・同2年川井氏
○参加者全員に和歌創作の手ほどきをなし、
全員創作を行なう。

○班別討論会

○感想発表会

……わたしたちの念願する窮極の目標は、真の意味での日本民族の自立であり、正しい意味でのその復興である。まことの「独立と平和」を念じながらこの書を

刊行した。

—写 真—

講 義

合宿教室の意図するもの……川井 修治

現代日本の盲点……名越二荒之助

所謂、資本主義社会と

社会主義社会について……石坂 豊明

共産主義対策への私見……木 下 彪

経済学の日本的思考……石村 暢五郎

古典のいのち……南波 恕一

聖徳太子研究と現代……高木 尚一

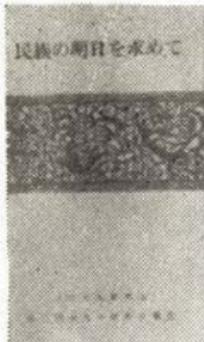
日教組は現状から

脱却すべし……浜田 収二郎

人間性に立脚する政治……小田村寅二郎

分裂を統一に導くもの……南波 恕一

新書版 250頁 定価 200円 40円



民族の明日を求めて

「はしがき」から

現代は「わかりきったこと」がわからなくなってしまう
っていたり、「あたりまえのこと」が、かえってもの
めずらしげに見られたりしている。
国を愛することも、民族の道統を求めめることも、なに
か、かたくなな人たちだけのものにされてしまつて、現
代—終戦後—の日本に生きる人にとっては、それらは、
はれものにさわるような、こわいしろものにされたまま
になつてしまった。

目次

- 第一日 友らの邂逅(かいこう)
 - 第二日 民族の意志回復のために
 - 第三日 思想の流れをみつめて
 - 第四日 よろこびと前進のために
- 附 合宿感想集、外
—写 真—

講義

- 共通の広場の形成するもの：瀬上安正
- 人間性「解放」の道
- 国民共同体の現実—基盤—小田村寅二郎
- 天皇制の本質：森 三十郎
- 日中関係の過去・
- 現在・将来：木下 彪
- 道徳の周囲：山田輝彦
- バイブルを統綜する
- 日本文化の遺法：名越二荒之助
- 生理学・医学の流れ：小川 幸男
- 階級史観と民族の問題：川井修治
- 日本における社会主義の運命
- 革新陣営の発生と
- 現状および将来：菊池 紳隆
- 戦後意識の論理
- 現代教育刷新の基本課題：勝部真長
- 詩的精神興隆に
- 期待するもの：小田村寅二郎

B 6 版 365頁 定価 500円 90円

(三部作その一) 理想社 刊行

国民同胞感の探求



目次

はしがき

合宿教室 誕生の背景

一、現代の国民思想について

二、全学連の動きについて

三、全学連にどう対処すべきか

四、時代の断層と取り組んで

合宿教室 運営のあらまし

一、講義と班別討論の関連性

二、チューターシップ

三、人生観に裏づけされた諸講義

阿蘇 合宿教室 の記録

一、未知の者ここに集う(第一日)

二、緊張する心を講義と討論に(第二日)

三、心の揺らぎと青春の歓喜と(第三日)

四、時代の断層をふみ越えて(第四日)

五、国民同胞感の生成へ(第五日)

はしがきの感想文から
あとがき

写真 真一

講義

人生・学問・祖国……………川井 修治

学生生活に対する要望……………宝 辺 正久

現代と心理戦……………今 立 鉄雄

学生運動への疑問点……………植 木 九州男

社会思想の構造と

マルクス主義……………長 野 敏一

学 問 論……………戸 川 尚

陶淵明の詩における

東洋的人間像……………津 下 正章

わが国固有の人間観の特徴……………野 口 恒樹

日本人のころ……………花 田 大五郎

マルクス経済学の生成と

近代経済学……………石 村 暢五郎

畏と敬と恥……………水 野 武夫

第二次大戦論……………中 山 優

歴史なき現代に思う……………木 下 彪

マッカーサー憲法と

国民主権……………森 三十郎

平和国家建設の

基本的課題……………小 田 村 寅二郎

班別討論・意見発表会・検討会等



B 6 版 433頁 定価 560円 千 100円

(三部作その二) 一理想社 刊行一

続 国民同胞の探求

目次

はしがき

現代の問題点

一、初の宇宙人・ガガーリン少佐

二、ソ連の教育と日本の教育

三、全学連と大学自治会

付、自治会活動への所感

“雲仙合宿教室”の目ざしたも

“雲仙合宿教室”の記録

一、学生による全体討議(第一日)

二、講義から班別討論へ(第二日)

三、唯物史観の横行を許さず(第三日)

四、経済の諸問題とその研究方法論(第四日)

五、“開かれた日本人”へ(第五日)

はしがきの感想文から

十日後に書かれた感想文から

あとがき

—写 真—

講義

体験と思想……………夜久 正雄

現代の思想的課題……………齊藤 知正

新中国建設の原動力……………佐藤慎一郎

日本文化の伝統と

現代的意義……………黒岩 一郎

現代政治の批判と

新しい指標……………羽田 重房

世界の経済と

日本経済(一)……………木内 信胤

良識について……………花田 大五郎

五日間の生活を

ともにして……………小田村寅二郎

思いのままに訴う……………

木下 彪・野口 恒樹

水野 武夫・峯 辰次

植木九州男・津下 正章

班別討論・意見発表会・検討会等

B 6 版 325頁 定価 500円 80円

(三部作その三) 理想社 刊行一

続々 国民同胞感の探求



国民同胞感の探求

目次

はしがき

国民同胞感……………小泉 信三

—毎日新聞より転載—

学問の興隆のために

正しい研究方法を求めて

……………小田村寅二郎

第二次雲仙合宿教室のあらまし

合宿教室における講義(下記)

合宿教室運営の焦点

一、班別討論と夜の検討会

二、大教協・国文研会員の所見発表

三、合宿教室の総括的所見

はしがきの感想文から(77通)

あとがき

—写真—

講義

国民同胞感の育成への

努力と指向……………小田村寅二郎

学問と人生……………津下 正章

EECをめぐる世界の経済と

日本の経済……………木内 信胤

学生時代を回顧しつつ

現代の学生諸君に……………花田 大五郎

吉田松陰を中心とした

幕末日本の文化精神……………川井 修治

小林秀雄先生のご講義

「現代の思想」……………国武 忠彦記

(所見発表)

大学教官有志協議会……………

水野武夫・黒岩一郎・末吉 哲

植木九州男・吉田靖彦

国民文化研究会……………

小柳陽太郎・山田輝彦・岡本弘之

宝辺 正久・加藤善之・徳永正己

坪井保国・加藤敏治・関根康弘

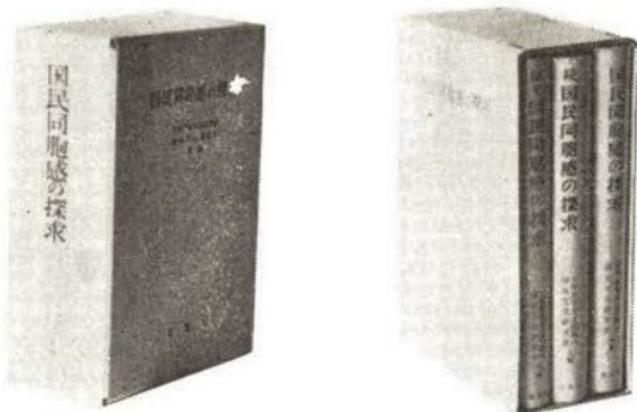
瀬上 安正

“合宿教室” レポート { No. 5 国民同胞感の探求
 No. 6 続国民同胞感の探求
 No. 7 続々国民同胞感の探求

大学教官有志協議会 } 共編
 国民文化研究会 }

—理想社 刊行—

国民同胞感の探求 三部作セット



定価 1,560円 ㊦ 270円

若き青年・学生の勉強の友として、この三部セットは、疲れた心をいつも休めてもくれるし、また無限の発展の可能性をたたえる祖国日本の学道の息吹きとその生命のほとばしりとを、身近かにしのばせてくれる。

“合宿教室” レポートは、これからも毎年一冊ずつ出版されていくであろうが、本書はぜひとも書架に一組お備えください。

……お申込みは国民文化研究会へ……

新書版 248頁 定価 200円 千 50円

新しい学風を興すために

第一集

（附）合宿教室における短歌創作の記録



「いまここに第七回目の合宿教室を迎えるにあたって、私たち主催者は今回からは「国民同胞感」を「探求」するという心境を脱して、いままでの六回にわたる合宿とはやや心組みを変えております。すなわちこれからは「国民同胞感」を日本国中に拡大していこう、樹立していこう、健全に拡がらせよう、ということを目ざして四泊五日の合宿を踏み出したいと考えているのです。」

「この合宿教室のめざすもの」から
― 巻末には参加者全員の短歌作品の総数九百余首の中より一人一首以上をとり、二五八首の短歌を収録した―

目次

- 一、国民同胞感樹立のために
第七回「合宿教室のあらまし」
この合宿教室のめざすもの
- 二、合宿教室における講義
現代の思想的課題……福田 恆存
世界の見方……木内 信胤
- 三、合宿教室における短歌創作
短歌の哲学と技術……夜久 正雄
第一回短歌創作と批評
第二回短歌創作の記録

新書版 298頁 定価 300円 50円

新しい学風を興すために

第二集

合宿教室は、学生諸君が個我の殻を破って、友情の世界に開眼する場でなければならぬ。国の運命と人生の課題に、真正面から真剣にとり組む体験を共にすることによって、失われつつある連帯感が回復されねばならない。権力やイデオロギーによって、人為的に作り出された連帯感ではなく、青年の内発的な意志によって魂がたぎ合わされてゆくならば、それは国の根底を培う大きな力となるであろう。

—「はしがき」から—

目次

一、合宿教室の意義

「戦後」二十年の日本とわれら同人の折り

第八回「合宿教室」のあらまし

二、合宿教室における講義

物の考え方……竹山 道雄

最近の世界と日本……木内 信胤

(附：パネル・ディスカッション)

現代の政治的危機……木下 広居

三、合宿教室における論議と短歌創作

「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の論議……小田村寅二郎

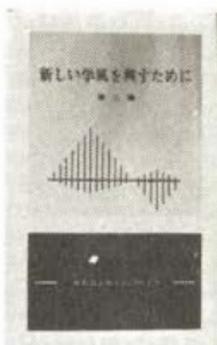
短歌創作について……山田 輝彦
夜久 正雄

雲仙合宿歌集

新書版 299頁 定価 300円 50円

新しい学風を興すために

第三集



“この合宿ではお互いに思想を鍛えて行くわけですが、こゝで注意しておきたいのは、思想とは生活の根本を支える心の姿勢そのものだということです。普通、思想というと、思想大系と殆んど同義語とみなされておりますが、本来思想とは体系化された複雑なものではなく、単純素朴なものでなければならぬと思います。他人の思想体系にすがってしか、もの言えない人が多い今日の風潮において、特にこの点を強調しておきたいと思えます。”

——「思想の形成」から——

目次

- 一、新しい学生運動の展開
雲仙合宿から桜島合宿へ
第九回「合宿教室」のあらまし
思想の形成……夜久 正雄
 - 二、合宿教室における講義(その一)
日本の政治と外交……広田 洋二
日本の政治と経済……木内 信胤
(附：パネル・ディスカッション)
常識について……小林 秀雄
 - 三、合宿教室における講義(その二)
歴史と人生観……川井 修治
現代日本の二つの問題点……
小田村寅二郎
- 歌集——この一年の学生短歌作品より

新書版 295頁 定価 300円 50円



日本への回帰

第一集

日本青年の心に魂と魂が響き合うよう
こびが実感された時、思想の低迷は必ず
打ち破られるであろう。意志は指標を見
出し、視野は世界へ開かれるであろう。
人の心が正確に働かねば一切の組織や制
度は空しい。

雄々しい意志と、みずみずしい情感を
もって果敢に現実に向かえる青年、
そういう一人の「人物」の養成にわれわ
れの希いはかけられている。このメカニ
カルな時代に、野暮とも愚直ともいわれ
ながら一人から一人への「志」の伝達に
心血をそそいできた。この冊子は、そう
いうわれわれの苦闘のささやかな記録で
ある。

—「はしがき」から—

目次

- 一、学問・人生・祖国
私達の学生運動
第十回「合宿教室」のあらまし
- 二、合宿教室における講義
私の構想する世界の新秩序
……木内信胤
- 日本の情緒について
……岡 潔
- 日本政治の憂うべき動向
……花見達二
- パネル・ディスカッション
- 三、古典入門
吉田松陰「士規七則」
……政村敏雄
- 山鹿素行について
……筒井清彦
- 聖徳太子「勝鬘経義疏」
……夜久正雄
- 天皇と天皇のみ歌……山田輝彦
- 吉田松陰「講孟餘話」
……小柳陽太郎

合宿歌集

新書版 320頁 定価 300円 千50円

日本への回帰

第二集



戦後思想の最大の盲点は、われわれの視野から「国家」と「死」の観念がすっぽりと脱落していたことであつた。国家とはわれわれにとって、選択の対象ではなく運命であり、「存在」ではなくして「価値」である。遠い祖先と遙かな子孫を包含する「国」は血脈の集団であり、われわれの生命がそこから来、そこへ帰る母胎である。人間がその生命のうつろいやすきを知り、その依拠を求める時、最も身近にあるものは国のいのちである。われわれにとって、それは「祖国日本」である。

——「はしがき」から——

目次

一、思想と人生

マルクス主義の超克……………川井修治
われわれ人間は自分ひとりで生きて
いるのではない……………小田村寅一郎

二、合宿教室における諸義

近代化の意味とその克服……………福田恒存
私の経済哲学……………木内信胤
パネル・ディスカッション

三、日本のこころ

聖徳太子のお言葉……………夜久正雄
古事記のいのち……………戸川 尚
自己克服……………小柳陽太郎
明治の精神……………山田 輝彦
短歌入門……………山田 輝彦

年間活動報告

新書版 246頁 定価 280円 ㊦ 50円

〈国文研叢書 1〉

古事記のいのち

夜久正雄 著



古事記のいのち

夜久正雄 著

遠い古代の異つた生活の表現の中にも、遠い異国の見知らぬ生活の表現の中にも、現代のわれわれ自身のすがたと変らぬ姿を見るとき、われわれは、そこに永遠の中の自己を見るのです。いま皆さんとこれから「古事記」を読まうとするのも結局は、かういふ心持からであります。世間でいふやうな意味での学術的研究作業としてはありません。「古事記」というものから、自分の心の支へ、自分の心の、生きてゆく上の力を得ようといふ態度で読まうとします。

— 本書三〇頁 —

目次

- 一、古事記への道
- 二、古事記の魅力
- 三、国作りの叙事詩
- 四、古事記の主題
- 五、愛の歌
- 六、古事記のあらすぢ

(附)

日本古代史略年表

新書版 279頁 非売品

<国文研叢書 2>

日本精神史鈔

—親鸞と実朝の系譜—

桑原 暁 一 著



この小著は親鸞と実朝とが前面に出てはいるが、いずれも聖徳太子とのかかわりを心に止めてとらえられているのである。その太子の精神とは何か。一言にして云えばそれは「和」である。仏教語で、忍辱であり慈悲である。云いかえれば目に角を立てぬことであり、思いやりあることである。さらに云いかえれば、是非・善悪の名によって、にわか人間を裁断せぬことであり、自他をわかつた悲喜を共にすることである。

—「はしがき」より—

目次

第一編

親鸞とその系譜

第二編

源実朝覚書

第三編

塔と橋と

新書版 241頁 非売品

〈国文研叢書 3〉

弁証法批判の歴史

高木尚一著

人生の学、人生のロジックというものがいかに大切であるか。たとえば今の世には進歩派と保守派の二つしかなく、前者は善で、後者は悪であるとの、簡単な色分けの上に立って考えたりするのは人生のロジックとしての厳密さを全く欠いているからに外ならない。

本書はヘーゲル・マルクスの弁証法がベルゲソン、ヴント等によって批判され地についた論となる過程を説明し、日本の思想の開展すべき方向を明らかにしようとするのが第一の目標である。

—第一章より—

目次

- 一、弁証法とは何か
 - 二、弁証法批判の歴史
 - ギリシャ弁証法とアリストテレス
 - カントよりヘーゲルへ
 - ヴァインデルバントのヘーゲル批判
 - ゲーテとヘーゲル
 - マルクスのヘーゲル批判
 - ショーペンハウエルのヘーゲル酷評
 - ニーチェの超人思想と弁証法
 - キェルケゴールのヘーゲル批判
 - ベルゲソンの弁証法批判
 - ヴントの思想と弁証法批判
 - 三、日本思想と弁証法
 - 日本思想の動向
 - 道元と山鹿素行
- (以下略)

新書版 309頁 頒価 320円 円50円

〈国文研叢書4〉

日本思想の系譜

—文献資料集(上)—

小田村寅二郎 編

日本思想の系譜
小田村寅二郎 編
大塚書店 昭和二十一年

われわれ日本人は、二千有余年ものあいだ「一言語・一民族」であり得た。そのおかげで、古典の作者が、現代に生き返ってきて私たちに語りかけてくれ、私たちは、それに耳を傾けることができる。

何という有難いことだろうか。

私たちは自身の勉学の姿勢如何によつて、私たちは、過去とつながり、未来へ進む道を求められる。それもこれも、日本という祖国が、多くの先人たちの、いのちをかけた郷土愛、祖国愛によつて、長いあいだ独立を保ち得ていたからである。本書を編集しながら、一つ一つの古典を読みかえして、私はいくたびかそのことを心に思つた。

——「はしがき」から——

目次

はしがき

日本思想と和歌との関係について

一、古代

聖徳太子—古事記—日本書紀—万葉集—最澄・空海—祝詞—菅原道真—紫式部—古代における天皇の御歌

二、中世

平家物語—慈円—法然—親鸞—実朝—後鳥羽院—道元—日蓮—北畠親房—太平記—宗良親王—世阿弥—蓮如—中世における天皇の御歌

附録

新書版 317頁 頒価 320円 千50円

〈国文研叢書 5〉

日本思想の系譜

— 文献資料集 (中・その一) —

小田村寅二郎 編

日本の「近世」は、政治的には個人が非自由に見えるが、われわれの祖先たちはその環境の中でも、決して心の底まで卑屈になってしまったようなことはなかった。社会的な身分の差別に束縛されながらも、精神的には、その差別にとらわれずに、心の中では、人間としての平等な人生価値を追求しようとしており、お互いにその人生価値を追求する姿勢を敬仰し合う心情が、身分の差異を越えて交流し合っていた。現代思潮の中にいるわれわれ日本人は、つい、この点を見落しがちであることを反省したいと思う。

——「はしがき」から——

目次

はしがき

三、近世(その一)

- 戦国武将の和歌—千利休—ザビエル
—フロイス—信長公記—太閤記—宮
本武蔵—佐倉惣五郎—山鹿素行—契
沖—坂田藤十郎—近松—芭蕉—荻生
徂徠—葉隠—蕪村—田安宗武—賀茂
真淵—山県大弼—杉田玄白—林子平
—本居宣長—伴信友—会沢正志斎—
頼山陽—広瀬淡窓—渡辺華山—近世
における天皇の御歌

附録



新書版 283頁 頒価 300円 円50円

〈国文研叢書 9〉

歴史と人生観

—マルクス主義の超克—

川井修治 著

歴史と人生観

国文研叢書

共産圏動揺の兆はようやくやくにしてマルクス主義超克のための時節の到来を告げるもののようにある。マルクス主義の唯物史観を克服するためには、単にマルクス理論の論理的不備をついたり或はマルクス理論を反証する歴史事実を挙げるだけでは不十分である。

唯物史観を真に超克するためには、その人間観の奥底にまで立ち到って歴史と人間とのつながりそのものを問題にしななければならぬ。

(本書一九頁)

目次

- 一、歪められた戦後の歴史感覚
- 二、歴史の見方
歴史とは何か——歴史的時間の構造
——歴史的理解について——歴史観の種々相
- 三、唯物史観の概要
唯物論の内容——唯物弁証法の内容
——唯物史観の内容
- 四、唯物史観批判
マルクス主義成立の時代的背景——
唯物弁証法批判——唯物史観批判
- 五、マルクス主義と現代世界



著 者

黒 上 正 一 部 著

聖徳太子の信仰思想 と日本文化創業

原著は昭和十年七月二十一日、第一高等学校昭信会によって世に出たものであるが、昭和四十一年に至って原著を完全に復元し、更に憲法拾七条をはじめ太子関係の資料をそえて出版されたものである。

著者黒上氏は昭和五年、三十才の若さで死去した。明治三十三年、徳島市の素封家に生まれ、商業学校をでて、阿波銀行に勤めた。聡明な宗教家の素質は、少年時代から芽生え、独学で親らん、日蓮の経文から、聖徳太子の研究に進み、特に本書の述作には、一語一句に心血を注いだ。昭和三年三・一五事件のあと、一高に昭信会、高師に信和会という研究グループが生まれたが、共産主義運動の渦巻くなかで、著者は毅然たる態度で学生を指導し、太子のご精神を若い次代の青年に伝えたのである。

目 次

— 復刊のことば —

序 説

序 説 附 聖徳太子の体験過程

序 説 附 二 聖徳太子御著

第一編 「三経義疏」の内容

第二編 聖徳太子の人生観と政治生活

第三編 聖徳太子の信仰思想と国民精神

第四編 聖徳太子の大乗仏教批判
総合と国民教化

聖徳太子の御思想表現法
と法華義疏の独創的な内容

参考資料

聖徳太子の憲法拾七条

聖徳太子を中心とする系図、年譜、
聖徳太子の時代についての解説

その他

新書版 121頁 頒価 150円 千 20円

— 国民文化研究会発行 —

歌よみに与ふる書

(他 四 編)

「子規の文章は難解だが、まさかこれを現代語訳して読ませるわけにもゆくまい。それでは子規の語調が消えてしまうからである。

語調が消えるというのは、筆者の情意がなくなってしまうということである。

この情意をとまわらない灰色の理屈、実行意志のない観念——つまりイデオロギーを排したのが子規の歌論だ。その歌論から情意を抜きにするわけにはゆくまい。子規のものは、どうしても原文のまま読むよりほかに方法はない」

— 「あとがき」より —

目 次

歌よみに与ふる書

..... 明治三十一年

あきまろに答ふ

..... 明治三十一年

人々に答ふ

..... 明治三十一年

「歌話」

..... 明治三十二年

「墨汁一滴」抄

..... 明治三十四年

あとがき・解説

..... 夜久 正雄



新書版 157頁 頒価 230円 円 45円

今上天皇御歌解説

附・万葉集論

三井 甲之著 斑鳩会発行



三井甲之氏は正岡子規の遺業、根岸短歌会を継承し、雑誌「アカネ」を編集、その後「人生と表現」「原理日本」を発刊、大正、昭和の思想界に独自の地位を築いた。

「天皇御歌解説」は昭和二十七年二月、同氏が病床において一切の不自由に耐えつつ「永訣の書」として執筆、自費をもって謄写印刷の上頒布されたものである。

附載の「万葉集論」は明治四十一年から二年にわたって根岸短歌会発行の「アカネ」誌上に発表された論文を集めたもの、六十二年の長い月日をへだてて、ここにはじめて復刻された記念すべき論集である。

目次

天皇御歌解説

万葉集論

万葉集の研究に就て

詩歌製作の衝動と其表現法を論ず

和歌俳句の形式比較論及現代歌俳

墮落の原因

万葉集の女詩人・額田王

柿本人麿の生活と作歌

大伴旅人の生活と作歌

山上憶良

沙弥満誓の歌

山部赤人の歌を論ず

大伴家持

万葉集中の民謡

万葉集中第十六巻に就て

解題……………夜久正雄
刊行のことば……………亀井孝之

B5版(8頁) 毎月1回発行
昭和36年11月創刊
発行所 国民文化研究会



— 月 刊 —

国 民 同 胞

定価 1部 20円 年間 360円 (送料共)

われわれ国民文化研究会は、現代の学生生活の中に何をねがい、何を求めているか。それはイデオロギーの相剋を越えたゆたかな国民的心情を
あまねくくりひろげる以外にはない。これはまことにきさやかな機関紙
であるが、この中にこめられたわれわれのねがいに、是非とも耳をかた
むけていただきたいと思う。

申込先

下関市南部町3 宝辺正久方

月刊「国民同胞」編集部 (振替 下関 1100)

東京都中央区銀座7丁目3 柳瀬ビル

国民文化研究会 (振替 東京 60507)

葦牙

1

昭和43年
五月
東京同人

A 6版 60頁 頒価 150円 (送料共)

編集発行人

昭和43年大学卒「第五葦牙」同人

第五 葦牙

あし かび

この冊子は国民文化研究会主催の「合宿教室」に参加する機縁を得た学生が昭和四十三年の春、社会に巣立つにあたってもろもろの思いを卒直に書き綴ったものです。従ってここには現在の日本の大学のさまざまな問題点がかなりはつきりした形で提起されていると思えますし、これが、現在、それぞれの大学内において、同じような問題に必死になって取り組んでいる後輩たちに、何らかの力を与えることができれば、と思います。

——「はしがき」より——

執筆者

- (九州大) 古川 修 (東京女大) 梅田咲子
(九州大) 稲津利比呂 (九州大) 島津正数
(玉川大) 勝山啓子 (早大) 今林賢都
(富山大) 岸本 弘 (早大) 河原倫子
(京大) 溝江 優 (共立女大) 山田苑枝
(京大) 井上慎一 (共立女大) 寺田和子
(富山大) 中田一義 (京大) 福島義治
(西南大) 古川慶子 (下関市大) 梅谷道明
(熊本大) 堀切勝之 (早大) 加山和秀
(玉川大) 原 正昭 (九州大) 脇坂佳秀
(亜大) 島海利明 (玉川大) 山本 満

しきしまのみち (同人歌集)

..... 梅田咲子 編

— 日本への回帰 —

(第三集)

昭和四十三年五月二十日発行

定価 三〇〇円

〒50 円

編者 大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 小田村寅二郎

発行所 社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座七ノ三

柳瀬ビル 三階

振替 東京六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えます

